

Fate/fake savior

桜野 ヒロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

2010年代後半、突如として聖杯大戦を宣言した魔術師殺しの一族、霧島家。

その次期当主である切翔は自身の召喚したサーヴァント、セイバーに同情し、淡い恋心を抱き、彼女を助けようと奮闘する。

果たして、少年と少女の行く末は――

# 目次

開戦の狼煙《陰》	1	幽鬼の影を追え《巴》	116
開戦の狼煙《陽》	22	機械の影を追え《陽》	129
一日目・影を追う		聖騎士の影を追え《陽》	144
復讐鬼の影を追え《陰》	39	短話・不死者の影を追え	154
正体不明の影を追え《陽》	58	小鬼の影を追え《陰陽》	161
正体不明の影を追え《秤》	73	短話・一日目終了	167
開始前《陰陽》	80	二日目 光と影	
短話・復讐鬼の影を追え《無》	93	少年と聖人	170
開戦直前《陰陽》	97	少年と少女	174
狼の影を追え《陽》	106	少女と夢	180
		妻と夫	184
		復讐鬼と主	193
		信頼と不安	196

温もりと死と	200
友と騎士	207
術師と学者	213
兄と弟	220
祈りと謎	228
家族と食事	234
父と子	242
狩人と王様	250
狩人と王様	256
神父と禁忌者	262
四人と二人	268
有耶無耶と密告	274
聖女と偽物	280

聖職者と魔術師	289
夫婦と絆	294
光と影	300
三日目・侠の誓い	305
ヒーローの心得	315
獣の悲劇	321
次男の言葉	330
旭と巴	334
家族の贈り物	340
悪魔の贈り物	345
叛戦の英雄	351
華々しき、三河武士	357
最高のヒーロー	357

男の疑心

時を遡る悪魔

偽想直死

裏切の報復

365

368

372

377



# 開戦の狼煙《陰》

——幼い頃、よく父親に連れられた場所で、弟の遊人と共に、稽古という名の遊びをよくしていた。

もう、随分前に閉園した、そんなにも有名でもなく、楽しくもない廃遊園地。

確か、キッツイーランドだったか。そこで、よくかくれんぼや鬼ごっこをしていた。皆からは次期当主として、徹底的に鍛えられ、心が壊死しそうだった俺と、触れちゃいけないものに触れてしまい、一族からは異端児として扱われ、酷い仕打ちを受けている遊人が唯一、持ち堪えられる要因だった。

ある日、珍しく白い、鳩にそっくりな鳥がジェットコースターのレールの上に留まっていた。

どこことなく羨ましそうに見ている鳥を見て、俺は父親に尋ねた。

『ねえ、とうさん』

『ん、なんだい切翔<sup>せっか</sup>』

『あの鳥ってなんていうの?』

ああ、確かに珍しいね、と言いながら、親父はすぐに答えてくれた。

『あれは鳩はとだよ。』

鳩にもね、白いのがいるんだ。

よく見たら首輪が着いている、きつと飼われてたのが逃げちやつたんだろうね』

『でも、ぼく達をみて、うらやましそうにしてる』

俺が言った言葉に対して不思議そうに父が鳩を凝視する。

子供の絵空事と思っただろうか。

父は鳩から視線を俺に変えて、微笑みながら、

『ああ、きつとそうなんだろうね。』

——あの鳩は、確かに一人ぼっちだから』

そう、言っただった。

あの時の父の、悲しそうな顔を今でも、俺は記憶の中で焼き付いていた——

---

和歌山県にある、自然が広がる公園にぼつりと寂しく建っている一軒の屋敷がある。



“そこには近寄ってはいけない”というのが、魔術師達にとつての共通認識だった。過去に存在した、『魔術師殺し』と呼ばれた男、衛宮切嗣の技術を盗用し、魔術師達を殺してはその遺品を資産へと変える盗賊じみた一族の根城だからだ。

その一族の名は霧島。

元々は日本の魔術師としては突如として頭角を表したかなり有名な魔術師の一族であつたが突如として、魔術狩りを始めた。

そして、その屋敷の中に住まう老人であり、霧島一族の頭目である男、霧島義隆きりしまよしただかはこの日、一族の選ばれた者たちを集めた。

その者達の腕の甲に宿る紋様のようなモノは、ある儀式に選ばれた証拠であつた。

「——ようやつと集まつたか、ちと遅かつたな。すまんが、儂わたしは先に召喚させてもらつたぞ」

義隆の言葉に、呼ばれた面々の表情が重くなる。

避けられない、血溜まりとなる戦火へと身を投じることとなる事実への再認識、そして、その覚悟を同時に行つた故である。

そんな中、一人だけ何が起こるのか理解出来ない少年、義隆の孫の一人である霧島彪斗きりしまあやとが首を斜めに傾げながら、義隆へと尋ねた。

「あれ、今日って何が起こるんだっけジーちゃん？」

……あ、ここの近くでやる春祭りの準備だっけ!?  
なるっ。」

でも普通、こんなに重苦しく

「……戯けが」

彪斗を睨みながら、義隆は彪斗の父であり、実の息子である霧島忠吉きりしまただよしに教えてやれ、と目で指示を送る。

忠吉自身、自分の息子に呆れて落胆の溜息を零しながら彪斗に説明を始めた。

「聖杯戦争……否、父の言葉を借りるなら聖杯大戦か。」

その参加の狼煙を上げるべく、我々、霧島が聖杯大戦の駒におけるサーヴァントを召喚する儀式を行う日だ。

事前に説明を受けていたハズだが、何故こうもお前は忘れやすいのだ脳無し彪斗めが」

「いやーわりーわりー父ちゃん、ずっとゲームしてたからさー」

……確認だけどそのサーヴァントってアレだっけ、神話とかで出てくる英雄の事だっけ?」

「それ以外にも、史実で実際に活躍をした偉人達もだ」

彪斗の疑問に、忠吉が付け加えながら答える。

彪斗は答えを知って満足した……と思ったが更に、思い浮かんだ疑問を尋ねたのだっ

た。

「なあ、聖杯ってなんだっけ？」

「呆れてものも言えないとはこの事か。」

彪斗、お前はもう喋るでない、耳障りだ」

冷たくあしらいながら、義隆は話を進めた。

「さて遊人<sup>ゆうと</sup>や、お前はすっかりとあの裏切り者<sup>うらくりしや</sup>に変わるマスターの補欠<sup>ほけつ</sup>を用意したか？」

自身の孫である霧島遊人に問う。

遊人は頷きながら、手の甲にナイフのような紋様が宿るまだ幼い子供を見せた。

白い肌<sup>しろい</sup>に白い髪<sup>かみ</sup>の毛<sup>け</sup>、そしてその赤き瞳<sup>ひとみ</sup>を見て義隆がその子供の正体を看破し、遊人

に尋ねた。

「そのホームンクルス、アインツベルンのホームンクルスと似ているが、真意を尋ねようか？」

？」

遊人は、嫌味<sup>きらみ</sup>つたらしい笑みを浮かべながら答える。

「なに、僕一人じゃ作るのが難しかったからアインツベルンの方に作っていただいたの

ですよ。

ほら、僕は『電池』の方の制作も頼まれてますし？」

さすがに手一杯<sup>ていぱい</sup>でして、奥の手<sup>おくのて</sup>を取らせてもらいましたよおじい様。

いやー、僕が魔術を使って良かったですねえ。

使えてなかったらおじい様、過労死してしまいそうですもの。

これは、霧島家の他の方々に「強化」くらいしか教えなかったせいでは無いですか？

せつかく、他の人に魔術教えてたら僕のこと用無しつつて殺せましたのにねえ？」

「呵々、煽るな遊人や。」

元はと言えば魔術なんぞを勝手に会得したお前の自業自得だ。

本来ならば殺される立場なのを態々、生かしてやったのは儂だ<sup>わたし</sup>」

「……そうだ、お前は黙るべきだ遊人。」

異端児の屑のクセに我が父に楯突くな。

俺の手で殺されたいのか、ゴミクズめ」

義隆の言葉に続き、遊人を非難する、前髪で目を隠している男。

その男は義隆の次男であり、名前を霧島<sup>きりしま</sup>竹流<sup>たけなが</sup>といった。

竹流の言葉を聞いて、遊人は更に笑みを浮き彫りにして、彼を煽った。

「弱い犬ほどよく吠えるつて言うけどさあ。

まさに、竹流オジサンの事だもんねえ？

だつてアンタ、爆弾作ることしか能がないモンね。

いやまあ、凄い有能ではあるけど、それでアンタ自身が正面から戦えるってわけじゃないかんねえ」

「……なんだと」

「竹流や、熱くなつてどうする？」

「ここで遊人を殺せば、此奴の思うツボよ」

遊人へ殺意を向ける竹流を、義隆が制止する。

「……全く、貴様の弟と父親はどうなつておる切翔。」

老人の胃に穴を開けさせるつもりか？」

そして、隙あらばと切翔に嫌味を言う。

義隆自身、何の得もないのは理解している。切翔は自身の血縁のことなど興味は無いのは重々承知だし、それは弟も、父親もそうだろうと義隆は思っている。

しかし、それでも義隆は嫌味を言わずにはいれなかった。

なぜなら、遊人は自身の嫌悪する魔術師の力を会得し、婿養子である切翔の父親、霧島雅は魔術協会へと寝返つたからだだった。

その苛立ちを少しでも晴らしたかつたのだった。

——少しの間、静寂が訪れた後、切翔が義隆の言葉に応じた。

「申し訳ありません、俺自身、なぜあの父が寝返つたのかは分かりませんが、監視の任務

を任されていた私の責任です」

その言葉は、ただただ陳謝する、それだけだった。

切翔は幼い頃から義隆によって厳しい教育を施されている。

どれくらい、義隆が危険なのかはその身をもって体験していたから、逆らう気など無かった。

寧ろ、自分が無事ならロボットでもいいと思う始末である。

ただ謝る、そんな切翔の無様な姿を見て義隆は笑う、嗤う、嘲笑う。

「呵々、結構結構。」

及第点の返答だ。

貴様の弟にもそれくらいの躰を施しておくべきだったか。

……どちらにせよ、教育は失敗したワケだな」

自身の思い通りに動く操り人形めいた孫を哀れと、無様と、滑稽と嘲笑う。

「まあいい。」

さて諸君、サーヴァントを召喚しようか。

その台の上に各々の触媒を置け。

ああ、彪斗お前は儂が用意しておる、受け取れい」

元より用意してなかった彪斗に、しっかりと予想していた義隆が放り投げる。二回、

三回空で回りながらソレを危うく落しそうになるとなんとか彪斗は受け取った。

義隆が投げたそれは、大昔に使用されていたとされる盾、それが割れた金属片だった。しかし、その破片は彪斗の足が隠れるほどの大きさであり、使用者は相当背の高いものだと忠吉は推察する。

彪斗は、はて、と首を傾げるのだった。

「デカくね？」

「そういうものだ」

彪斗との会話は非常に疲れるので、義隆はすぐさま会話を切り、進行へと戻った。

「さあ、唱えるのだお前達よ。」

かの呪文を——!!」

各々、台座の上に自身が用意したモノを置く。

切翔は、錆び付いた剣の欠片を。

忠吉は、自身の体を遥かに上回るほど巨大な、槍を。

竹流は何かの布切れを。

一号は、自身という存在を触媒に。

遊人は、相当年季の入ったフラスコを。

彪斗は先程祖父に渡された盾の破片を。

そして、まるで嵐前のような静けさのような緊張感が走る中、彼らは詠唱を始めた――

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せ

よ”

順調に詠唱を進める。

そんな中、本来ならば言わない詠唱を彼らは付け加えるのだった。

それは、自身たちの図を表す呪文。

手を組む事を良しとした、彼らの結託の呪文であった――。

「太極図のように隔たれた陣営。

我らが混じるは――陰、我らは影を纏いし者達なり”

その呪文を唱え終えたあと、ようやく床に描かれていた紋様が紅く、赤黒く光り始める。

義隆は、嬉々として笑った、漸く始まった、と――

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

繰り返すつどに五度。



ただ、満たされる刻を破却する

——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者」

順調に進んだ、そんな中、突如として詠唱を彪斗以外が止める。

それに気付かぬまま、彪斗は台座に刻まれているサーヴァントを召喚する為の詠唱文に他の者達よりもひとつ加えられている詠唱を唱えるのだった。

「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者——」

それは、狂戦士を呼び出す為の文。義隆は、狂戦士という不都合の要素を彪斗という無能の要素と共に早期に片付けるつもりであり、それを皆は悟っているのだった。

彪斗が唱え終えると、他の者たちはすぐに詠唱を再開させる。

開戦の狼煙が上がるまで、もうあと数刻である——！

「汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——!!」

——刹那、一室が光に包まれ、暴風が巻き起こる。

全員、眩しさにたまらず目を隠すも暴風に吹き飛ばされないように身体にしつかりと力を入れる。

そんな中、彪斗は耐え切れずに吹き飛ばされる。

このままでは、壁に激突してしまう。

その寸前、彪斗を包むように一本の巨大な腕が彼を抱える。

彪斗の目の前には、約三メートルはあるであろう背丈の巨人がいた。

その巨人が、彪斗の事を守ったのだ。

「……はえ?」

思わず、呆けた声を出す彪斗を気にすること無くその巨人は、自身の主であるかを尋ねるのだった。

「問おう!!」

汝が、我を呼び出した者か?

聖杯にかける願いを抱く、この狂戦士を呼び出したのは、お前か?」

「た、多分オレです……」

「気弱だな、まあいい!!」

よろしく頼もう、我はサーヴァント、バーサーカーである!!

……と言つても、あまり狂つてはいないみたいだがな、ガツハツハツハツ!!!」

陽気に、笑うバーサーカー。

その姿に違和感を覚える義隆だったが、呼び出した当の本人は聖杯戦争のことは殆ど知らないの、気にしている様子は無かった。

どこか、その狂戦士に疑問と戸惑いを抱きながらも義隆は他のサーヴァント達の姿を見る。

遊人の呼び出したサーヴァント、キャスターは眼鏡をかけ、白衣を着た壮年の男であつた。

どこか、遊人を気に食わなさそうに睨んでおり、重苦しく口を開いた。

「……貴様が、私を呼んだのか？」

小童、名を聞かせ給え」

「ん、僕？」

僕ねー、霧島 遊人っていうの。

よろしくねキャスターさん？」

遊人が手を伸ばす。

しかし、キャスターはその手を叩き、握手を拒絶した。

「勘違いするなよ？」

貴様は私よりも若輩だろう、ならば貴様は私に頭を垂らすべきだろう。

対等ではない、貴様が下で、私が上だ」

「……なるほど、そういうタイプだね」

小声でキャスターの人間性を見定め、眩きながら、遊人は言われた通り頭を下げた。

「これは申し訳ないです、キャスター様。

私、霧島 遊人の呼び掛けに応じて下さり感謝であります。

……どうか、その魔術をもつてして我々に力添え頂けると助かります」

遊人の態度に、機嫌を良くしたキャスターは満足気に口角を吊り上げながら遊人の肩に手を置くのだった。

「フン、そうすればいいのだよ」

義隆はキャスターに対し、見下げた視線を向けていたが、キャスターは気付いていない様子だった。

それだけで義隆は、比較的戦闘力が低いとされるキャスターの中でも更に戦闘力が低いのを一瞬で見抜き、傲慢な態度をする男に失望に失望を重ねたのだった。

「——驚いた」

声が聞こえ、義隆は一号というマスター代理のホームクルスの方へ向く。

一号の前には、鬪體の麵を被った、全身を黒装束で包んだ青年と思わしき姿があつた。その青年が何に驚いたのか、義隆は疑問に浮かんでいたがすぐにアサシンが答えを言う。

「……正直、呼ばれるとは思つて無かつた。

だって、僕が呼ばれるとすればそれは、『死に近い者』が触媒という事のみだつたから。

——君、名前は？」

「……自分に名前は無い、一号というのが名前なら、それだが」

「……なるほど、髪といい目の色といい、キミはホームンクルスカ」

過去に見たことがあるのか、青年は一号の正体を看破した。

「よろしく頼むよ、マスター。」

暗殺者である僕は、少ししか力添え出来ないかもしれないけどまあ、精一杯頑張つて

みるさ」

青年が手を伸ばす。

少し躊躇うように手を差し伸べる一号の手を、がっしりと自ら掴みにいき、握手をする。

「……あのアサシン、相当な実力者だな。

流石、山の翁と言つたところか」

呵々、と義隆が笑う。

そして、竹流のサーヴァントを見る。

ヘラヘラと苛立ちを募らせるような笑みを浮かべる、弓を片手に持つ青年がいた。

金髪の碧眼をしたその青年は主である竹流に対してただただ、苛立つ笑みを浮かべるだけだった。

その態度に少し腹立った竹流はあえてその青年を煽るのだった。

「……可笑しいな、アーチャーを呼んだつもりだったが……バーサーカーでも呼んでしまったか？」

「おいおい、煽るなって。顔だけじゃなくて心までブサイクかよキミ。」

ただボク、君のことあんまし好きじゃなさそうだなーって思っただけさ、なんか陰気そうだし」

「貴様……!!」

「竹流、貴様先程から狼狽えすぎだ」

怒る竹流を、今度は宥めることなく睨みつける義隆。

まるで、獅子に睨まれた兎のように竹流はその気迫に押し負け、黙り込んだ。

それを好機と見たのか、青年——アーチャーのサーヴァントは、竹流を、更に煽り立てた。

「あれれ、黙っちゃおうの？」

そこはもつと言うようにしなよマスターさあ。

ただのかませ犬じゃん、ホントにつまんないなあ」

「——弓兵、先程から図に乗りすぎであるぞ」

その、アーチャーを制止するように、喉元に矛先を向ける、全身を武者鎧で覆う男。

その男は、槍を扱うランサーと呼ばれるサーヴァントだった。

その、矛先を認知してアーチャーはそのランサーを自身よりも実力が上だと、理解した。

一応、アーチャーは周囲の者が襲ってくる事を想像し、警戒はしていた。

というのに、自身の喉元に矛先を突き立てるそのランサーの異次元な速さに、アーチャーは冷や汗を浮かばせながら、ヘラヘラとした笑みを絶やさずにランサーへと振り返った。

「……速いね。生前の頃にいた足の早い韋駄天野郎を思い出すよ。

まあでも？ そいつの方が速かったかなあ。

あーあ、不安だなあ、せめてランサーにはそいつくらいの足の早いサーヴァント出会って欲しかったんだけどなあ」

「否、これは速さでは無い、技術だ。

速さが適わぬなら、それがし某はそれを上回る技術と、運で勝つてみせよう。

そして、周りを不快にさせる弓兵、そなたに理由を尋ねたい？

欲が無いなら、この争いに参加は出来ない。

そなたは願いがあり、この争いに身を投じた筈だ。

——もしや、周りを混沌とせねば気が済まない、狂わされずとも狂っているのか？」

「……ハハハ、面白いことを言うねランサー。」

キミとは心底から気が合わなさそうだ、悔しいけど、味方みたいだからよろしくねえ

？」

ランサーに問われたアーチャーが逃げるように、握手を求める。

ランサーは何も言わず、その手を握り返した。

その後、竹流の方へ近づき、深々と頭を下げ、竹流に謝罪した。

「すまぬ、弓兵の主君よ。」

代わりに、某が謝ろう。不服かもしれんが、彼は謝らぬ性格であろうゆえ、何卒ご容

赦を。

誠に御免、弓兵を思わず許せるように、某は槍を振るって、活躍してみせよう!!

極楽で見ているであろう我が主君の顔に泥を塗らぬように、言ったことは必ず守って

みせよう!!!」



高らかに、声を大にして言うランサー。

アーチャーは、明らかに無言となり、後ろへと下がった。

そうして、一触即発になりかけていたその場は収まった。

しかし、新たにまた、嵐が生まれるのだった。

「——バカな！　　貴様、偽物だろう!？」

俺が呼び出すとした、セイバーのサーヴァントは……!!」

「いいえ。何も間違っていない」

声を荒らげて自身のサーヴァントを否定するのは切翔。

そして切翔が呼び出したセイバーのサーヴァントは、凛々しい声を、容姿をした美し

き女性であった。

白鳥が描かれた着物を着ている女性は、堂々とした態度で切翔に言い放つ。

「私こそ、セイバーのサーヴァントであります。女で不服でしたか？」

……先程も申した通り、私は生前は男性と偽ることを強いられていただけでございます。

女では何か不便があるのなら申し訳ありません」

まるで、機械のように淡々と述べるセイバー。

氷のような冷たさで言う女性を見て、義隆は呵々と笑い、セイバーの實力に期待を胸

に膨らませた。

そして、開幕早々に仲に溝が入った自身の陣営を見て、中々に骨が折れそうだと溜息を零す。

しかし、気を取り直して義隆は皆に声を掛けた。

「さて、準備は整った!!」

これより、魔術協会の魔術師たちが陽の陣営として、我らへと立ち上がる!!

それを尽く屠り去り、我らが悲願である『魔術師たちの存在の抹消』を成就しよう!!

その為に、お主たちの力を存分に發揮してもらおうぞ!!」

義隆は言葉に、各々、表情を変えた。

動揺していた切翔は、どこか緊張ある面持ちに。

セイバーは、変わらず冷やかな面持ちを。

忠吉は決意したような面持ちを。

ランサーも、決意したように笑みを浮かべ、

竹流は空を仰いで何かを見ているように、

アーチャーはヘラヘラと笑みを浮かべたまま、

一号は、どこか緊張しているように、

アサシンは、そんな一号をどこか心配そうに、遊人もヘラヘラと口角を吊り上げ、

キャスターは興味無さそうに辺りを見渡し、

彪斗は何も理解していない様子で、

バーサーカーは、嬉しそうに笑みを浮かべた。

それを、返答と受け取った義隆は呵々、と笑い――宣言した。

「これより、聖杯大戦の狼煙をあげる――」

そうして、開戦の狼煙が陰で上がった。

これから、過酷な運命が待っているのを彪斗除き皆、理解しながら。

## 開戦の狼煙《陽》

——結論から出すと、私が間違っていた。

あの人を信じずに、己の愚かな淡い恋心のみを信じた、私が、間違っていたのだ。

『なんで、なんであの人を裏切ったの……？』

よりによって、貴方が、あの人に引き取られた貴方が、なんで——！！』

恋していた女性が、仇を見るような、激しい目付きで私を睨む。

他の、世話になった人達にも冷ややかな視線を向けられていて、心が痛い。

恩もあつた、皆に平等の愛情もあつた。

なのになぜ、僕はあんなことをしてしまったのだろう。

小金なんていらなかった、ただ私は、彼女が騙されていると思ひ込んで、目を覚まさ

せてあげようと思つて。

でも結局、騙されていたのは私自身だった。

私が、私の悪しき心に騙されていたのだ。



首に、ささくれのようなものが当たって少し不快感を覚えた。

でも、死ぬるならいっかと僕は割り切った。

死の間際、僕が最後に見たのは、涙を零しながら、僕の元へと駆け寄る???さんの姿だった。

必死そうに、今にも転びそうに走るその姿は泥臭いが美しくある彼女らしかった。

——ああ、なんて、愚かだ——。

こんな身勝手な僕にまだ情が残ってくれていた、その事に嬉しさを抱きながら、次に人生があるならば失敗はしないと誓い、僕は——

---

和歌山の霧島一族の住む町とは二、三個ほど離れたある町の、ホテルのロビー内では。複数の男達が集まり、なにやら会合を開いていた。

貸し切ったのか、人は誰もおらず、彼らは堂々とその場でこの世に在らざるモノの話をはじめのだった。

「今から十数年前——ルーマニアの土地で、ユグドミレニアと魔術協会との聖杯大戦が行われた。」

当初こそ、優勢だったユグドミレニアだが、自身の派閥であつた、当時は「黒」のアーチャーのマスターであるヨシタカに裏切られ、敗北することとなつた。

ヨシタカはその時、聖杯は壊したと言つていたが……やはり嘘だつたな。アイツめ、良くもまあ堂々と出来たものだよ。

そういえば、学院時代でも奴はよく嘘をついていたつけな。

まあ今回の嘘は学院時代のような悪戯目的の嘘では済まされない、とんでもない嘘だがね、彼ならやるとは思つてたさ」

赤髪の、頬が少しやつれた男が口を開き、義隆への愚痴を零す。

義隆とは仲の良さそうな、その口ぶりは往年の親友だと感じさせるモノがあつた。

「しかし、それはマズインじゃないかなあ？」

別にね、私自身、聖杯になんて些か興味ゼロだが……君の発言はどうにも義隆を護つていふような気がするねえ。

と言つても、友人だつたから仕方ないか。

かく言う私も彼とは仲が良かったがね、よく魔術の腕を見せあつていたよ!!」

懐かしんでいる赤髪の男に、黒髪を腰まで伸ばした男性が乗じる。

そんな二人を、若い金の髪を後ろに結わえた青年が、水をかけるように、二人の会話に終止符を打つのだつた。

「……あのさ、アンタらのくだらない話はいいんだよ。

オレ達の目的はなんだ、その霧島義隆の凶行を止める為だろうに。

昔話を懐かしむ老人共の井戸端会議なんて、付き合う暇なんてないのだが？」

「まあまあ、レクスくん!!

仲良くしようじゃないか、同じチームなんだからさ!!

しかしまあ、井戸端会議なんてワードよく知ってるねえ」

「……昔、日本が好きだったんでな、その時に色んな言葉を調べた。

霧島一族に友達が殺されてからは日本人のことなんて嫌いだが」

成程、と頷く二人を他所にレクスと呼ばれた青年は、憎々しく自身の後ろの二人を睨む。

一人は、正しく日本人の見た目であったが一人は、どこか西洋人の顔立ちに似ていた。

しかし、本人が日本人と言い張る為、レクスはどこか疑問に抱きながらもその男を睨んだ。

「なあ、霧島の裏切り者!

アンタが殺した人間なんだけど、覚えているか?

「セドリック・コフィーネ」って名前なんだが」

「……覚えてるよ、彼は。



中々にしぶとかったから。

マシガンの弾を60発近く食らわせたのに何故か生きてたんだ、その後も抵抗したから、そりや印象に強く残ったさ」

「チツ、なんでてめえがよりによつて裏切つたんだよ霧島雅……！」

オレは今すぐにでもお前の事を殺してやりたいんだがな!!」

激しく雅と呼ばれた男を睨むレクス。

雅は罪悪感を感じているのか、レクスから目を逸らす。

その直後、雅を庇うように前に出るもう一人の日本人がいた。

その青年は、信用ならない笑みを浮かべながら、レクスを宥める。

「落ちていてください、レクスさん。」

ミヤビは仕方なかったのです、そうしなければキシマに殺されていた、貴方にとつてその友人が大事だったようにまた、ミヤビは自身の息子が大事だったのですよ」

「……確か、ユードイだっけ？」

優しいんだな君。

だが、どつか心が空っぽだ、伽藍堂みたいにな」

「ハハハ、そんなに難しい言葉を使わないでくださいよ。」

僕、そんなに頭は良くないんですから、よく分かんないです」

ユーダイと言われた青年——裏切雄大は微笑んだ。

「……ユースタス」

「なんだ、アグリツパ」

赤髪の男、ユースタスに声をかける黒髪の男、アグリツパ。

ひそひそと、ユースタスの耳にしか聞こえないほど小さな声で雄大への懐疑心を口にするのだった。

「怪しくないかい、彼。」

彼は魔術はてんで使えないなぜ時計塔にいるのかすら分からない魔術師見習いのハズだが……どうにも肝が座りすぎてると思うんだよね」

「……たしかに、彼は怪しいよな。」

どうする、別行動をとるようになるか？」

ひそひそと、今後の動きを提案するユースタス。

だがアグリツパはいや、とつぶやいた。

「大丈夫だろう、まだ私達は殺されはしないだろう。」

どうせなら、ここでもう殺してしまうだろうしね。

幸い、僕らは彼らより魔術の腕は上だし、一応彼らの戦い方も……ユーダイは知らないけども、雅の戦い方はまあ、嫌という程知っている。

仮に殺されるとしてもタダでは殺されないように足掻くだけさ」

「……確かに、対策の施しようはあるな。」

それに、目的が一致しているしな、少なくとも義隆が倒れるまでは私たちが殺すなんてことは有り得んだろうな」

そゆこと、とアグリツパが言う。

二人の耳打ちを勘づいたレクスが、何か言いたげであつたが直ぐに気を取り直して、そして自身が生み出してしまったこの空気を変えようとする提案をした。

「……まあいいさ、そういえばアンタら、サーヴァントの召喚はもう済ませたんだろう？」

見せ合おうぜ……つつても、オレのサーヴァントは弱いかな」

指を鳴らしながら、真つ先に自身のサーヴァントを見せるレクス。

——銀色の洋甲冑を身につけた男が現れる。

いかにも、中年の男性といった顔つき、恐らくは30代半ばの男は、生えている鬚を愉快な形に整えていた。

「サーヴァント、セイバーでございます。

主にはなぜバーサーカーで呼ばなかったのです、と尋ねましたがどうやら違う英霊……シグルドを呼び出そうとしたみたいですね。

まあ、セイバー界の中でもほかの追隨を許さぬほど、わたくし私弱いのでどうぞ、よろしく  
お願い致します」

堂々と自身を弱い、と言い切る男——”陽”のセイバーのサーヴァント。

イラつく様子を包み隠さず、レクスは舌打ちをした。

「オイオイ、レクスくん彼は英霊だよ？」

……私達よりも先輩なんだ、もっと敬うようにしないとね？」

「そう言われてもだな……」

レクスを窘めるアグリッパ。

その2人を他所に、面白そうだと思つたのか雄大も自身のサーヴァントを紹介するこ  
とにしたのだった。

「姿、見せていいよ」

『——承知した』

雄大の呼び掛けに応じ、その英雄は姿を表す。

レクスの、セイバーと似たような、しかし、セイバーのような輝かしい銀色の甲冑で  
なく、全てを塗り潰すような漆黒の甲冑をした男が現れる。

顔は、鉄仮面の被っているため見えないが、声を聞いた皆はその英霊が男だといふこ  
とは理解した。

「——サーヴァント、ライダーだ。

……主の為に尽くす」

それだけ言い、*“陽”*のライダーは自身の名乗りを終えた。

男に乗じるように、雅の傍らから、するりと現れる、銀の髪の毛の紅の瞳をした女性。

額からは角が生えており、彼女が人ではないことを、他のメンバーは悟った。

「……多分、僕達は信用されていないだろうし、一応、行動で示させてもらう。

僕のサーヴァント、バーサーカーの真名は*“巴 御前”*。そして、そのライダーの

サーヴァントの真名は……」

「ミヤビ」

信用を得るために自身のサーヴァントの真名を明かし、そして同じく信用されていない雄大を信用させようと雅がライダーの真名を言おうとしたが、雄大に止められる。

なぜだ、と問うよりも早く雄大は答えた。

「……実は、僕が本来召喚しようと思っていたサーヴァントはチングス・カンだったんだけど……どうやら、他のモノに触媒が混じってたみたいだね。

彼が現れたんだ。その事実を知った途端、彼は名乗らない方がいいだろうと、ね。

まあ、私のことは信用してもらわなくても結構だよ。

それよりも、他のサーヴァントの姿がみたいな、他のふたりも、サーヴァントに霊体

を解くように言って欲しいのですが」

「さて、どうしようか」

少し考え込む素振りを見せるユースタス。

その後ろで、アグリツパが話題を変えるべく、一つ疑問を口にした。

それは重要なことで、全員が無視できない内容であった。

「そういえば、他の二人は？」

バエル・カナンと、なんだっけ、カタリナ・キャツシユヴァルトだっけ？」

「……ああ、その二人か」

そういえば、と言いながらレクスが辺りを見渡す。

少し間が空いて、雄大が答えた。

「カタリナ氏は先に日本に行つて、サーヴァントを召喚したんだっけ？」

確か、下見も兼ねて。

「……そこから、誰か連絡は？」

「いや、無いね。」

正確には、私達が日本へ向かう直前が最後の連絡だったね」

アグリツパが応える。

「……最悪の事態を想定しながら、雅が続けて状況を述べる。」

「……ホテルの場所は僕が知っていたから、カタリナ氏が待ち合わせ場所に不在だった為僕が案内をした。

霧島の誰かに暗殺されたか？

「可能なのは竹流さんか、義隆かだけど……義隆は自身から手を下すことは滅多にない。

実力を隠す為、という都合上ね。

何のためかは前々から疑問だったが……そうか、聖杯戦争のためにか」

後半は独り言を零していただけだったが、犯人を予想する雅。

しかし、

「……否、である。

今しがた、このホテルの店員専用の駐車場で遺体を発見した。

なにかに食い散らされたような、醜い死骸をな。

恐らく、カタリナのモノだ」

ロビーに現れた、巨漢の男。

その男の手の甲には赤い紋様が刻まれており、彼もこの聖杯大戦の参加者だと、皆は知っている。

時計塔、降霊科に在籍する教授。

その重苦しい雰囲気は凄まじく、その場に現れただけで、思わずに固唾を飲んでしま  
う程であった。

レクスが、その名を口にする。

「……バエル教授」

「おやおや、遅い出勤だねえ。」

遅刻はダメだよ、みんなの迷惑をかけちゃうからさあ」

「……そのことに関しては何も詫びよう、私の失態だ」

深々と頭を下げるバエル。

そして、その後に理由を言うのだった。

「……サーヴァントに襲われたところだった。」

理性がない、バーサーカーかと思ったが襲われる寸前まで気配を感じなかった。

恐らく、カタリナはアサシンのサーヴァントに何か余計なことをしたのだろう。

例えば、理性を奪ったりとか、な」

「……この、私達の手に宿る三画の、サーヴァントへの絶対的な命令権である令呪ならば  
可能だろうね。」

しかし、なんのために、という疑問が出てくる。

……これは以前聞いた噂だが、サーヴァントにはアサシンとバーサーカーと言ったよ



うにライダーなのにキャスターの要素を兼ね備えたサーヴァントが稀に現れると聞いた事がある、もしやそれなのではないだろうか？」

アグリッパの考察にバエルは成程、と頷く。

「……参ったな、これでは敵が増えてしまった」

ユースタスが弱々しく呟き、考え込むように顎に手を当てる。

しかし——雄大は、何故か余裕の笑みを浮かべる。

それに、疑問と苛立ちを兼ねてレクスが尋ねるのだった。

「……何を笑ってんだよ。」

状況はこつちが不利なんだぞ。

サーヴァントが一騎滅った、それだけでも致命的な戦況だ」

レクスの言葉に対して、雄大が失敬と謝り、応える。

「障害は、いくつかあった方が燃え上がるでしょう？」

それは、勝者の余裕だった。

自分達が、否、自分が絶対に勝つというどこから湧き上がってくるのか分からない自信を持っていた。

それを感じ取ったアグリッパが、敵意を向けて牽制した。

「オイオイ、キミはてんで魔術を扱えないんだぜ？」

ハッキリ言うとお荷物に近い状態だ、そんなキミがこの殺し合いに参加出来るだけでも奇跡を使い果たしたと言っても過言ではないんだけどねえ」

「いえ、勝ちます。

この私が、絶対に。

その為に、私は——」

何か言いかけて、雄大が口を閉じる。

失敬、と言つて雄大は言い直す。

「選ばれた、と言いたかったですが……皆さんの殺気が恐ろしくてね、やはり取り消します。

ですがまあ、悪あがきくらいはしたいですね」

ハハハ、と笑う雄大。

しかしやはり、その笑みには勝利への自信が顕れていた。

コホン、と咳払いをして、ユースタスが表情を上げた。

「まあ、とりあえず。

頑張ろう、我らが“陽”の陣営。

万能の願望器である、聖杯を奴らの手に渡してはいけない。

霧島を斃して、聖杯の奪い合いはその後に、やり合おうじゃないか——」

そして、奇しくも義隆とほぼ同じタイミングで、聖杯大戦の合図を行うのだった――

聖杯大戦の開始の宣言がされた数時間後、家電屋の近くにある、教会にて。

その聖堂は、青白い、人が見れば聖なるモノと確信できるほどに綺麗な光に包まれた。女神像の前で祈りを捧げていた老人の神父が、光の後に姿を現した女性の、あまりの清廉潔白さに感涙を零す。

彼女は、この聖杯大戦における調停者。

そのクラスの名をルーラーという。

背まで伸びた黒い長髪をなびかせながら、女性は神父の方へ振り返り――聖母の如き、微笑みを見せた。

「サーヴァント、ルーラー。」

真名は――マルタ。ただの、マルタでございます。

どうか、よろしくお願いたします」

女性が己が真名を名乗り、手を伸ばす。

転んだ我が子に差しのべる、母親の手のような暖かな伸ばされた手を、神父は恐る恐る伸ばし、握手を行う。

——こうして、外典の、さらに外典である聖杯大戦、その開幕の狼煙は上がった。

一日目・影を追う

## 復讐鬼の影を追え 《陰》

霧島邸、切翔せつかの部屋にて。

自身の愛銃でもあり、かの伝説の魔術師殺し・衛宮切嗣えみやきりつぐが愛用していたとされる銃。

トンプソン・コンデンターのメンテナンスを、切翔は念入りに行っていた。

その光景をただただ無言で少女——“陰”のセイバーは眺めている。

メンテナンスがある程度終えた頃に、切翔は怪訝な視線を少女へ向ける。

「確認するが……お前は本当にかの英雄で間違いないんだな？」

再三にわたる執拗にも程がある確認に、セイバーは疲れたようにため息を零しながら、凜と応える。

「ええ、私は貴方の召喚した英霊で間違いありません。

それは、この剣を見たらわかることなのでは？」

ずい、と自身の剣を見せる。

それが本物だと確認した切翔は成程、と呟いた。

「……確かに、お前は本物だ。」

しかしそうか……女、だったのか。

まあ、サーヴァントである以上、性別なんて関係がないか」

聖杯大戦が始まる前、切翔は義隆からある程度教えられていた。

まず、サーヴァントとは、こと戦いにおいては感情のない戦闘兵器だと。

切翔は、召喚したかった英霊がほかの英霊と成り代わったかと危惧していたが、それももう解決した。

「……セイバー、お前は俺の武器としてしっかりと機能を果たしてもらおうからな。」

いいか、敵は絶対に討ち損なうな。

油断もするな、冷静に確実に息の根を止めろ。

じゃないと、俺らが祖父に殺されるだけだ。

だから——女なんてことは関係の無いことだ思っておけ」

「……承知致しました」

どこか、重苦しくセイバーが頷く。

切翔はそれだけ、そのセイバーの返事だけで。

——ああ、こいつはきつと、大事な局面でやらかすな。  
そう、脳裏で理解した、してしまい己の手の甲にある令呪を見るのだった。

忠吉の部屋の中では、鎧武者の男——「陰」のランサーが、義隆と談義を行っていた。  
た。

その内容は、当主である義隆のことだった。

「——あの男、幾度の死地を越えている、そんな目をしていたが……

そなたたちの家系はだいたいそうなのか？」

そなたも、他の若い者も皆、死地の潜り抜けた、生きている実感のない瞳をしている」

「……ええ、その通りでございます」

コンコン、と扉を叩く音と共に、この屋敷の侍女が入ってきた。

「失礼します」

一礼し、お盆の上に置かれている湯呑みと急須を、二人の間に置く。

「かたじけない、感謝する」

「陰」のランサーが礼を言う。

忠吉は礼など不要、と態度で表し、それどころか何故か侍女を一瞥し——静かな怒気を現した。

「おい貴様……私がこのお方と対談なされている時に割って入るとはどういうつもりだ」

「し、しかし……!!」

いつもは茶を持って来ぬとは何事か、とお叱りになるのは忠吉様で……!!」

侍女が反論する、刹那。

忠吉はその盆の上に置かれた湯呑みを一つを侍女の頭に目掛けて放り投げた。湯呑みは中に入っていた熱湯と共に、彼女の額に当たる。

「——貴様、誰に意見する？」

誰のおかげで、ここで飯をありつけていると思う？

父に代わり、今の霧島家を統率するこの私のおかげだろう？

それを、息子に譲られた能無し頭のせいで忘れてしまっているようだな？」  
腰に下げた刀の束を握り。

近寄る、暴力の権化。

その姿はまさに鬼の如く、弱き者からなにもかもを簞奪しようとする——

「………それまでだ」



したが、それを「陰」のランサーの静かなる一喝で、阻まれた。

「其方は我が主。故に、いかに暴君といえど看過するつもりでいた、そうでなければ武士として、あの大公の顔に泥を塗ると思つたからだ。

しかし、どうやら拙者は堪忍袋の緒が短いようだ。

それ以上はやめろ、霧島忠吉よ。さりしまたよし

武器も持つてない者から奪う命などない。

命とは尊きもの、それを賭けて戦う武士ならばいいがそのものは違うだろう？

それともそなたは武器も持たぬ女の命を気軽に奪うほど、矜恃を持つておらんのか？

……だとすれば、呼ばれた拙者の不徳ゆえ、即刻その首を……否、首は要らぬ。

命を頂き、私も自害しよう」

その怒気は鬼を制圧するかの如く。

鬼すらを食い破る虎の如く、忠吉を睨む。

忠吉は、虎の一喝に頭を冷やしたのか。

「失敬」

短く誤り、直ぐに「陰」のランサーの目の前へと座つた。

「……下がれ、そして暫くは彪斗の元へ付け」

侍女に己の息子の身の回りの世話を任せ、侍女を部屋へと追い払った。

「……先程は大変、失敬致しました。

なにぶん、最近は殺し合うばかりしかしておりませんでしたから、少し気が短くなつてしまっているようで。

……いえ、それだけではありませぬな」

目を細め、どこか懐かしむように忠吉は部屋の天井を仰ぐ。

「先程のは彪斗の母親、つまりは私の妻です。

……しかし、あの女は一度、妻としての役割を放棄した。

そして、無様にもこの街に救っていた怪異に殺されそうになっていたところを助け、保護したのです」

「成程。事情は理解した。

しかし、それでもだ。

命を粗末に扱うな、我ら武士もただ殺し合う為に命を賭けるものではない、それはただの異常者の行動だ。

——殺しなんぞに悦びを見出せばそれは、ただの化け物よ」

男の言葉に、忠吉はただただ——感涙を零した。

やはり、この男の魂は綺麗だったと。

我が憧れの武士、最強と謳われた華々しきその男は自身の予想通りであったと。

「は——身に染みて、反省致します」

深々と頭を下げる。

そんな忠吉を見て、「陰」のランサーはどこか不気味な気配を感じ取った。

なにか、なにかズレている。

一本道の筈、それを忠吉は自身で一本の道を作り、そしてあえてすれ違っている。

（——どこか、奴に似ている）

血縁だった、ある男を思い出しながら「陰」のランサーは、ただ忠吉を凝視するのだった。

竹流の部屋では、火薬を調査している最中の竹流を気にせず、「陰」のアーチャーが義隆のことについて尋ねていた。

「君が顔も心もブサイクなのは分かったとして、キミのファーマーのことなんだけどさ。

なに、アレ？ どう考えても昔は身も心もイケメンだったオーラすごいよ？

それが、なんであんな醜い顔に、心になったのか僕には分からないや」

頭上に星を流しながら、「陰」のアーチャーは舌を出す。

少しして、竹流が口を開いた。

「……昔、父は名の知れた魔術師だった。

よく分からんが、素晴らしい地位にいたとの事だ。

しかし、父が急変した要因の一つは確実に妻、俺の母の死だった」

「オウ、なる程ねえ。

今ではバーサーカーさながらのブサイクさだよ。

まあ、僕みたいな身も心もイケメンな男には誰もがなれるわけではないからねえ」

飄々とのたまう「陰」のアーチャーを、不快な、まるで汚物を見るような目で竹流が

睨む。

「黙れ、貴様が心も整っているだど？」

笑わせるな、貴様の顔は整っているかもしれないがその心は汚物そのものだ。

——真に心を美しいと形容できるのは、美華<sup>みか</sup>だけだ……」

窓から青空を眺める竹流。

「陰」のアーチャーは、何か懐かしんでいる竹流なぞ気にせず、

「いや、ブサイクな君に汚物とか言われたくないよ、名誉毀損で訴えるよ？」

ヘラヘラとした笑みを浮かべ、冷徹に言い切った。

「できるものならやってみろ、この幽霊如きが」

嘲るように鼻で笑い飛ばしながら、火薬の調合を再開させる。

そんな中、

「……まあ、僕は一言も心がイケメンだなんて言っていないけどね」

小さく、竹流には聞こえないように「陰」のアーチャーは呟いた。

「ん、なんだ。何か言ったか」

「べつつにいい？」

何か言ってるのだけは分かった竹流は問い返したが、すぐに「陰」のアーチャーが誤魔化す。

動揺もしない、寸分も違わぬ誤魔化しに流石に竹流は気付かず、そうかといいい再び調合を再開させる。

「ただ、さっきの美華って子が気になったただけだよ？」

ねえねえ、ミカって君のセフレなの？」

——瞬間、竹流の手が止まる。

わなわなと怒りで震わせながら、冷静ではない瞳で、凶眼でヘラヘラとした、存在すら嫌悪する男を睨む。

地雷を踏んだ、そう理解した「陰」のアーチャーが、すぐに謝罪しようとするが——

「令呪を持って命ず——」

聖杯戦争のマスターに選ばれた者たちはその参加の資格として、赤い紋様がやどる。

それは「令呪」といい、サーヴァントにどんな命令でも実行させる三つの操り糸である。

そんなモノ、怒りに身を任せた人間がどうするかくらい、「陰」のアーチャーは、理解している、生前のとある出来事が、脳にこびり付いているからだ。

トラウマとも呼べる、その、限界を遥かに上回る怒り狂った瞳を、「陰」のアーチャーはどうか収めようとしたが、同時に手遅れだと悟るのは、難しくはなかった。

死を悟る「陰」のアーチャーは、それを受け入れたくはなかった——

「今後一切、我が最愛の人、美華への言及は禁ずる——！！」

しかし、それは予想だにしなかった命令だった。

まさかの、そんな出鱈目なことに令呪を使うとは、「陰」のアーチャーの予想図には、描かれていなかった。

「……自害させると思ったか、間抜けめ。

残念だが、もとより自害させることは出来ない、祖父にサインされた絶対的な契約書に、そう書かれていたからだ」

見下すように竹流は一瞥し、すぐに背を向ける。

それは、拒絶という巨大な壁。

“陰”のアーチャーは理解し、自身たちの勝ちへの可能性がより一層薄くなったのを理解したのだった。

霧島邸、遊人の部屋では、“陰”のアサシン、霧島遊人が一号と呼ばれるホームンクルスについて話し込んでいた。

たんに、暗殺者は知りたかった、何故、あの番号でしか呼ばれていない少年の寿命が。

「——なあ、アンタ。」

あの少年のことだが——」

「アイツならせいぜいあと2週間さ。」

……悔しいがな、仕方ねえ。

僕が足掻こうにも、アイツの結末は蟬と同じくれえに儂い生命よ」

いそいそと、何かの準備をしながら答える遊人。

フラスコの中には何か、豆のようなモノが入っている。

それが生命だと気配で感じとった。陰のアサシンは、遊人がなんの準備をしているのかがきになってしまい、訊ねた。

「……それは、なんだ？」

なにか、命か。なんの命を生み出そうとしている、また、あの少年のようなホムンクルスか？」

静かに、短刀を握る暗殺者。

答えによつては遊人を殺すと、その動作で伝える。

遊人は、それを理解していた。だが、堂々と、そうだと頷く。

「ああ、ホムンクルスだ。

僕のお仕事なんでね。こうやって、インスタントの命を生み出すのが。

……あれでも、長生きしたんだぜ？」

なんせかなり手塩にかけて、アインツベルンに土下座してまで協力してもらったのに失敗した、僕の初めてのホムンクルスなんだ。

……五年くらいだったな。良くもまあ、義隆に見せるまで隠し通せたと思うよ」

どこか懐かしむように、しかし悲しむように言う遊人。

遊人の、その態度に暗殺者はナイフを仕舞った。

命を簡単に生み出す、そんな冒読者を、陰のアサシンは許さなかったが、遊人は、違



うと、感じたのだった。

否、確かに、簡単に命を生み出している。しかし、その行動には罪悪感を抱いている。

“陰”のアサシンは、そのことに気づいたのだった。

そこへ、空気を読まずに白衣の男、主である遊人に傲慢な態度をとっていた男、“陰”のキャスターが現れた。

“陰”のキャスターはフラスコの中に在る命を見るな否や、忌々しげに舌打ちをした。

「ホムンクルスだと？」

貴様、私にそれを見せるな。そんな不格好な、出来ないホムンクルスなぞすぐに叩き割ってしまいたい……聞けば日に五十体の戦闘用ホムンクルスを製造しなければ貴様は死んでしまうみたいだしな？

ふん、貴様が死んで私が消えるはめになっても困るのでな、見逃してやる」  
鼻で笑い、冷ややかにその場から去ろうとする。

それを、“陰”のアサシンが男の前に出て、去るのを阻んだ。

「……な、なんだ貴様。

わ、私はなにも間違ったことは言つとらん、言つとらんぞ？」

明らかな動揺を見せる。陰のキャスターに、陰のアサシンは静かにナイフの刀身を見せた。

「ひっ——!!」

明らかな恐怖、それを見て、陰のアサシンは、嘲笑するのだった。

「強がりはやめろ、キャスター。」

傍から見てても鬱陶しいこの上ない。

……プライドが邪魔をするのだろう、君も英雄の端くれだからね。

でも、ただナイフを見せられて怖がるくらいはプライドなら捨て去れ。

——それに、これはただの聖杯戦争じゃないんだ、マスターとの仲は今まで以上に大事にするべきさ」

そして、静かに諭す。

騙された、それを理解した。陰のキャスターは顔をタコのように赤く染めあげ、くるりと翻した。

「なんだ貴様、アサシンのくせに偉そうに!!」

それだけ言い残し、陰のキャスターは部屋から出た。

その様子を見送ったは思わず笑った。

その後、陰のアサシンは情けない姿を見せた男を庇う。

「失敬。彼は、多分、嬉しいと思うよ？」

こんな、大規模な争いに呼んでもらえたんだ、うれしくないはずがない。ただ、どう接すればいいのか分からないんじゃないか？

……彼、なんとなくだけど生前は全く交友とかなさそうだったから」  
「別に、気にしちやいなあさ。」

ぶつちやけ、魔術師のサーヴァントの時点でそれは予想済みさ。

さて……そんじゃま、僕はホムンクルス作りに勤しむとしますかあ」

「陰」のアサシンに背を向けて遊人は、作業を再開させる。

隙だらけな背中、それを守るように「陰」のアサシンは遊人の背後に立つのだった。

「——呵々、皆、交流はある程度とっているみたいだな」

使い魔越しで、各部屋を見ていた義隆は不気味に笑う。

裏切りそうな者を殺す為に、監視を怠ることは無い。

切翔は「陰」のセイバーに確認してから、ずっと武器のメンテナンスを。

忠吉はそれから、「陰」のランサーと茶を嗜み。

竹流は《陰》のアーチャーに敵意を向け続けながら弾薬の調合を。

遊人は、終始ホームクルスの製造に励んでいる、《陰》のアサシンは襲撃者に備え、しっかりと監視をしている。

彪斗は——部屋にはいなかったが、義隆はそれはきつと、廁へ向かったのだろうと決めた。

しかし、

「なあじいちゃん、これってなに？」

「なんで、オレのへやとかみれてるようになってんの——?????」

「——ッ!?!」

背後から聞こえた彪斗の声に思わず銃口を向け、二、三発発砲する。

「いつでええええええええええ!!?!」

足に命中した彪斗はたまらず、絶叫し、床へ転がる。

義隆は、己の愚かさを憎んだ、恨んだ。

「——そうだ、此奴を無能に育てた理由を忘れてしまっておった。

……此奴の潜在能力は未恐ろしい、下手をすれば儂わたくしの寝首が搔かれることとなると、恐れたからだ」

忘れるなど戒め、彪斗の頬を掴む。

額に銃口を突きつけ、殺意を放つ。

そして冷ややかに、圧をかけるのだった。

「貴様、誰の許しを得てこの部屋へ立ち入った？」

——わたし儂の部屋へは立ち入るなど言つたらう？

それは例え、他の者でも、だ。

次はない、次こそは貴様を殺すぞ？」

「じ、じいちゃん……？」

目に涙を溜め、彪斗は義隆の顔を見る。

その表情に、感情はない、ただの人形じみていた。

そうして漸く彪斗は理解した、義隆のこの発言は本当だと、次にこの部屋へ入れれば、自身は死ぬ、と。

ただひたすらに怯える彪斗に、殺意を剥き出しにする義隆、その間に割って入るよう  
に、

「待て待て、これはアレだ、事故だ!!」

我がつい、茶菓子を貰えるやもしれんと冗談を言ったのだ!!」

ガハハ、と陽気に笑いながら、しかし矛先を義隆の首筋へ当てながら、「陰」のバー  
サーカーが現れた。

「……そうか、貴様の差し金か巨人。」

「どういう意図だ、説明してもらおうか」

「む、つい先程、言ったばかりだろう?」

我が、冗談で貴様の立ち入り禁止の部屋へ入ったとしても、孫の汝なら許されるだろうと、なんなら茶菓子をもらえるのでは、と。

しかし、困った困った。どうやら、孫も祖父も冗談が通じぬようだからな  
ガハハ、と陽気に笑う。  
!!!!!!

更に部屋を見渡して、はて、と首を傾げた。

「そういえば、貴様のサーヴァントはどこだ?」

「我が傀儡ならば、今は外を徘徊している。」

今はどうやら理性が弾け飛んだらしくな、人を殺し回っているだろうよ」

呵々、と笑う義隆に、「陰」のバーサーカーは眉を曲げながらも、誤魔化すように笑った。

「そうか!」

では、失礼する!!」

そそくさと彪斗を抱え、「陰」のバーサーカーは退室する。

その後、

「……呵々」

不気味に老人が微笑む。  
数奇な運命だ、と〃陰〃のパーサーカーを嘲笑するかのよう

## 正体不明の影を追い 《陽》

ある高級ホテルの一室では、“陽”のセイバーのマスターであるユースタスは、二名を除く“陽”の陣営のマスターを呼び出していた。

なんのために呼び出しているのか、それは呼び出してない“陽”の陣営のマスターである、霧島雅と、裏切雄大の事だった。

陽のキャスターのマスターであるバエルが最後に入室し、集まったのを確認してからユースタスは口を開けた。

「……では、あの二人について話をしよう。

まずは、彼らが信用に足りる人物か、だ。

当然、私はノーと答えよう」

キツパリと断言するユースタスに続いて、アグリツパも答える。

「彼に同じく、僕もノーだね。

魔術師殺し……それは、衛宮切嗣が現われて暫くしてから少しずつ増えていった我々



魔術師の天敵。

しかし、暫くして我らも対策をとり、今では魔術師殺しにも優位に立てるようになった。

だと言うのに、だ。彼ら霧島一族は難なくそれを解決してくれた。

最初こそ、一族の頭領であるヨシタカの実力によるものが大きかった。

ヨシタカは魔術師としての腕前も相当なものでね、以前も言ったかな、階位にいた魔術師だ。

だが、彼らは数を増やした、殺した魔術師の一族の子供を、無差別に襲った孤児院等の子供を連れ去らい、魔術師殺しとして育て上げた。

更には、どうやって入ったかは分からないが彼らはユグドミレニアの一員として迎え入れ、ユグドミレニアの瓦解後、彼らは真っ先にユグドミレニアの者達を惨殺し、そして子供達を奪い去った。

そうして、彼らは今では最大の魔術師殺しの勢力として存在している」

「……外道そのものの行為じゃねえか。

奴ら、ヨシタカがなんでそうするのかの理由として、魔術師があまりにも非人道的だったのがあるって聞いてたけど、こうやって聞きやあヤツらの方が人辞めてるよ」

忌々しげにレクスが呟く。

アグリツパは微笑みながら、そうだねと応えた。

「そうして、数を増やした、霧島。」

そして、その数による驚異を与えてしまった我々魔術師。

そんな最中、霧島を裏切ったと宣言する、霧島の中でもヨシタカと同レベルで名を馳せている男のミヤビが現れ、我々の仲間となった……少し、おかしいと思わないかい？」

「……ああ。先ずはどうやって逃げ出せたか、そして裏切った動機、だな。」

何故か、霧島雅は動機を語ろうとはしない。

そこが気がかりであるところだ。

それに、どうやって逃げきれたのかも気になる。

本人曰く、霧島の一族の大半はマスターとして選ばれた者以外は皆殺しにした、との事だが……さすがにできるとは思わないのだがね、私は「

そういうことさ、と指を鳴らしながらアグリツパが答える。

「そして次に裏切雄大と名乗る青年だが——」

「ありやあ、どう考えてもアレだよな、外人だし、なんなら聖堂教会の連中だよな。」

……首に十字架とかホント、わかりやすいとかさあ」

次に、裏切雄大なる青年の話となった。

あまりにも正体不明、大胆不敵すぎる青年に、皆は当然、猜疑心を抱いていた。

「そうだねえ。」

一度、皆で囲んで吐かせるつてのはアリかな？」

「——それは此方としては困る。」

せつかく骨を折つてまで霧島を裏切つたんだし、私個人としては万全な戦力で奴らを殺したい。

……そんなに、理由を訊きたいのか？」

瞬間、全員が部屋に入つてきた雅の方へ振り返る。

彼の手には、彼自身も愛銃としているトンプソン・コンデンサーが握られている。

「ああ、勿論さ。」

下手なことをすれば射殺される恐れがある、そんな中、アグリツパは飄々と答えた。

当然、銃で射殺される可能性を一瞬だけ考慮したが、アグリツパにとっては、雅の今の言葉を嘘とは思えなかったのだった。

少しの静寂の後、溜息を零しながら雅はどこか恥ずかしげに答えた。

「……息子達を助けたかったからだ。」

この私にとつて、なによりもかけがえないもの、それは亡き妻である美華と、そして息子である切翔と遊人だ。

……本当は、あの二人も連れて逃げたかったがそうなると義隆本人が出る、そうなる

と返り討ちに遭うのが見えている。

だから、外部からあの二人を救うことにしたんだ」

刹那、場にいた殆どの者たちは呆気に取られた。

雅は魔術師達からはその苛烈かつ、冷酷と言う文字に相応しい魔術師達の殺害の仕方に、恐れられていた。

そんな彼が、家族想いだとは到底思っていなかったのだ。

そんな中、

「いやあ……最高に父親してんなアンタ!!」

気に入った、気に入った!!

腹ん中にはオレたちサーヴァント含め、“陽”の陣営の始末考えてるかもしれんがオレは好きだぜえ?

何時の時代も、格好いいのは『家族の為に頑張る父親』ってのは相場が決まってるからねえ!!!」

雅を褒め、拍手をしながら全身を緑衣で包んだ男が現れた。

ニカツと、太陽のように眩しい笑顔を見せながら、緑衣の男は軽い足取りで雅の元へ駆ける。

「アーチャー」

制止するように、緑衣の男、*“陽”*のアーチャーに呼びかける、主であるユースタス。だが、アーチャーはその眩しい笑顔でユースタスに向け、

「安心しなあ、コイツはアンタらを殺すつもりはないみたいだぜ？」

……そも、向こうのスパイなら、アンタらに毒を盛って殺す筈だろう？

まあ、身内殺された奴もいるって話だからよ、疑い深くなるのは仕方あるめえ。

けどな、お互い理解を深めないとダメだ、まずはな」

そう、答えた。

やれやれ、と肩を竦めながらユースタスに苦笑し、彼が雅の元へ行くのを許容した。

*“陽”*のアーチャーが雅の目の前まで駆け寄ると、手を差し伸べた。

はて、と戸惑う雅に対して*“陽”*のアーチャーは、

「握手だよ握手!!」

仲良くしようぜ。オレ、アンタみたいな人好きなんだよ」

そう答えた。

「……そうだな。」

——私も、貴方みたいな明るい人は好きだ。どこか、妻に似ていてね」

雅は頷きながら、*“陽”*のアーチャーの手を掴んだ。

それと同時に、*陽*のアーチャーは胸ポケットから何か袋に包まれたハート形のパイを

取り出し、雅に受け取るよう促した。

「これ、食うか？」

美味しいし、なによりもハート形つてのが好きなんだよなあ！

いやあ、女房や息子にも食わせてやりてえぜ!!」

「……すまない、甘いものは苦手なんだ。

僕は食べれないが、遊人が甘いもの好きだったな。また、会えたらだが渡してもいいかい？」

もちろん、と〃陽〃のアーチャーは笑う。

それと同時に咳払いをして、自身に視線を向けさせたアグリツパは中断していた話を進めた。

「……談笑は後にしよう。

僕達、まだやることが残ってるんだよ？

例えばほら、裏切の目的とか、そして行方不明のアシンとか、さ？」

「その話……裏切のことなんだが」

雅が我先にと切り出す。

「彼の目的は以前聞いた事がある。

どうやら彼は、『全人類の進化』を目的にしているみたいだ。

あと、経歴を調べたが、彼は聖堂教会では無い、ぽつと出の、弱小魔術師だ。  
……なぜ、日本人と偽っているのかは、私にも分からない」

「……全人類の、進化……？」

バエルが首を傾げる。

切翔は、バエルの小さな疑問に答えた。

「ああ、そう言っていた。

なんでも、人類は進化すべきだ、とね」

「ハン、こりやまた大層な目的を掲げてんなあオイ!!」

そりや、さぞ素晴らしい実力を持ってんだらうなあ？」

この場に居ない裏切を嘲るようにレクスが言う。

レクスの言葉に反応し、彼のサーヴァントである“陽”のセイバーが現れた。

「主殿、それはいけませんぞ？」

男なら堂々と手袋を投げねばなりません。

——まあ、私が言えることではありませんが!!」

自虐する“陽”のセイバーを睨みつけ、黙らせるレクス。

「……うぜえなあ。

てかそうだ、おい来いよセイバー、少し話がある。

すまねえが、後の話はだれか後で教えてくれ。

コイツを強くする、コイツが自覚してくれてるだけありがたい話だが、コイツは本当に弱い。

ちつとでも使えるようにしねえとダメだ」

それだけ言い残し、呼び止めようとする者達を無視してレクスは部屋を出た。

「……まったく、名を馳せている最中の天才児はとんだじゃじゃ馬だったねえ。

まあ、いいか。

彼の才能を僕は信じよう、そのアーチャーも言ってたしね。

互いの理解を深めなければいけない、と!!」

「まあ、確かにオレは言ったがねえ？

多分さっきの小僧はバーサーカーのマスターと同じ空間に長くいなかったただけだと  
思うぜ？

確かアイツだっけ、身内殺されたってのはよ？」

ああ、とユースタスが頷く。

陽のアーチャーはポン、と雅の肩に手を置いた。

「埋まらなさそうな溝だし、そこは仕方あるめえさ。

だがまあ、その溝を飛び越えて仲良くなれるかどうかはお前さん次第だ、頑張んな!!」



陽気に笑い、緑衣の男は再び霊体へと戻った。

「……ところで」

その直後、何かを思い出したバエルが口を開く。

皆が注目する中、バエルは言葉を続けた。

「陽 のアサシン……アレは、どうする？」

「……アサシンか」

顎に手を当て、考えるユースタス。

そんな彼よりも早く、アグリツパが指を鳴らしながら答えた。

「簡単だねえ、襲われたら対処すればいいのさ!!」

アサシンが消えるまでの間、絶対にサーヴァントの傍を離れなければいい。

というか、暗殺が得意な霧島を相手にするのにサーヴァントを側につけない間抜けは

いないだろうしね!!」

「だがまあ、霧島の方もこちらにアサシンがいらないとは思ってははいないだろう。

だから向こうもサーヴァントを側に付け、アサシンに警戒するはずだ」

アグリツパの言葉に、雅も味方する。

ユースタスは確かに、と頷いた。

しかし、

(……なんだろう、確かにそれが大正解なのだが……なにか、なにか嫌な予感がする。  
……アサシンを野放しにしては行けない、そんな、予感が——) )  
胸中では、そんな胸のざわめきを過ぎらせながらユースタスは陽のアサシンに警戒することとしたのだった——

---

今日は休日。

とある家族が朝食を食べている最中だった。

和気藹々と団欒を囲みながら、会話している家族、そんな中、

ピンポ——ン

呼び鈴が響いた。

なんだろう、と家族の大黒柱である父親が首を傾げる。

立ち上がると、男の妻が、

「あなた、またなにか頼んだの？」

この前は確か、プラモデルだったわよねー」  
まったく、きつとソレだろうと含みを入れた言葉で、仕方なげに微笑んだ。

しかし、

「あれえ、プラモデル頼んだかなあ？」

確かに、昨日発売された物があつたけど……」

男は頼んだ記憶がないようだった。

しかし、直ぐに昨日は疲れていたから寝ぼけて頼んだのだろう、思ったのか玄関まで歩こうとした時、

ピンポ——ン

呼び鈴が、再び響く。

少し眉を動かし、夫妻共に顔を見合わせる。

「そんなに急かさないで欲しいよねー」

「ホントだよ、今行きまーす!!」

声を張り、外にまで届きそうな大ききで男が言う。

リビングの扉を開け、男が玄関まで辿り着く、その時、

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピン

ンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン  
ンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン  
ンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン  
ンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン

ピン——ポ——ン

何度も、何度も何度も呼び鈴が響く。

男は一瞬気圧された、宅配では無いと、確信した。

ではなんだろう、押し入り強盗か？

ドアノブを握ろうとしていた手が震えている、それは、目の前の扉越しの恐怖からだった。

「あ、あなた……なに、今の!？」

「わ、分からない……オイ、悪戯なら警察を呼ぶぞ!!」

妻の言葉が引き金となり、怒声を放ちながら男が扉を開ける。

瞬間、突風がドア越しから吹き、男が少しよろめく。

何とか踏みとどまり、周りを確認する。

子供……いない。なら大人……それもいない。

逃げたのか、男はそう確信し、単なる悪戯だと思ひ込み、扉を閉める。リビングまで移ろうとして、男は異変に気付いた。

「ん、扉が……閉まっている?」

男は、確かに閉めたはずだった。

恐る恐る、扉を開け、リビングを確認する。

そこには、主菜を黙々と食べている妻と、

主食を食べている2歳になったばかりの子どもの姿だけだった。

「———な、なんだ……お前ら!」

そう、私の息子と、妻が。

愛しき私の息子は餌の頭からかぶりつき、その血と脳スライを同時パンに食していた。

おやおや、これはいけない。

折角、昨日のうちに餌から頂戴したというのに、すぐに汚してしまつては、後で説教だな。

そうだ、忘れてしまつていた。

私の傍にいる、餌も早く下処理をしなくては。

手馴れた動作で、私は男の手首、足首、そして喉笛を搔っ切った。私に気付かなかったのか、男は目を見開き驚いた様子で、私を見た。人の肉は生きている間が一番美味しい。そして丁度、お腹も減っていた。

まずは合掌、神様、今日も美味しいご飯をありがとうございます。そう感謝し、いただきますと呟いて私は目の前のご飯にかぶりつく。

「……ああ、なんて、美味——」  
身を震わせながら、私達は仲良く、団欒を囲み朝食を食べた——

## 正体不明の影を追え 《秤》

ルーラーが現在、身を寄せている教会にて。

白地に金の刺繍が施されているジャージを着用しているルーラーは神父の個室の前へと立つ。

「失礼します、小岡神父」

扉をノックし、部屋へと入る。

部屋では、小岡神父が何やら資料を読んでいたのだった。

資料には霧島義隆や、ユースタスの写真などが貼られており、それがマスター達の情報だと言うことは一目瞭然であった。

身を乗り出すように資料を見て、ルーラーが訊ねる。

「なにか、不可解なことでも？」

「ええ、丁度、物凄く気になるところがありました」

そう答えながら、神父は写真の貼られていない資料に指を指す。

そこには、「裏切 雄大」と記されていたのだった。

「この青年の名前ですが……じつは過去に聖堂教会に属していた老人の名前なのです。名うての方で、実力は凄まじいものだったと、聞いております。

しかし、確か二年前か……その時に、霧島雅によつて殺害されてしまいました。

そして聞いたところによると、この資料に記されている青年はどうかやうやら日本人では無いようです」

「……成程、そういう事ですか」

神父の言葉には、裏切雄大という虚像の青年を、暗に英霊ではないかと含まれていた。ルーラーはそれを察知し、頷く。

しかし、

「しかし、どうやって?」

どうやってそんな長い間、サーヴァントが現界できてきたのです?」

魔力の問題もある。

だから、私は恐らくですが身分のない捨て子に裏切雄大と名付けた、と推測致します。

……それに、もしサーヴァントというなら、名前があまりにもあからさますぎる。

……あの子の名前を騙るなんて、本当に許せないわ」

瞳に炎を燃やしながら、ルーラーは力強く否定する。



小岡神父は、その、ルーラーが口にした青年について、聞きたかったことがあったため、恐る恐る訊ねた。

「時に、かの青年——イスカリオテのユダは皆からどう思われていたのです？」  
瞬間、ルーラーの気配が変わる。

剣闘士さながらの戦意に溢れた気配はなりを潜めて——その、悲しき命を憐れむ聖女然とした様子で、ルーラーは訊ね返した。

「——それは、貴方が思う聖女マルタとして、ですか？」

それとも、ただのマルタとして？」

「出来れば、両方言っていたら嬉しいですよ」

臆することなく、ルーラーに訊ねる小岡神父。

少し間が空いてからポツリと、

「……聖女としてなら、あの子に憤りを見せなければならぬでしょう。」

あの人を裏切りましたもの、そりゃあ、怒ります、それは、聖女でも。

ですが、でもね、小岡神父」

小さく言いながら、凜として小岡神父を見る。

「——ただのマルタとしてなら、私は彼のことを今でも可愛らしい弟だと思つて  
います。」

……人は、一度は間違えてしまうものです。

それも、家族の間違いならば、いくらそれが大きいものでも少しは、甘やかしたくなつてしまうものですよ？」

「……なるほど、根底にある家族への愛は不変である、ということですか。

申し訳ないですが、他の方々のことをお聞かせ頂いても？」

私、昔からの夢でして。

かのお方の弟子たちはどのようなひとだったのか、と問うことが」

「ええ、いいですよ——」

快く微笑み、ルーラーは生前の事を語らう。

そうして、ひとしきり談笑を終えた後に、ルーラーはこの部屋を訪れた目的を、果たすことにした。

「小岡神父、おひとつお訊ねさせていただきます」

「ええ、構いません」

微笑みながら、了承する小岡神父。

すう、と息を吸いルーラーは訊ねた。

「——この街、いえ、この市の事です……」

小岡神父、貴方は私に今朝、買い物をお願いしましたね？

妙に店も指定していたのでなにか疑わしいと思つてはいましたが……この街、さては一度聖杯戦争が行われましたか？

街の人にも、警官の方にもお訊ねして、ある程度証言は揃えています。

先ずは、吸血鬼事件と呼ばれる連続殺人。

次に、とある男子高校生の行方不明事件。

そして——とある高校の校舎で起きた、謎の爆発事故。

……どう考えても、聖杯戦争の痕跡です」

ルーラーの言葉に、小岡神父は何処か、嬉しそうに微笑み、ええと頷いた。

「……如何にも。」

この街では、一年前に聖杯戦争が行われました。

参加した魔術師は、霧島に代わつてこの土地を支配していた美月家。そして、その土地に古くから根付き、美月、そして霧島両家に睨まれながらも暮らしていた朱勾家。

そして……聖堂教会から魔術協会へ鞍替えした異端、ファミリア家。

その三家が派手に争つた形跡です。

貴女には、一度、この街の惨状を見て欲しかった」

微笑んでいた口元は、どこか悲しげに下がっていた。

「この街は、泣いている。」

私にはそれが分かります。

だから、だからこそ……私はこの立て続けに行われることとなつた聖杯大戦をどうか、最小限に抑えて終わらせたいのです。

その為には——」

小岡神父はルーラーの方へ視線を移した。

「貴女のその、全サーヴァント達へ通用する、ルーラー特権である令呪を用いて欲しいのです」

そして堂々と、ルーラーへ不正を懇願した。

言葉にはしなかつたが、「自害させてほしい」どこかそう聞こえた言葉に、ルーラーは、

「——いいえ、いけません」

穏やかで、お淑やかだった彼女とはまるで別人と見違えるかの如く、厳しく、断つた。「ルーラーとして与えられた、この調停者としての役割を放棄する訳にはいきません。」

……さすがに暴れすぎているサーヴァントにはもちろん、令呪を用います。

……神父、貴方の気持ちはよく分かります」

憐れむように、ルーラーが言う。

「しかし、貴方にも責務があるように私にもしつかりと果たすべき責務があるのです。でも良かった」

そして、どこか嬉しそうに呟いた。

「——貴方が、この街を好きでいるというのが理解出来たので。

神父、祈りましょう。どうか、この聖杯大戦が迅速に、そして被害が最小限に収まるように。

貴方の大好きな街が、一刻も早く治るように」

ルーラーが手を差し伸べる。

小岡神父は、昨夜と同じくして、その手を震えながら、握り締めたのだった——

## 開始前 《陰陽》

時刻は十八時を過ぎ、霧島邸では食堂にて聖杯に選ばれた六人が食卓を囲み、今夜に向けての会議を行っていた。

「切翔、お前にはそうさな……江松少学校あたりでサーヴァントの探索を行ってもらおう。」

本来ならば儂わたしの務めではあるが丁度今、サーヴァントが出払っておつてな。

それに、言うことを聞かぬのだ。令呪もこんなことで消耗したくはない」

といつても、義隆の考えていること通りに動いてもらうだけであつて、他の面々はそれに従う、それだけだつた。

「次に忠吉。お主は竹流と共にこの屋敷の護衛をしてもらおう。」

そして遊人、お前はそこのホームクルスと共に切翔とは別方面の場所を。

最後に彪斗、お前は……まあ、好きにするが良い」

言つても無駄、そう悟つた義隆は彪斗には自由行動の許可を出す。

願わくば、こちらが有利になる動きを期待して。

「はいはい!!」

バーサーカーと遊ぼっと!!」

——しかし、その期待は一瞬で捨て去った。

そして脳裏で、誰かのサーヴァントが敗れても彪斗を始末してサーヴァント権を移そうと企てるのだった。

「……我が血筋の恥が」

見下すように、彪斗を睨みながら忠吉はフォークに刺していた肉を頬張った。

黒毛和牛の程よく締まり、そして蕩けるような食感に舌鼓を鳴らしながらその旨さを堪能する。

「……ま、彪斗ツチは何言っても無駄だかんねー」

本人は独り言のつもりだったが、それが忠吉の言葉に同調するようになりながら、遊人はカビの生えたパンを口に運ぶ。

パサパサと乾いた、そしてカビが生えている不衛生な汚物といえるソレに、遊人は不快感を抱きながら、半ば無理やり口に運ぶ。

「……あ? 黙れよ遊人ー、ガキの頃みたいに虐めてやろうか?」

ニコニコとした笑顔で、彪斗はあまりにも紅い麻婆豆腐をレンジで掬い、滝のように汗を流しながら食す。

彪斗の無邪気な、しかしそれでいてどこか圧をかけているかのような笑顔。

しかし、慣れきった遊人にとっては恐怖でもなんでもない。

「ごめんごめん、気を付けるよ」

ただの、子犬が拗ねたようなモノと同一視されていると知らずに、彪斗は遊人の軽薄な謝罪に満足し、再び麻婆豆腐を食べ始める。

「……………」

皆が食事をしている中、切翔は自身の目の前にあるサンドイッチをただ、見ていた。

「どうした切翔？」

……なにか不味いものがあつたのか、言ってくればこのサンドイッチを作った無能な侍女を始末するが」

「そうじゃない、むしろ逆なんだよ竹流おじさん」

物騒なことを言い出す竹流に誤解を解きながら、切翔は部屋の扉前にいる侍女の方へ視線を移した。

「すまない、これと同じのを後で作ってくれるか？」

……美味しくてね、携帯食料にしたい。

すぐに食べられるように一口サイズにしてバケットに入れてくれたら助かる」

「は、はいかしこまりました!!」

嬉しそうに侍女が頷き、すぐさまキッチンへ移る。



それをどこか不満げに、竹流は睨みながら、荒々しくステーキにフォークを突き立てた。

「……俺はもうこれで失礼する」

言い残し、竹流は部屋を後にした。

切翔も勢いよくサンドイッチを食し終え、すぐに席から離れた。

「……竹流め、もう四十手前だと言うのにマナーも守れんのか」

弟の乱暴さに、自身のことを棚に上げながら忠吉は溜息をつき、最後の肉を頬張る。

そして、合掌して席を離れた。

「威勢がいいなあ、彼奴らは。」

お前達も見習うことだ、遊人に彪斗」

ほぼ同じタイミングで席を外す義隆。

「……………」

「……………」

気まずい空気の中、彪斗と遊人は食事を終えたのだった。

一方、陽の陣営は。

皆、携帯食料を片手に今夜の動きを話し合っていた。

「——私とアグリッパの二人で行動を取り、霧島邸を叩くのはどうだ？」

「いや、それはダメだ」

ユースタスの提案に、早くも雅が否定する。

「まず、奴らはなにかトラップを仕掛けている可能性がある。」

無策に敵陣へ乗り込むべきではないのは、長年時計塔を生き延びてきた君ならば分かるはずだジャック・ユースタス」

「承知の上だ。」

確かに、トラップの可能性は考慮したがそれはミヤビ、君がいた時の話だろうか？」

しかし、真つ向からユースタスは切り返した。

「……ヨシタカの性格上、アイツは必要以上に裏を掻こうとする悪癖がある。」

君がいた時は、トラップを仕掛けていただろう。だから当然、我々も、ヨシタカがトラップを仕掛けていると思ひ込み警戒して攻めあぐねるだろう。

そう、ヨシタカが予想しているとする。

となると、ヨシタカのとる行動は簡単だ。

守りを最小限に削り、戦力の殆どを攻めにする。

その最小限の戦力を一気に削ればこちらのものではないか？

これは、この初日にしか通用しない戦法だと思っただがね」

同期だった彼は、義隆の人間性を熟知していた。

故の、義隆の考えていることを衝ける。

ユースタスの言葉に雅はほう、と興味深そうに頷く。

「……決まりだねえ。ユースタスの言った、僕とユースタスの二人で攻めるといっのは

——」

「お待ちください、異議を唱えます」

決まりそうだったユースタスの案を、雄大が手を挙げ、止める。

ピクリと眉を動かし、ユースタスが続きを促した。

「——あなた方には別れてもらいたいです。

片方はレクスさんに、もう片方はミヤビに。

……私は、バエルさんとともに行動を取ります。

そして、我々が霧島邸に切り込みましょう」

「理由を聞こうか、裏切くん」

ええ、と頷いて雄大が応える。

「まず、戦力を集中させすぎです。一気に叩きたいのは分かりますがこれでは、貴方の考

えが裏目に出て、他の強力なサーヴァントと交戦した場合、敗北は必至となるでしょう。特にレクスさんの……最弱を自称するセイバーとかが。

ただでさえ数で負けてるのだから、そう危ない賭けをするべきではないでしょう。

だから、こうして、なるべく「安全」を取りましょう」

「しかし、ゆつくりと戦っても進展がなければ意味が無い」

負けじと、雄大へ反論するユースタス。

しかし、

「博打をして負ける方が意味が無いでしょう？」

……この世に『絶対』なんてないのですよ、ジャック・ユースタス……貴方はもう少し、冷静に考えられていると思っていましたが」

煽るねえ、キミ。

そんなに人を見下して、楽しいのかい？」

見事に一蹴され、そして残念そうに呟く雄大を、アグリツパが睨みつける。

「……揉め事はよせ」

しかし、バエルが間に割って入り、仲裁を図る。

「当面の目的はなんだ、霧島討伐だろう？」

ならば、ここで醜く言い合っても負けの方へ傾くのみだ。

……ユースタス、アグリッパ。コイツを認めろ。  
人は認めなければ前へ進めない。

勝つのだろう、ならばプライドを捨て、雄大を認めて勝利の道へと進め」  
バエルの放つ、力強い一声に雄大は勝ち誇った顔をした。

「そして、貴様もだ裏切雄大。

自身の立場を自覚しろ。お前は、ここでは不可解かつ、不気味な存在。

なぜ生かしているのか、それは最低限の戦力の為だ、と」

「……わかりました。まあ、ここはもういいでしょう」

「オイ、もうユードアイの言ったことでもいいだろ？」

オレは……アグリッパの方へいかせてもらおう、バエルはユースタスの方でいいだろ  
？」

ガタリ、と椅子を倒しながら、レクスが話し合いから離脱しようとする。

もとより彼が長話が嫌いなのは時計塔の魔術師全員が熟知していたため、レクスの離  
脱を見逃す。

部屋から出る間際、レクスは

「……なんか、今夜は殺りごたえありそうな気がするぜ」

どこか嬉しそうに呟いて、部屋を後にした。

レクスが部屋から出た後、やれやれと肩を竦めながらユースタスが苦笑し、レクスを見送るのだった。

場面は変わり、再び霧島邸にて。

切翔は、サンドイツチを受け取りに厨房へと訪れる。

そこには、さつきまでなかったのに、顔に痣が出来ている先程の侍女がいた。

「……その痣はどうした」

「え、えつと……ごめんなさい、転んだ時にテーブルの角にぶつかってしまつて……醜いところをお見せしました!!」

切翔が一応、訊ねると侍女は慌てながら謝罪し、背を向ける。

(……胸糞が悪いな、本当に)

切翔は察した、竹流が腹を立てて侍女のことを殴りつけたのだらうと。

そして、誤魔化すようにキツク言いつけられたのを想像しながら、切翔は齒を噛み締める。

「……そうか、気を付けろ。」

さて、サンドイツチを受け取ろう」

しかし、切翔が竹流に言つたところで、彼は変わらない。

それどころか、この侍女のことをさらにキツく当たり散らすのは容易だった。

ならば、ここは侍女の言葉を受け入れることが一番丸く収まる。

これが、一番平和に終わるということに切翔は胸の奥底から自身の不甲斐なさに腹を立てる。

「は、はい!!」

少しお待ちください、切翔さま!!」

嬉しそうに侍女が明るい笑顔を見せて、少し離れたところに置かれてある冷蔵庫からバケツトを取り出す。

たまた、と小走りで切翔の元へ侍女が駆け寄り、ソレを渡した。

「どうぞ、切翔さま」

「ありがとう、そしてすまない」

受け取り、切翔が微笑む。

背を向けて厨房から立ち去る、その寸前に侍女が切翔を呼び止めた。

「あ、切翔さま、差し支えないようでしたらお訊ねしてもよろしいですか……?」

「なんだ?」

立ち止まり、侍女の問いを促す。

どこか気まずそうに侍女が、訊ねる。

「そのサンドイツチ……もしかして遊人さんにお渡しするのでしょうか？」

侍女の問いに、切翔をピクリと指を動かした。

微かな動揺を見せたが、侍女はそれに気付いてはいない。

しかし、切翔は観念したようにため息をだしながら頷いた。

「そうだよ。……遊人、いつもカビたパンだの腐った米だのを食わされてるからな。

コンデিশヨンは最悪なハズだ。

次期当主としては兼ヤツの兄としては困る事だ」

誤魔化しながら答える。

先程の動揺は気付かな侍女だが、切翔のこの言葉は嘘だと、気付き、クスリと笑う。

「……ありがとうございます、私、あの方が好きなので……そう気遣って頂けるととても嬉しいです」

「遊人のことを？」

ええ、と侍女が頷いた。

「あの方、たまに私達の事を労ってくれるのです。

自身の境遇などどうでもいいと、笑いながら、明るい顔で。



とても、優しいお方です。ここの侍女として育てられ、乱暴に扱われている私達にとつて、唯一の救いでしたから」

「……そうか」

侍女の言葉に、切翔は嬉しそうに微笑みながら、厨房から立ち去った。

そして、遊人の部屋へ向かおうと足を運ぶのだった。

少し経ち、切翔が去った後。

「——お役目ご苦労、切翔のことを誑かそうとした売女。」

切翔からはいいいことを聞けた、コレを父に言いつけて罰を与えらるゝとして……お前は前はどうしてやろうか？

いやまあ、すまないな。

殺すことは確定しているんだが、犬の餌にしてやろうか、それとも祖父に身体の全てを礼装として使うようにしてやろうか、考えているところなんだ」

奥にある、侍女達の休憩所から竹流が姿を現す。

ずっとそこで切翔とのやり取りを盗み聞きしていたのだった。

「——まったく、卑しい女だよ。」

お前は、あの霧島雅と同じだな」

瞳には明らかな怒りが籠っている。

「……煮るなり焼くなり、罵倒するなりお好きなように。

私はただ、本心を言っただけですから。

私は本当に、遊人様が好きでした。

……貴方に、あの方がどれほど酷い仕打ちを受けたというのに、あの方は私達に明るい顔で、労ってくれた。

私達なんかよりも酷い扱いだというのに」

侍女の脳裏に、遊人の笑顔が映る。

これだけは次の人生でも忘れない、その決意に呼応するように。

「……さようなら、最低な人。

せいぜい貴方なんか、一人で虚しく死ぬことをお祈りします」

最期に、彼女はどこか覚悟を決めたように竹流に言い放った。

怒りを増幅させた竹流は強引に侍女を引っ張り、義隆の元へと連れていくのだった――

## 短話・復讐鬼の影を追え 《無》

時刻は十九時前。

とある路地裏では、煙草を吸いながら堂々とした態度で歩く男と、その取り巻きが複数人いた。

「でさ——」

男が何かを言おうとしたが、目の前の異様な景色を前に塞がった。

「——グ、グググ」

男達の目の前には時代が逆行したと思わせるかのような、見事なほどしつかりと造られた鎧兜を装着した、目が虚ろな男がいた。

「なに、コイツ……？」

「な、なんかヤバそうじゃね？」

「……普通に怖いんだけど」

目の前の異形を前に、男達は恐怖を感じずにいられない。

不意に、鎧兜の男が

「……オマエ、ゲンジ、カ、カ？」

鋭く目を光らせながら、問う。

答え次第ではなにか行動が起こるのは明白だった。

男達は――

「……逃げようぜ、キメエわまじで」

無言のまま、逃げ去ることを結論付けた。

男達は、鎧兜のせいでそんなに早く走ることはなく、自身達には追いつけないだろう。

そう、夕力をくくったのだった。

皆、背を向けて逃げようとする、その時だった。

「――ムゴンハ、コウテイトミナス」

鎧兜の男がそう言うのと同時に、先頭を歩いていた男は横からなにか冷たいモノが飛び散ってきたのを認識する。

横の方へ視線を移すと――飛び散ったモノは紅く。

そして、仲間だった男の一人の首が無かった。

「――逃げろテメエら!!」

オレが出来るだけ食い止めてやるから、速く!!」

鎧兜に掴みかかろうと腕を伸ばす。

しかし、次の瞬間には鎧兜の姿は消えていた。

「——あ、アツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイ……モ、モエテル、おれ、もえ、もえちまつ……  
!!」

慟哭と共に男の仲間の一人が燃え盛った。

それと同時に、殆どの数の頭が無くなっていた。

「——ゲンジハユルサン。ワタシカラナニモカモヲウバツタ、ニクキ、ニクキゲンジハユルサナイ……!!」

形相はまるで鬼のように。

慈悲も無く、ただただ地獄への水先案内人を鎧兜は務めた。

そうして、鎧兜は屠り尽くした。

一人、残されたリーダー格の男は鎧兜を涙を流しながら、恨めしそうに睨んでいた。  
「……オマエハ、ゲンジ、カ?」

しかし、鎧兜は意を介さずに訊ねる。

淡々と、殺意を潜めて。

固唾を飲み、最後の抵抗だと言わんばかりに男は頷いた。

それが、最期だった。

——三日月のように描かれた軌道と共に、まるで豆腐のようにあっさりとも男の首が切り飛ばされ、男の息の根が止まった。

切り口から勢いよく吹き上がる鮮血を、雨のごとく鎧兜が受け止める。

「——アア」

歓喜の声漏れる。

その鎧兜の下もまた、酷く雨が降<sup>泣</sup>っていたのであった。

## 開戦直前《陰陽》

切翔が遊人の部屋前まで着く。

扉をノックすると、遊人が怪訝な表情を浮かべながら部屋から出てきた。

「……なんか用かよアニキ？」

「コレを渡そうと思つてさ。」

お前、あんなもん食わされて流石に憐れだと思つてな」

手に持っていたバケツを突き出す。

遊人は目を丸めながらソレを見つめ、切翔に訊ねた。

「サンドイツチ？」

切翔が頷く。

すると、遊人はさらに不気味そうにしながら訊ねるのだった。

「なんで？」

「こんなリスクな事したら、アニキやばい事になりそうだぜ？」

「いい、それでも。ただ一人の弟なんだ、それを見殺しになんてできない。

それにガキの頃、良く喧嘩した時に母さんに口をうるさく言い聞かされたろ？

「兄弟なんだから仲良く、助け合って生きなさい。ゝ、つてさ」

「……言つてたねえ、そういえば」

どこか懐かしむように遊人が目を細める。

「じゃあさ、アニキ。これは覚えてる？

ぶつ潰れたクソみたいな遊園地に親父と一緒に忍び込んでさ、訓練つて言いつつも思

いつきり遊んでさ」

「そういうのもあつたなあ」

切翔の脳裏に浮かび上がる、父と弟、そして自分と母親が仲睦まじくはしやく光景きわく。

「なら良かった。

覚えてる、兄貴が親父とずっと白い鳩の話してたけど、それを見てた僕が拗ねちやつ

てさ」

「覚えてる。

その後、お前を宥めるの苦労したよ」

いやーといいながら、遊人は高笑いする。

「あの時はホントに餓鬼だったよ。



……ま、今もだけどね!!」

「そんなことは無いさ。」

まだガキだつてんならお前は侍女にモテる筈がねえからな」

「冗談はよせよアニキイ……つて、そろそろ時間じゃん。」

じゃ、頑張つてーあとありがとねコレくれてさ」

手を振りながら遊人は扉を閉じる。

閉まる直前、

「遊人」

切翔が呼び止める。

ピタリと扉を止めて、無言で切翔の言葉を促す。

「生き残ろうな」

「トーゼンっしょ」

切翔の、力強い声に遊人は同調しながら扉を閉じた。

切翔が見えない敵の代わりに夜空を睨む。

夜空は、三日月が神々しく光っていた。

「……呵々、そうか。切翔はそのようにしていたか」

竹流から報告を聞いた義隆はどこか嬉しそうに笑う。

その姿に、竹流は疑問と怒りが混ざった感情を抱き、竹流に訊ねるのだった。

「……なぜ笑う、親父。」

これは笑い事ではない、明らかなる反逆——

「ならば貴様は、ただでさえ雅にほぼ壊滅的にされた戦力を、さらに減らせと申すか？

冗談は程々にしろ。

貴様は感情的になりやすい傾向にある。

……その起源、『禁忌』によるものからか？

ならば、貴様の起源を自覚させるのは失敗だった。

もう良い下がれ。

……遊人への罰は行おう、なあ小娘？

運が悪かったな。遊人がもうちと大人であればあやつと子を作らせたというのに。

彼奴の魔獣に関する能力は目を見張るものがあつた、そして貴様は私が殺した中でも

特に、有力だった魔術師の一人娘。

呵々、実に惜しかったな」

義隆の笑み。

それは、数々の死地を乗り越えてきた竹流でさえも思わず怖気付いてしまうほどだった。

だと言うのに、痣を作っている侍女は臆することなく義隆を睨み返した。

「……合格合格。」

さて、それでは貴様はもう下がれ竹流。

貴様を巻き込む可能性があるやもしれん」

義隆の言葉に、竹流はそそくさと撤退する。

義隆は、侍女の頭を掴み——

そうして、事が終わった直後。

義隆はふと、窓際に視線を向ける。

窓越しに居たソレを見て、義隆は笑った。

「……美月家の跡継ぎか？　御苦労」

『——あまり、派手な事はしないでもらいたいわね霧島家さん？』

あんまり酷いと不戦の契りを破って魔術協会へ加担も一考するけど?」

コウモリ越しから淡々と語られる、透き通るような綺麗な声。

しかし、その綺麗な声に少しだけ混ざっている怒りを義隆は難なく跳ね除け、笑った。

「呵々。

そう憤るな小娘。しかし、判断を違えた。

貴様には自己強制証明セルフギアススローに署名させる方が正解だった」

『……へえ、そう』

どこか意地の悪さを感じさせる声音。

『私からしたら忘れてるって感じだったけど、お爺ちゃん?』

まあ、その歳だものね。認知症になってもおかしくないわ』

続く言葉は、義隆の事を嘲るかのようだった。

間が開き、義隆は見抜かれ、そして嘲られても不敵に笑いながら切り返した。

「……ほう、たった一度のやり取りでこうも勘づかれるとはな。

中々に鋭い洞察力、流石はこの街の姫君だ。

とても、先の戦いで想い人を亡くしたとは思わせん気配だ」

『っ……!!』

言うじゃない、この老害』

明確すぎる怒り。それを嬉々として義隆は攻め入る。

「どうした、先程の威勢が一気に落ちぶれたな？」

余程、愛しかつたのだろう。だからこそ、貴様は大いに動揺をしたわけだ」

『……フン、ホントに気に食わない。』

アンタよりも、ファミリア家の方がまだまだ可愛げがあつたわ。

まあ、言いたいことは言つたし私はこれで失礼するわ。

……これ以上、胸糞悪いモノも見たくないし』

蝙蝠のが飛び立つ。

その蝙蝠を見送りながら義隆は、

「さすれば、みづきよぞら美月夜空。

次に相見える時は我が手で……」

そう呟くのだつた。

---

祈りはしない。

ほく私は、あの日の過ちから眉唾なものなど信用しない、するべきでないと学んだから。

神などいない。

私の結論。それは、正しいのかは分からない。しかし、いるのなら——なぜ、神は彼を見殺しにしたという疑問しか湧かない。

「——??、準備が出来た。」

お前と私は別行動だが、しつかりやれよ?」

同胞が不意に声を掛ける。

いつの間にいたのか、それは分からない。

しかし、いまさら驚くことでも、怒ることでもない。

「ええ、問題はありません。」

いざとなれば私の??で、敵方にはおさらばしてもらいますので」

自然と、頬が緩む?

なんて、なんて上手く進んでいるのか、そう内心では歓喜しながら。

正直、令呪が宿るとは思わなかった。

それもあるが——こんなに心強い味方がいるなんて、微塵も思ってたなかった。

「……やはり私は運がいい」

「ん、眉唾なものは信じないのではないか?」

「ええ、信じてません」

きつぱりと断言して、私は言葉ほくを紡ぐ。

「しかし、たまにはいいでしょう？」

こういう、くだらないことで歓喜したい時などに、呷くことくらいは「

どこか、呆気なさげに口を開いた彼はすぐに口を閉じ、笑うように頷いた。

「そうか——まあ、そうだよな。

たまには、いいんじゃないか？」

彼の言葉に、私は再度、口角を緩ませた。

## 狼の影を追い《陽》

二十二時を超えた頃、切翔は「陽」のセイバーを連れて、江松小学校付近へ赴いた。気配等は感じ取れなかったが、それでもアシン等が潜んでいる可能性があるかと踏んでの事だった。

「……………いるか？」

恐る恐る、敵からの奇襲を警戒し、切翔は周りを見る。

しかし、周りには人影など無かった。

だが——江松小学校の校舎の中に、資料で見たことのあるある魔術師の姿を確認できた。

現在、時計塔で中で特に実力が高いとされる、王の名を冠した男。

「アーベル・レクスか？」

……………そうか、奴もマスターなのか」

銃を握りしめ、校舎から覗いているレクスを睨む。

そして、切翔は校舎へと向かう。

レクスのいた二階へ辿り着く。



そこには、待ちくたびれたと言わんばかりにレクスが堂々とした様子で立っていた。  
「よお、遅かったな霧島の。」

……やっぱり、オレの勘は当たってたぜ。

初戦の相手はてめえとはな霧島切翔!!

嬉しいぜえ、なんせ——仇の息子だからな、代わりに無様に殺してやるよ」

「……そうか。ところで知ってるかアーベル・レクス。」

「弱い犬ほどよく吠える」という諺ことわざを」

切翔の言葉に、レクスは笑いながら頷いた。

「知ってるぜ。なんせ日本は元々大好きだったからなあ!!」

レクスが切翔へと接近する。

切翔を守るように「陽」のセイバーが前へと立ちはだかる。

しかし、隣の教室の扉を突き破りながら現れた、銀色の甲冑を装着した男、「陰」のセイバーに突き飛ばされ、そのまま彼によって踊り場まで押し離された。

「フハハハ、我輩の初戦ですな!!」

しっかし……流石は主殿の作られた礼装、素晴らしい限りですなあ!!」

喜びながら、「陰」のセイバーは剣を抜き、「陽」のセイバーへ切り掛る。

それと同時に道が開かれたレクスは、即座に手にもっている禍々しい赫色の刀身のナ

イフで切翔を襲う。

（あの赫色のナイフは何か、呪術的なものを組み込んでいるのだろうか？

……とりあえず、やつの武器がナイフならば銃を持っているこちらに分がある。

距離を取りながら、奴を蜂の巣にしてやる）

「距離を取らせるはずがねえだろバカがよお!!」

切翔の考えはレクスに読まれていたかのように、レクスが吼える。

切翔は動揺を見せずに、レクスにマシンガンによる数十の高速射撃を行う。

——普通の魔術師は、先ずこの連射を魔術で防ぎにかかる。

切翔はその時に、自身の切り札を叩き込むつもりだった。

しかし、レクスは切翔の描いた凶通りに行かせてはくれなかった。

「莫迦が、オレは耳がいいんだ。

銃弾くらい、どこに飛んでくるかなんて予想出来らア……!!」

真つ直ぐ飛来する弾丸を、レクスは天井、側壁に跳んで回避した。

まるで、空を踊るかのように。

その姿は美しく、そしてどこか獣のような鋭い目付きで獲物を睨んだ。

「なっ……!!?」

「——死ねや霧島ア!!」

動揺する切翔へ向かってナイフによって無慈悲に描かれる、赫色の弧の軌道。

回避が不可能、切翔すらも思っていたがそれは切翔の背後から突如として流れてきた水流によって阻まれ、レクスは遠ざけられた。

切翔を避けるようにその水流は行進し、そして剣戟を行っている最中の“陽”のセイバーの剣の元へと帰って行った。

（今のはセイバーか？

……よくやってくれた）

「――強化開始cut――」

魔力を集中させ、切翔が詠唱する。

義隆に教えられた数少ない魔術の一種類、“強化”の魔術だった。

「……クソが、あのポンコツナイト何やってんだよ、足止めくらいしやがれつての……!!」

水流により吹き飛ばされたレクスはよろめきながら起き上がり、愚痴をこぼす。しかし、レクスからは相当な余裕を、切翔は感じ取っていたのだった。

（そりや当たり前か……セイバーの援護がなければ俺は死んでいた。

まだまだ未熟なのは承知してだが……こども甘いとはな。

レクスは当然、こんな俺を見て余裕だと思っただろうな）

切翔は、マシンガンからナイフに持ち替えた。

マシンガンは重りになるから、後ろへと放り投げた。

切翔の行動を見たレクスは笑う。

自身に対してそれは自殺行為だと、嘲る。

「オイオイオイオイ、マジかよ霧島!!」

次期当主って、道化の才能もあるんだな!!

すげえおもしれえぜ、爆笑しすぎて腹が砕けそうだよ!!」

「——お前が、サーヴァント並に速いのは分った。

しかし、もう慣れた」

「くだらねえ減らず口が……!!」

再度、レクスが駆ける。

まるでスポーツカーの最高速度のように。

しかし切翔は、今度は彼の速度をしつかりと捉えていた。

迷わずに懐に隠していたもう一つの銃コンテナーを抜いて、レクスに向かって弾丸を放つ。

「!!」

——先程のマシンガンの銃弾が無数のナイフならば。

この、切翔の次に出す弾丸は一つの線を描きながら奔る、全てを貫く槍だった。

弾丸はレクスの方へ目掛け飛翔する。

しかし、レクスは、すんでのところで回避を行った。

だが、それは切翔の誘導だった。回避するのは読んでいた、だからこそ彼はそこへナイフを投げたのだった。

コンテナーの弾丸を放った直後、レクスの意識が弾丸へ集中するのを読んで。

レクスはその空を翔けるナイフを回避することが出来ず、そのまま肩へと深々と突き刺さる。

「チツ……!!　　ゴミが!!」

乱暴にナイフを抜く。

切翔はすぐさま、二発目の弾丸を放った。

その弾丸は、切翔の始<sup>起</sup>まり<sup>源</sup>が詰まった魔弾。

狙うは脳天。

その狙い通りに、魔弾はレクスの脳髓へ翔けるのだった。

『——起源弾』

切翔の脳裏に、義隆の声が過ぎる。

それは、切翔がソレを作ってもらった時だった。

『かの魔術殺し、衛宮切嗣が用いたとされる、大魔術師用の礼装。

……貴様の起源は奴ほど強力ではないが、似たようなモノだ。

奴が切り離れた魔術回路を雑に繋ぎ、再起不能にさせるのがその起源弾の力ならば。

貴様のは、切り離れた魔術回路をどこかへ翔けさせる。

……相手がフルで魔術を行えば相手は暫くは魔術を扱えんくはなる。

しかし、相手が中途半端な力ならば魔術は行使できる、もちろんフルパワーではないがな』

どこか残念そうな声。

義隆はそのまま、切翔へ笑みを浮かべた。

『使ったら確実に逃がすな、そして己が父親にも、弟にも己が起源を明かすな。

そうすれば、貴様は衛宮切嗣のような確殺の魔術師殺しとして世を震え上がらすことが出来るだろう——』

その、不気味な笑みを切り崩すかのように、凶弾は翔ける。

しかし、レクスは不敵に笑みを浮かべると同時に、彼の体から発生した煙と共に、姿を隠した。

セイバーの位置を確認するため、振り返るが、そこにはもう二体の姿は無かった。

代わりに、側壁が崩れており、一階の運動場で何やら斬り合っていた。  
 (……セイバーの助けはもう来ないだろう。)

それとも、十二カ

に変わるのか——)

マシガン拾い、さらに後ろへと退く切翔。

そうして、煙が外へと出ていきレクスの姿が現れる。

——月の光に照らされ、レクスの体は全身が毛皮に包まれ、そして頭部が犬、否、狼へと変貌していた。

切翔は、資料にあった化け物を思い出し、言葉に出した。

ウエアウオルフ  
 「人狼……!!」

なるほど、貴様は純粋な人ではなかったのか。

アーベル・レクス。なるほど貴様は初戦の相手としてくるのは必然だったか」

「——王<sup>レクス</sup>、なんかじゃねえよ」

牙で、切翔の起源弾を砕く。

そして、先程よりも更に凶暴な鋭い視線を向ける。

(来る!!)

切翔が身構えた次の瞬間、

レクスは、眼前へと迫っていた。

「なっ、  
ルプス——!?」  
 「狼だ。」

オレの本名は、アーベル・ルプス。

レクスは渾名みてえなもんだよ、地獄で覚えとけ」

——切翔の腹部が貫かれる。

その樹木のように太く、そして硬い腕によつて、貫かれた。

切翔は、口から血を吐き出し、そしてレクスを睨んだ。

どこか、諦めを捨てていないその目は、せいへの執着だろうか。

しかし、獣にはそれはどうでもいい事だった。

「ザマアねえなあ……霧島。」

ミヤビに見せてやりてえぜ、てめえの息子の死体を。

んで——オレと同じ思いを抱かせたいぜ」

レクスは牙を剥き、切翔の首筋へと迫った。

(まだだ、まだ、俺はここで死ぬわけには……!!)

切翔が足掻こうとするが、力がでなかった。



——  
そうして、鮮血が廊下へ飛び散ったのだった。

## 幽鬼の影を追え《巴》

切翔達とは遠く離れた、歌和西高校が建つてある山にて。

小さな教会の上にある駐輪場全体が炎で燃え盛っていた。

更には、森すらも火の海と化していたのであった。

「グ、ゲンジ、ゲンジゲンジゲンジゲンジゲンジゲンジゲンジゲンジゲンジゲンジ  
ゲンジゲンジゲンジゲンジゲンジゲンジゲンジゲンジゲンジゲンジゲンジ——  
ゲンジハドコダアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——」

燃え盛る業火と共に響き渡る、獣めいた咆哮をするは、先刻で複数の男達を殺害した幽鬼だった。

この山場まで彼は彷徨い、そしてなにか撃鉄が弾かれたかのように突如として暴れ始めていたのだった。

——ムネノオクカラ、エタイノシレナイイカリガアフレテクル。

ユノミカラアフレタチャノゴトク、ウラミガ、ツラミガ)

幽鬼は内心では戸惑っていた。

その怒りに対して、どうすればいいのだろうか。

そんな中だった。幽鬼の右手首が矢状のモノに貫かれていたのだった。

「テガ——」

「悪いことする鬼さんにはお仕置つてヤツキ。」

モモタローか、好きだろう男の子はよ？」

少し離れた所からの声に、幽鬼は視線を向ける。

そこには、緑衣で身を包んだ男、「陰」のアーチャーがいたのだった。

「キサマ、ゲンジ、カ？」

例外なく、幽鬼は訊ねる。

はて、と首を傾げて唸る。

「ゲンジ……？　げんじ……ああ、「源氏」か!!」

幽鬼の質問を閃いた「陰」のアーチャーは、ポンと手を叩きながら明るい笑顔で答えた。

「源氏だぜえ、なんせ美味しい上にハート型って洒落た形をしてんだからさ!!」

いやあ、還つたらカミさんと息子にも食わせてやりてえぜ!!!」

「陰」のアーチャーの答えに、彼の視線と魔力で繋いで遠くからその景色を見ていたユースタスは思わず頭を抱え、その場でしゃがみこんだ。

近くにいたバエルは彼に『大丈夫か?』と思わず訊ねたのだった。

「グ、ググ……ゲゲ」

そしてもう一人、〃陰〃のアーチャーの答えを聞いて反応するのは幽鬼だった。わなわなと、溢れ出る噴火の如きその怒りを、幽鬼は抑えることが出来たわけがなかった。

「あー……………」

なにか悟ったのか、陰のアーチャーは気まずそうに頬を掻く。

そして、

「悪いマスター!! オレ、モモタローにはなれねえわ!!」

ガハハと明るく笑いながら、答えるのだった。

「ゲンジノシンホウシヤ!!」

キサマライカスワケにハイカナイ、キサマラ、キサマラガクイニクイニクイ……二

クイイイイイイイイ!!」

それと同時に放たれる、紫色の炎。

何か魔術的なモノだろうか、ユースタスは脳裏で疑問に抱いた。

『アーチャー』

「分かっているよマスター!!」

気を付けろ、だろう?

任せな、モモタローにはなれんが……狩人にはもってこ

いの相手だからよ」

不敵な笑みを浮かべ、〃陰〃のアーチャーは手元からボウガンを出す。

それと同時に、矢を放った。

狙いも定めていない乱雑としか言えない射撃だったが、幽鬼はソレにどうしようもない違和感を覚え、炎で燃やすのだった。

——その矢は燃やさなければ心の臓に命中していた、それを感知した幽鬼は〃陰〃のアーチャーを睨んだ。

「キサマ、ブゲイシヤカ。

サスガダ、サスガサスガサスガ」

「あつれれ褒められたか？

すまねえが褒めるのはべっぴんさんだけでいいさね!!

そうさね……銀髪の、お嬢ちゃんとかどうだい？」

なにか確信を持つて言霊として出す〃陰〃のアーチャー。

幽鬼は、脳裏に消されたはずの女性の姿が映った。

「グ、ナンダ、コレハ」

「すまないねえ、せめて——この一射で死んでくれや」

それと同時に放たれる、魔弾。

幽鬼は先程と同様に炎で燃やそうとする。

しかし、それは出来なかった。魔力がちょうど枯渇しかけていたので、上手く発動しなかったからである。

しかし、狙いは心臓よりも下の腹部。

当たっても致命傷にはならなかった。

「そう、致命傷にはなりやしないさ……今はな」

“陰”のアーチャーが笑みを浮かべる。

刹那、突如として旋風が起こり、その矢の軌道が上へと描かれ直す。

腕で塞がなければ、幽鬼は咄嗟に右手を前面へと出そうとするが――

「ウデガ、ウゴカナイ」

「たりめえよ、ぶっちゃけ最初の一撃ちでお前さんを殺す事は出来た。

オレの宝具は常に発動しててね、当たる確率が一パーセントの確率でも九十九パーセントにすることが出来るのさ。

でもそれに甘えずこの状況を作り出したのは完全な隙、その一瞬……を狙ったからだ。

いつでも万全を期して殺すのが、狩人のやることよ」

不敵な笑みを浮かべながら、“陰”のアーチャーは言葉を続けた。

「最後に言っつてやるよ、これがオレの宝具。

「二射叛逆」……分かったかい、このオレの名前は。

そうさ、オレの名はウィリアム・テル。

愛すべき同郷に呼ばれたナイスガイよ!!」

矢が奔る、奔る、奔る。

今まさに幽鬼の心臓を射抜くべく、奔る。

幽鬼は為す術なく、殺される運命であった。

「……すいません、弓兵殿。」

「この愚行をお許し下さい」

その、矢がある少女に切り払われるまでは。

銀色の髪をした少女、「陰」のバーサーカーは突如として、その場に現れて幽鬼に迫る矢を切り払ったのだった。

「……なんでもこうも聞かねえやい。」

正直言うとな、止められるのは分かっていたのよ。

だってこの鬼さん見た時のアンタの顔、凄かったからなあ。

べつぴんさんが台無しになるってくらいに絶望しきった顔だった。

だからよ、分かっちゃまったのさ。この鬼さんの真名が」

少女の運命を憐れむように目を伏せ、「陰」のアーチャーは幽鬼の真の名を口にす

のだった。

「よう、アンタの名前……木曾義仲……って言わないかい？」

「グ——」

思わず、幽鬼はたじろぐ。

名を言い当てられた、それもあるが幽鬼の脳裏には存在しないはずの、目の前の少女  
どの記憶が流れ込んできたからだった。

「ナゼダ、ナゼダナゼダナゼダナゼダナゼダ？」

ナゼ、ワガナヲシツテイル？

ソシテ、オンナ」

幽鬼は、〃陰〃のバーサーカーの方へ振り向き、訊ねるのだった。

「オマエハ、ゲンジ、カ？」

「え——義仲、さま？」

刹那、〃陰〃のバーサーカーは慟哭にも似た声音で幽鬼の名を口にす。

『呵々、雅のヤツめ、中々に酷いことをするでないか』

炎に包まれ、他の進入を許さぬ空間の中、突如として幽鬼の主である義隆の声が響い

た。

『おい、その女。貴様は巴御前であるな？』



であれば、残念だったな。その男、木曾義仲は“陽”のライダーであつたが我が令呪三画を用いてクラスを強引に返させてもらつた。

アウエンジャー  
復讐者。

それが、今の木曾義仲に与えられた器だ<sup>クラス</sup>」

「おいおい、一人だけ安全なところでかくれんぼかい？

酷いなあ出てこいよ!!

一回、その面を見てみたいんだがねえ!!」

“陰”のバーサーカーよりも早くに、“陰”のアーチャーが義隆に声を掛ける。

明るいが、しっかりと怒りを孕んでいるその一声を前にして義隆は嗤う。

『呵々、怒つたかアーチャー？』

怒れ怒れ。儂<sup>わたし</sup>は今、貴様らを侮蔑している。

怒るがいいさ。しかし儂<sup>わたし</sup>を殺すことは出来んよ、諦めることだな』

「御託はいいからとつとつツラ見せろよ？

ロミオとジュリエットはオレ、そんなに好きな話じゃねえからよ？

筋書き変えさせてくれや、頼むよ」

「義仲様、覚えていないのですか、私です、巴です!!」

“陰”のアーチャーが食い下がる中、“陰”のバーサーカーは幽鬼へと声を掛けた。

（トモエ……ナント、ココチノヨイヒビキノナマエ。ワタシハ、コノオナゴノコトヲ——  
」

『騙されるな、アヴェンジャー』

幽鬼が思い出しかけたその時だった。

義隆がソレを阻害するべく、虚実を囁くのだった。

『貴様はその女に騙されて窮地に陥った、貴様自身の仇はすぐそこだ。』

宝具の発動を許可する。仇を存分に討て、と』

「よ、義仲様……!! 違います、巴、巴は——」

「……ソウカ、ソウ、ダツタノカ」

“陽”のアヴェンジャーが頷き——憤った。

烈火のごとく凄まじい怒りを顕にし、自身の身体中の魔力を集中させ、ソレを唱えた。

「ワガイカリ、ワガウラミヲココニ。」

—— “オン・アロリキヤソウカ 呪観世音菩薩 !!”

幽鬼が唱える。

刹那、世界が呪いで包まれる。

世界の表側テラスチヤが張り替えられていく。

その空は、生前を共にした“陰”のバーサーカーにとってはおぞましく、そして、忌々

しい光景でもあった。

消煙が昇る。

朝日を覆うように、存在を消すかのごとく。

其れは、木曾義仲の最期の戦場そのものの景色だった。

「——ア、アア……なんで、義仲様が……この光景を……??？」

栗津の景色が、巴御前の脳裏に、鋭利な刃物のように切り込まれていく。

『当然よ、そやつは復讐者。』

ならばこそ、死んだ際の景色が心象風景として遺るのは、当然ではないか？』

義隆は嗤う。

この数奇な光景を愉しみ、獲物を見つけた獣のように下品に口角を吊り上げ、幽鬼へ

命ずる。

『そうだ、それで良いのだアヴェンジャーよ。』

貴様は、道化となつてもらわねば困る』

——義隆はもとより、陽 のアヴェンジャーのことを戦力として捉えてはいな

かった。

ただの玩具、もしくは実験道具として使役する。

それはおそらく、この世から退散するまで。

“陰”のアーチャーは、それを悟ってしまっていたのだった。

(……許せねえが、ここは仕方ねえ。

これは奴の宝具の中……危険なのは各々承知なはず、なればこそ令呪で撤退させてくれるはずだろうさ)

『——アーチャー』

「すまねえが逃げるのは俺の中ではもう決まったことよ、とつとと令呪使ってくれや!!」  
『ああ、ミヤビにも言っておく』

ユースタスの言葉はそれで終わる。

早く、早く逃げなければと焦る“陰”のアーチャーの眼前に、炎が現れた。

それに触れれば何が嫌な予感がすると思ひ、矢を炎に向かって放り投げると、炎に触れた瞬間に塵となった。

「あ、やべコレ……!!」

マスターは今、ミヤビに連絡してるだろうし参ったなあこりやあ!!」

冷や汗を滲ませながら、それでも“陰”のアーチャーは、笑みを絶やさずに炎から逃げる。

炎は、逃げる背中を追う。車のような速さで、“陰”のアーチャーに段々と迫る。

(……まあいいさ!!

マスターが間に合ってくれりやオレの勝ちよ!!)

「陰」のアーチャーが、そう笑みをより一層深く刻ませた刹那、彼の足元が突如として沼となり、彼の自由を奪った。

「なっ……!!?」

そうして、沼の前へと炎がたどり着く。

それと同時に、姿が「陽」のアヴェンジャーへと変貌する。

彼は剛弓を手に、矢を番える。

「ココマデダ、サラバ、サラバダカリウド」

「いいやまださ、なんせ間に合ったからな!!」

「陰」のアーチャーの堂々たる宣言に「陽」のアヴェンジャーが首を傾げた瞬間――

背後から「陰」のバーサーカーが、彼の弓矢を両断した。

それと同時に、二人が光に包まれる。

令呪を用いた、空間移動が行われる予兆だった。

「――義仲様!!」

「陰」のバーサーカーが、叫ぶ。

涙を堪え、彼女は自身のことを忘れてしまった幽鬼に――変わらぬ愛を告げた。

「今は、貴方は巴のことを忘れてしまっていますが必ず、必ず思い出させてみせます!!」

それまで、復讐心に囚われて苦しいでしょうがどうか、どうか今暫く我慢を!!

貴方がどのような姿へと変わろうと、巴は愛しております!!」

「……妬けるぜ、アンタの嫁さん立派すぎるじゃねえか」

“陰”のアーチャーがぼやく。

そうして、二人は光へと包まれ、この世界から逃避した。

「——アア、ナゼ、ワタシハカナシイ?」

二人が去った後、暫く動かなかった“陽”のアヴェンジャーが呟く。

その目には、一筋の涙が流れていたのだった。

## 機械の影を追え 《陽》

江松小の純白の廊下に、血が流れる。

少数の屍人が、多数の人を仲間にするかのように血が拵がつていく。

「チツ——クソが」

忌々しげに舌を鳴らすのは、アーベル・ルプスだった。

彼の肩甲には深々と黒曜の短剣が刺さっており、刺さった箇所からは鮮やかな赤が流れていた。

(……殺気を感じて咄嗟に躲したのは良かったが……サーヴァントか、クソ、厄介だな)

「……アサ、シン……なぜ、ここに……遊人は……」

なにを、と言いかけた切羽を遮るように「陽」のアサシンが口を開いた。

「なに、ただ——言われたままに従っただけさ、『キミは「陽」のセイバーの援護をしろ』、というユウトの指示にね」

時は遡ること数分前——

ある家電のショッピングモールへと足を運んでいた遊人だったが、ふと立ち止まり、  
“陽”のアサシンへと振り返った。

「アサシン、悪いけど江松小まで行つて、アニキの援護に行つてくれる？」

「な、何を馬鹿なことを言う貴様!？」

私一人でどうにかなると思つているのか、セイバーやアーチャーなどといった魔術に  
耐性のあるサーヴアクトと出くわした際はどうするのだろうか!!」

怒鳴る“陽”のキャスターを一瞥し、遊人が嘲笑した。

「……お言葉ですが、もとより義隆にとつてはボクたちはいてもいなくてもいい戦力な  
ようでした。

じゃなきゃ、アサシンとキャスターとかいう正面からの戦闘向きのサーヴアクトでは  
ない二組で行動はさせないハズなんで」

「なっ——!？」

動揺する“陽”のキャスターに続き、戸惑いながら一号が訊ねた。

「あ、あの遊人様……僕は貴方の意見に賛成ですが、いいのですか？」



……義隆様が、使い魔で監視している可能性が——」  
「それは無いよ」

遮って、遊人が断言する。

「だってココ、美月っていう霧島が魔術師の家系の頃に不戦の契りを交わした魔術師のトコロの土地だもん。」

特に爺さんは使い魔含めた不可侵の契りを交わされたみたいでさ、ここに来たら監視なんてムリなワケよ」

強かに笑う遊人。

その瞳は明らかに義隆への反抗が現れていた。

「そんなわけさ、行ってくれアサシン。」

大丈夫さ、実は近くに戦闘用のホムンクルスを複数体控えてもらってるからさ。

奇襲に対しての備えもバッチグーよ」

ウインクをし、  
「陽」のアサシンに余裕を伝える遊人。

そんな、遊人のお調子者な姿に  
「陽」のアサシンは溜息を零した。

「分かったよユウト。」

……君の言うことに従うさ、それが一号の願いでもあるみたいだしね」

「……こうなれば、私も賛成だ。」

あの老害め、よくもこの私を下に見てくれた。仕返しのひとつをせねば気がすまん……!!」

“陽”のキャスターは、齒を強く軋ませながら、遊人に賛同する。

目を血走らせながら、霧島邸を睨んだ。

“陽”のキャスターは、自身よりも後に生まれた魔術師にコケにされ、怒り狂っていた。

其れは、魔術師としての誇りもあるが、人としての矜持が大きかった。

尊敬の念を蔑ろにし、サーヴァントを下に見る義隆の態度に、“陽”のキャスターは燃えたぎる怒りの焰を瞳に宿していたのだった。

「こうなれば、ここで暴れて美月とかいうやつに怒りを買ってやる……!!」

本来ならば下らないと一笑する遊人だが、陽のキャスターの性格上、それをすべきでないと瞬時に判断し、そして諫めた。

「お待ちを。実はボク、美月の当主と少し縁がありまして——今、彼女の機嫌を損ねたら次の日になると僕の命が危ういのです。

なのでここは少しの辛抱を。

それに、どうせならば義隆の土地で暴れたくはありませんか？」

「む」

確かに、と唸る。陽のキャスター。

ここで八つ当たりしても、自身がこの世から留まれなくなる可能性がある。それを考慮できていなかった浅はかな自身を悔やみ、遊人に視線を向けた。

「礼を言う。危うく、我が研究が出来なくなってしまうところだった」

「おや、聖杯には頼らないので？」

鼻で笑い飛ばしながら、陽のキャスターが答えた。

「確かに、それが楽だろうよ。」

しかし、私はそんなインチキに頼りたくはない。かの発明家は失敗は成功のもと、と言ったように。魔術も日々、失敗しながらも悩み、そして成功を掴むものなのだよ。

私は——生前の失敗を活かす。全力で、全霊で」

成程、と頷いて遊人は背を向けて、陽のアサシンへと再度、命令を下した。

「じゃ、ま。存分に暴れちゃつてよアサシン。」

で、アニキにも一つ伝言お願い。

『借りは返したよ』、つてき」

「? ああ、言つとくよ」

そうして、陽のアサシンは切翔のいる江松小へと駆けるのだった——。

「つてワケさ。全く、すごいことするよ彼は。」

「一步違えばヨシタカによる制裁は免れなかっただろうしね」

「あのバカ弟……自分の、身を考えろ、なにが『借りは返した』……だ……」

「ふらついた足取りで力なく立ち上がる切翔。」

「そして、懐から緑の丸薬を取り出した。」

「陽のアサシンが、その丸薬を訊ねた。」

「それは？」

「……義隆が作った……丸薬だ。」

「飲めば死ぬレベルの激痛が走るが、体の悉くを再生させるシロモノだよ」

「それを、躊躇なく飲み込む。」

「ごくくり、と丸薬を飲み込んだ瞬間、切翔の身体中に痛みが走る。」

「ア————ッ、ア」

「諭えるのならば、身体の内側からナイフで全身を裂かれる感覚。」

「それが、切翔へと襲う。」

「それと同時に、風穴が空いていた腹部が肉と肉で繋ぎ合い、塞がれた。」

「チツ……痛たいな。傷いたすぎる」

（——今、アレは使うべきではないか）

第二の切り札、それを切翔は頭の中で過ぎらせ、理性で使うのを止めた。

本能は使えと叫び吼えるが、理性は早くから切り札をそんなに切るべきではないと、必死に押さえつけた。

「……クソが、サーヴァントと魔術師殺しが一人ずつの状況だア？」

ざけんじやなえよ、ホント、クソがよ」

それは、眼前で冷や汗を垂らす狼ルプスを見ての、理性の勝利であった。

「——否、二人の魔術師、さ。ルプスくん？」

そうして、役者がもう一人、不敵な笑みを浮かべながら来訪した。

黒いハット帽を被せた、有名だった親戚を模倣したかのような姿の男。

コンラート・アグリッパが、その場へと現れた。

「おせえんだよアグリッパ、何してやがった？」

「なに、準備も兼ねて少しポップコーンを片手に観戦させてもらってたのさ。

ワタシの魔術はしってるだろう？」

再度、ルプスが舌打ちを鳴らす。

切翔は、即座に『陽』のアサシンへと、

「アサシン、セイバーの援護へ向かってくれ。

——おそろく二対一だ。

俺の代えは効くが、サーヴアントなんて歩く戦闘機の代えはない。

それに」

見下すように二人の魔術師に不敵な笑みを見せながら、切翔は言葉を続けた。

「——こんな奴ら、殺せる。」

さっきの情けない話だが、油断をしてしまっていただけさ」

「——ア？」

ルプスは思わず、切翔に激しい殺意を向け、

「へえ？　言うねえキミ。道化みたいだよ」

アグリツパもまた、嘲笑を浮かべるのだった。

「……そうか。なら、任せるぞセツカ」

陽のアサシンは、切翔は言葉を信じて、窓から飛び立った。

——沈黙が訪れ、二人は一人を、一人は二人を睨む。

お互いが殺意を感じたその瞬間——切翔は目を閉じた。

『仮に、起源弾が通用しなかった場合はその眼に頼るしかあるまい。

お前の特異……異能にも程があるソレを』

義隆に言われて、昔のことを思い出しながら切翔は思考を逡巡させる。否、この眼はまだやめようと。

本当に手が負えない、その際に使用しよう。

そう決めた切翔は——前へと駆け出し、マシンガンを連射させる。

狙いがよく定まっていないう鋼鉄の雨が降り注ぎ、血の水溜まりを作られようとする。

しかし、ルプスにとってはその雨は些細なモノだった。

アグリッパの眼前へと立ち、驚異と感じられる弾丸のみを弾く。

そのルプスの行動に切翔は笑みを浮かべた。

「ありがとう——アーベル・ルプス!!」

弾丸がひとつ、消化器へと被弾する。

その瞬間、アグリッパとルプスはしまったと悔やむ。

しかし——それはもう遅い。

消化器は破裂し、中から白い煙が漏れ始める。

同時に、

「——cut<sup>火</sup>!!」

切翔の手によって放たれる小さな、小さな炎。

しかしそれはスプリンクラーに感知され、ジリリリリと大きな警告音を響かせなが

ら、水を出す。

「——なるほど、ルプスくんの探知能力を潰しに来たか!!」

それらさえ潰しちやえば後は——」

「——repeat!!」

アグリツパが詠唱すると、その瞬間に自身の周りを包みなが、業火が現れる。

アグリツパは狙いを自分だと予測し、守りの炎の壁を展開させた。

ルプスはその中に入らなかつた、ルプス自身がそれを拒否したのだ。

そして、そうするだろうと考えた切翔はトンプソン・コンデンターを取り出す。

そして、放つは魔弾、起源弾と思わせての通常の弾丸だった。

ルプスに狙いを定めて、弾丸を放つ。

「このっ——!!」

——こうして、手間を取ってもなおルプスの耳は、全て聞こえていた。

弾丸が誰に飛んでくるのかすらも、聞き分けられていたのだった。

そしてルプスはそのようなものは通じないとばかりに、弾丸を己が肉体で盾となり、弾丸を弾こうとする。

「……今だな……っ!!」

そうして、切翔は——その瞳の色を綺麗な紅色にて変貌させる。



視界が奪われているため、ルプスは気付かなかった。  
しかし、

——ヒュン。

風を切る音だけは聞こえていた。

刹那、ルプスの胸部に深い切込みが入った。

鋭い痛みと共にルプスは身をたじろがせ、そして弾丸がその切れ込みの中へと侵入する。

「ガ——ガアアアアアアアアアアアア!!」

「な、なんだ!？」

ルプスくん、一体何が……!!」

ルプスの咆哮に、アグリッパが動転し、訊ねるも返答はない。

傷口にデスソースを流されたようなもの、そんな激痛を喰らえば、返答など出来ないし、まず気付かないだろう。

『——呵々、よもやお前が生まれついての魔眼持ちだとはな？』

……発現するまでには遅かったがよからう。

『切断の魔眼』、自身の起源を関する名の魔眼を持つこととなるとは、面白い運命を有したな切翔よ』

笑う老人の顔が切翔の脳裏に再度、過ぎる。

「……黙れ、爺め」

ソレを、殴るように切翔が眩き、前方へと歩む。

コツコツと、足音を鳴らしながら。

「グ、ツウ……クソ、クソクソクソクソ!!」

霧島のゴミがア……ッ!!」

ルプスはその方向へ睨みを飛ばす。

先程よりかは威勢の弱い、恨み痛みの眼だった。

「——あまり吼えるなよアーベル・ルプス……弱者へと転落したいか?」

切翔が歩み寄る。

しかし、

「そっら!!」

それを阻害する、アグリツパ。

魔力で生成した呪いの玉を切翔へと打ち込んだ。

『ガンド』と呼ばれるソレはアグリツパの直感ではあったが切翔のいる場所へ見事、向かって飛んだ。

切翔は後方へ退き、ガンドを回避する。

それと同時に、

「????????」  
ルプスが吠える。

仲間を呼ぶように、狼の遠吠えを放った。

それと同時に、階段から獣の足音が聞こえる。

切翔が後ろを向くと、

「u——GRRRRRR」

極上の肉を前に涎を垂らす犬が十数匹とた現れた。

血走った目で切断を睨む、その犬たちを見て切翔は愚痴を零した。

「面倒な手間を取らせてくれる全く……!」

眼を発動させる。

瞬間まるで豆腐を切るかのように、犬たちの首が切断されていく。

そんな中——ルプスは切翔へ向かって突進していた。

（——奴に踊らされたが、よくよく考えりゃ身体能力はこっちの方が上……なら!!）

「……殺される、か?」

瞬間、切翔はルプスへと振り返っていた。

ルプスは大きく目を見張り——首筋へ向かわれていたナイフを回避するべく再度、

後ろへ跳んだ。

「残念だったな。」

俺の魔術は少し変わっててな。

段々と、効力が翔けてくるんだよ。これは祖父が以前言っていた、俺の起源に由来するとの事だ」

「……マズイねえ」

眩きながら、アグリツパが左手を輝かさせる。

それは、令呪を使用するのだと気付いたルプスが、吼えた。

「おい、今使ったら……!!」

「今、使わなければだよ。ルプスくん？」

セイバーが戻ってくるかもしれないが幸い——こちらは既に応援を呼んである。

あと数分もしないうちに来るだろうよ。

……ミヤビと、バエルがね？

その間、我々は時間を稼げばいいのさ」

「……！　へえ、そりゃいい」

ルプスが納得し、笑みを浮かべる。

それは、アグリツパのハツタリだと理解していたからだ。

しかし、切翔にははったりだと分からない。

切翔の中では、撤退という本能による絶対命令が行われていた。

（応援が来るだと？）

クソ、こちらの応援が望めない以上、こうなったら早く逃げたいところだが……セイバー達はどうかっている？）

ふと、切翔がグラウンドの方へ向くとそこには、腹部を貫かれた“陽”のセイバーと、“陰”のセイバーに圧されている“陽”のアサシンの姿が映っていた——。

## 聖騎士の影を追い 《陽》

遡ること数分前。

「陽」のセイバーは「陰」のセイバーに対して、一方的な剣戟を行っていた。否、剣戟とも言えない。一方的な虐げを行っていたのだった。

「ぐむう……っ、見事!!」

苦しそうに、しかし相手の賞賛を忘れずに「陰」のセイバーが半歩跳ぶ。

好機とみた「陽」のセイバーは古びた剣の切先を「陰」のセイバーの首元へと振るう。

しかし、

「掛かりましたな「陽」のセイバー殿!!」

——くらえ、ロケットパンチ!!」

銀色の義手が、接続部分から火を噴き、飛ぶ。

ソレは「陽」のセイバーの胸部へと直撃し、「陽」のセイバーは数メートル程飛ばされた。

「ぐっ……!!?」

い、今のは……?」

「驚きましたか『陽』のセイバー殿、これが我が主が施して下さった概念武装なのですよ!!」

しかし、素晴らしい……サーヴァントにも通ずるなど、我が主は本当に素晴らしい!!

このような卑劣者である我輩、ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンには勿体のない――

――あ

「……………愚か!!」

勝手に驚く『陰』のセイバーに容赦なく襲いかかる『陽』のセイバー。

それは呆気なかった。

義手には視認出来ないほどに細い糸が無数に仕込まれており、自動で付くシステムだったが、それよりも早く『陽』のセイバーが『陰』のセイバーの懐まで踏み込み、片手に持っていた剣を弾き飛ばした。

「うおお……………っ!？」

いやまあ、我輩、うすうす気付いてはおりましたがこれはさすがに速すぎませぬか!？」

「獲った――!!」

首を断つべく、刃が走る。

ところが、

『……?、なんということだ』

忌々しい記憶が、せつかくの勇氣と覺悟を踏み砕いた。

それは、最悪のタイミングだった。

「……厭……!」

苦しうに眩き、劍をピタリと止める。

拒絶は、人を殺めることにだった。

はて、と首を傾げた『陰』のセイバーだったが直ぐに切り替え、戻ってきた義手を再

度飛ばし、『陽』のセイバーへとぶつけた。

再度、少女は飛ばされ、そのついでに髭の騎士は空から落ちてくる劍を掴み取る。

少女は呆然と眺める。ああ、自分は失敗したのかと、僅かな無念が胸中を渦巻いた。

そして――

「何があつたかは知りませぬが――『陽』のセイバーの首とつたりいいいいいい!!!」

騎士が声を張り上げ、少女の首へと劍を奔らせる。

少女は抵抗しなかった。

こうなつてしまえば結果は変わらない、そう諦観したからだ。

劍が迫る、迫る、迫る。

少女は目を伏せ、二度目の死という名の劍を――



「諦めるのが早くないか？

全く、それでも英霊かお前は……!!」

呆れた口調で、髑髏の暗殺者がその手にある短剣で騎士の剣を受け弾いた。

「……アサ、シン？」

「何呆けている。キミの使命は戦うことだろう？

それを放棄してはいけない。

「……放棄してしまえば、キミの援護に行けと言った切翔の覚悟が無駄になるだろうに」

ナイフを構え、騎士へと敵意を向けながらも暗殺者は少女を奮い立たす。

諦めるなど、その瞳が強く訴えていた。

「——私、元々戦うのが、殺めるのが苦手……」

「知らないよ。厳しいかもしれないけど、戦う気がないなら聖杯戦争を拒めば良かったんだ。

それを拒まなかったキミの自業自得だ」

冷たく言い放つ「陽」のアサシン。

視線は眼前の騎士へと。

彼は「陽」のセイバーへ見向きもせず——

「ッ——！！」

戦闘を開始させた。

両踵に力を入れ、目の前の騎士へと走る。

騎士は当然と言わんばかりに腕を突き出し、

「ロケット——」

「させるわけないだろ……！」

放たれた黒曜の短剣を、急いで振り払った。

それで僅かな隙が生まれた。《陰》のセイバーは不覚を悟ったが、遅かった。

漆黒の髑髏は影と同化し、夜空を舞う。

その膝を、騎士の顔面へと当て、鈍痛を味あわせる。

「ぐおお……」

よろよろと、二、三步後退する騎士に、死を告げるべく暗殺者は再度踏み込む。

次こそ獲った。

そんな、《陽》のアサシンの確信を嘲笑うかのように眼前に槍が突出された。

「……なっ、危なっ!!」

ナイフを穂先にあてがい、器用に受け流してその槍の一撃を回避する暗殺者。

暗殺者は、斜め前方を睨むと、そこには——《陰》のセイバーと似たような甲冑の、

しかし、〃陰〃のセイバーとは遥かに格が違う。

それを確信させられるような圧倒的な絶望きょうぼうと相対した。

「……彼を殺させん。」

数少ない騎士の同胞だ」

「……ハッ、比較対象の間違いだろう？」

かげのランサー槍の騎士の言葉に、髑髏の暗殺者は仮面の裏に冷や汗を滲ませながらも軽口を叩く。

ちらりと、〃陽〃のセイバーの姿を確認する。

一瞬、彼女から魔力が感知された直後、彼女は敵を睨み、殺意を向けた。

——それが魔術による暗示、日本で言うところの呪術だと悟った。〃陽〃のアサシン

は僅かに少女に同情した。

「……可哀想に、それでもしなければ戦えないとは」

しかし、止める余裕は無かった。

〃陽〃のアサシンにとっては戦力が蟻のような存在でも欲しかったのだ。

それがたまたま、〃陽〃のセイバーという大砲並の戦力が整っただけでも、〃陽〃のア

サシンの内心では計り知れない安堵があった。

「セイバー、お前はランサーと思わしきサーヴァントと戦ってくれ。」

俺は、あの髭を殺す」

「わかりました。あの、槍を持った人形を斃せばいいのですね」

少女が古びた剣を構える。

ソレに水がとぐるを巻くように纏う。

「——やめておけ少女よ。私は、貴女のような可憐な女子を傷つける趣味はない」  
「ならば、死ぬ。死ぬがいい」  
「陰」のランサー。

我が願いの為の礎となれ」

「……願い、か。人を殺める恐怖心に打ち勝つにはそれに縋るしかないということか。

なあ、闘争を恐れる少女よ。

君の願いはなんだ？」

「陰」のランサーの問いに少し沈黙した後、

「決まっている」

強く、柄を握り締めながら「陽」のセイバーは「陰」のランサーを睨んだ。

「次こそ、私はただの少女として生を受ける為だ——!!」

そう、他の英霊ならば一笑するであろう、淡い願いを口にした。

そうして、「陽」のセイバーは「陰」のランサーに切り掛る。

「陰」のランサーはその斬撃を防ごうと槍を盾にするべく腕をあげようとするその

瞬間、

とぐろを巻いていた水が槍の騎士の腕に絡み、その見た目の何十倍もある重さに、  
 “のランサーは気を取られてしまった。”

劍が振り下ろされる。それは古びているというのに容易く、  
 “陰”のランサーの腕を斬り、そこから血を吹き出させた。

「むっ……………!!」

「ランサー殿!! —— オットットオ!!」

味方を案じる陰のセイバーに容赦なく短剣を投擲する、  
 “陽”のアサシン。

“陰”のセイバーはバランスを崩しながらもそれを回避する。

回避された、  
 “陽”のアサシンはならばと更に深く踏み込み、  
 “陰”のセイバーへと接近し、その喉元に直接短剣を刺そうと腕を伸ばす。

「おっおおおおおおおお……………!!」

思わず雄叫びを上げる、  
 “陰”のセイバーだったが——その義手の指先から細い光線のような魔力の塊が飛び出し、  
 “陽”のアサシンの肩を貫く。

それは、ルプスが最後に取っておいいた自動防御システム<sup>オートディフェンス</sup>。

隙だらけにも程がある最弱の剣士の為に用意した、奥の手の中の奥の手だった。

「チィっ……………厄介だなあの腕は!!」

先にあれを潰す。

そう決意した《陽》のアサシンだったがそれは遅かった。

義手の指先から、魔力による光線が再度、何度も何度も放たれ始めた。

「むっ、う、おおおおおおお?!?!」

なんですぞこれは、なんですぞおおお!!」

その光線の眩しさに目を瞑りながら、《陰》のセイバーはその暴走に戸惑う。

「……不利だと言うのに、何故か君のおかげでまだまだ余裕があるように感じてしまふよ。

——いやまあ、余裕といえれば余裕、なんだがね?」

《陰》のセイバーに半ば呆れながらも微笑みを向け、《陰》のランサーは傷に視線を向ける。

それは別に、致命打ではないと理解した《陰》のランサーはすぐに槍を構え直し、《陽》のセイバーに矛先を向ける。

「その剣、面白いね。」

なんか、どこかで聞いたことがある武装だよ。ジパングの、神話の中でね?」

「そうですか。お気になさらずに、おそらく間違っていますので」

《陽》のセイバーが機械的に答える。

それと同時に——《陰》のランサーが《陽》のセイバーの懐へと潜り込む。

「陽」のセイバーは再度、水による阻害をするが「陰」のランサーに二度目は通じなかつた。

水は彼の筋力によつて半ば無理やりにいつも通りに槍を振るゐ、……………「陽」のセイバーの腹部を貫いた。

「がっ、つう……………!?!」

「残念だったな少女よ。君が水で阻害するならば、それを予想して力を出すまでだ。

——基本、槍は力で振るうことはないのだ、私はね？」

後ろへよろめく「陽」のセイバー。

負傷した腹部へと手を当てて、「陰」のランサーを睨むのだった——。

## 短話・不死者の影を追い

“陽”のセイバーが“陰”のセイバーと戦闘をしているその最中。

霧島邸では二体のサーヴアントが控えていた。

義隆の貼った結界に、侵入者の反応があったからである。

その二体は、性格が真反対で、仲も良くない。“陽”のアーチャーと、“陽”のランサー。

片方のランサーはまだかまだかと、敵の来訪を心待ちに。

もう片方の“陽”のアーチャーはつまらなさそうに、ただ弓矢を手を持っているだけだった。

派手な装飾を施されている弓矢を凝視し、“陽”のランサーは感嘆の声を零す。

「いい弓矢だな。」

これは、素晴らしい……鹿苑寺を想起させるかのようだ」

「えーと……キンカクジ？　だっけ？」

やだな、一つの芸術的な建物と一つの野蛮な武器を一緒にするなよー」

茶化しながら言う“陽”のアーチャーだったが、“陽”のランサーは真剣な表情で



否、と首を横に振った。

「一緒に見えてしまう程、その弓矢は美しいのだ」

「……あそ？　あ、オイ敵さんが来たよ？」

早く殺してやろうぜ、僕はもう疲れたんだ。

なんかさー、うちのマスターがめんどくさいんだよねえ。

あーいうの、メンヘラっていうのかな？」

自身の主の軽口をたたきながら、陽気な男が指をさす。

そこには、法衣を身にまとった骸骨のような男がいた。

『陽』のアサシンのような髑髏の仮面ではない。

肉が腐り、骨が見えてしまっている。

だから、骸骨のような男。

その、明らかな異常を前に『陽』のランサーは首を傾げた。

「……あのような英霊、見聞したことがない」

「キモいよねアレ。」

イケメンかブサイクかで判別できない。

キモイの類ってボク初めてみたかな？

あー、あの韋駄天クソ野郎もキモかったなあ」

忘れてた忘れてた、と眩きながら笑う。『陽』のアーチャー。

そんな彼をよそに、『陽』のランサーはじつくりと骸骨を眺める。

キヨロキヨロと動き回っており、どうやら何かを探しているようだった。

それならばと、『陽』のランサーはゆっくりと骸骨に歩み寄り、大声で警告をした。

「何者だ、名を名乗れ。名乗らぬのであれば敵意があるとみなして貴様の首を頂戴する。

かの魔王のような趣味はないが、貴様のような存在は貴重だ。丁重に飾らせてもらう」

「……名など名乗れるはずもないだろう、我は今、探し物をしている、それどころでは無い!!」

慈悲を、骸骨はどうでもよさげに断った。

それが、『陽』のランサーにとっては、死にに來たと受け取ったとは気付かずに。

——武者が駆ける。

閃光の如き速さで、その穂先を煌めかせながら流れ星のように骸骨の眼前まで迫る——

「ヒ、ヒツ……………!!?」

骸骨は己のいい加減さを呪ったが遅かった。

『陽』のランサーの穂先に触れ——骸骨はその身を分断された。

ただ穂先が触れただけ、だと言うのに恐ろしい鋭さを誇るその槍。

無骨な形をしており、無駄な装飾を施していないあたり彼の生真面目な性格がうかがえた。

「……トンボギリ、だっけ？」

全く怖い槍だよアレ。なんか、魔術とかも穂先にさえ触れれば両断出来そうな魔力を有してるしさ」

『陽』のアーチャーはヘラヘラと笑いながら呟く。

ともあれ、心臓を貫かれ、身体を両断された正体不明の、『陽』のアーチャー、ランサー共々キャスターのクラスと仮定されたサーヴァントはそのまま魔力の塊となり――

「なんだ貴様……いきなり我が身体を分断するとは生意気な!!」

しかし……残念だったなあ、私はそれぐらいでは死なないのだよ!!」  
ならなかった。

あろうことか骸骨は両断された身体が接合され、嬉々として『陽』のランサーに話しかけた。

思わず、『陽』のランサーは目を見張り敵を凝視する。

「ハハハハハハハハハハ!!!」

さあて、我が大魔術を披露してや——」

言いかけた骸骨の首を、腰に差していた刀で両断する。

「陽」のアーチャーはそんな彼を心底から得体の知れない恐怖を感じた、感じてしまった。

「……嘘だろ？ 普通、動揺して動くのラグるぜ？」

どんなメンタルしてるのさ日本のブシは……!?!」

そんな驚きを隠さない「陽」のアーチャーをよそに、「陽」のランサーは淡々と、骸骨に声を掛けた。

「ならば簡単だ。死ぬまで貴様のことを殺すだけだ、術者。

……それが千にも及ぶ回数だろうと殺してやろう」

「陽」のランサーがそう言い、手も足も出ずに骸骨——「陰」のキャスターは殺害されていった。

まずは首を捻じ切られ、

短刀で心臓を細切れにされ、

刀で身体を両断され、

足蹴で首を蹴鞠のように飛ばされ、

全身を粉々になるまで槍で貫かれる。

しかし、それでも「陰」のキャスターは蘇る。否、身体が再生する。やがてその瞳には、「陽」のランサーを映していた。

——探す、どころじやない。逃げなければ。逃げなければ、死よりも恐ろしい苦痛を味合わされ続けることとなる。

背を向け、「陰」のキャスターが走り出す。

が、その背後から弓矢が刺さった。

「陽」のアーチャーが面白半分で放ったモノだった。

——ザツ、と草を踏む音が近づいてくる。

それは、拷問官など生温いモノだと教えこまされるような、凍てついた殺意を放っていた。

「ヒ……ヒイイイ、許してくれ、許してくれえ……もう、もうここには立ち寄らない、立ち寄らないからどうか、どうか許してくれえ……」

その殺意を前に、「陰」のキャスターは涙を浮かべながら許しを乞う。

悪戯を折檻された子供のように泣きじやくりながら許しを乞う骸骨に、「陽」のラン

サーは、

「良かろう。さあ、立ち去るが良い。」

……済まなんだ、本当は一瞬で仕留めたかったが本当に死なぬとは思ってな。

……昔、血を吸う鬼と対峙したことがあった。秘密裏の事だった。

その時の殺し方を真似したのだが……そなたに恐怖を植え付ける、不毛な虐げとなつた」

頭を深々と下げ、こちらこそ済まなかつたと謝罪した。

その動作に「陽」のアーチャーも驚いたが、彼の主である忠吉もまた、十分に驚いていた。

しかし、そんな反応は彼の前では些細な事だった。

「陰」のキャスターは辺りを脅えながら退散し、「陽」のランサーはその姿を見送るのだった。

## 小鬼の影を追え 《陰陽》

「陰」のランサーに腹部を貫かれていた様子を見た切翔は僅かに動揺し、目を見開く。

幸い、火災探知機が反応し、警告音が鳴り響いていて、消化器の煙に包まれている目の前の二人の敵には勘づかれてはいない。

このまま撤退は可能か、切翔が思考する。

(……増援が来るまでに逃げなければならぬ)

しかし、負傷中のサーヴァントが二騎か。

逃がしてくれる敵ならば、苦勞はしなかったが)

切翔が銃を構える。

サーヴァントを殺すのは不可能。ならばマスターを先に殺すと切翔は判断したのだ。

殺せるかは不明だが、やるしかない。

切翔の中に死への覚悟が――

「よおせつかー!!」

なんか、楽しそうだからたすけにきたぜー!!

かしいつこなあ——

!!!」

死への覚悟が出来た時に、その男は現れた。

犬歯が特徴的な、間抜けで、基本は使えないが底抜けに明るい、たまにいいところを見せる青年。

霧島 彪斗が、戦場と化した学び舎に現れ、戦局を混沌と誘うのであった——。

少し前、東江松駅と少し離れたところにある市営住宅のブラリー江松。

その敷地の公園内で、彪斗はブランコを漕いでいた。

彪斗はこれといってやる事がなかった。

祖父に余計な事をするなど命じられ、余計な事が分からなかったからだ。

それなら、何もせずにこうして遊んでいる方がいいのだろうと、彪斗は思いつき、陽のバーサーカーと共にブランコに熱中となっていた。

「……暇だなあ」



「……………暇であるな、彪坊よ」

いつの間にか、親しみのあるあだ名をつけていた『陽』のバーサーカーがブランコから飛び降り、彪斗に提案する。

「ここから江松小は近かったであろう？」

なら、我らも行くか？　　ここで燻ついても無駄であろう」

「うーん…………でもなあ、じつちやんが怒るかもしれないんだよなあ」

彪斗の不安に、『陽』のバーサーカーが疑念の視線を向ける。

「いやさ、オレ昔つからやること全部じつちやんとかーちやんとかに怒られるんだよなあ…………何か良い賞とつても『目立ちすぎだ阿呆が』とか、逆に変な事したら『一族の恥だ』って殴られたりさ…………どうしたらいいんだろうなあ」

「……………ほう？」

『陽』のバーサーカーに、僅かな怒りの炎が瞳に籠もる。

この青年は阿呆などでは無い。

ただ、全てを否定され、正解がわからなくなってしまうのだと、『陽』のバーサーカーは悟つたのだ。

なるほど、これは確かに一族を脅かすと恐れられるほどの鬼才を無力化するための育て方だろう。自信を喪失させてしまえば後は楽であるからだ。

「……しかしなあ」

しかし、巨人は納得がいかず、怒りを抱くのである。

「……うむ、腹が立った。彪坊!!」

「なにー?」

「陽」のバーサーカーの威勢のいい呼び掛けに、ブランコをピタリと止め、気の抜けた返事をする彪斗。

「陽」のバーサーカーは自信ありげな笑みを浮かべ、彪斗を抱えた。

「行くぞお!!」 ……安心しろ、ケツは戦が持とう!!」

「え、ちよ、どわあああああああ?!?!」

彪斗を抱え、「陽」のバーサーカーは勢いよく江松小まで向かい飛び立つのだった。

「——つて訳よオ!!」

よし、そんなじゃ早速、せつかの味方になるぜ!!

あ、バーサーカーはあつちの方行つてー」

「うむ、任された」

「……彪斗、お前も行け」

切翔の指示に、彪斗はなぜ、と首を傾げる。

「すまないが、お前は足手まといだ。

バーサーカーに守ってもらえ。

すまんが、オレでは庇いきれない」

「あ、なるほど！

じゃあ、行こーかな！」

〃陽〃のバーサーカーに担がれながら、彪斗は運動場へと向かうのだった。

「……ほう、我々は一人で十分、ねえ？」

「ああ、言った」

切翔の言葉に、アグリツパは嗤う。

切翔のその背後に、黒い影があったからだ。

嘘だったが、恐らく雅が来たのだ、そうアグリツパは確信して、気付いていない哀れな羽虫に嗤うのだった。

しかし、

「コンシャート!!」

レクスが吠える。

そう、気付いていないのはアグリツパだった。

彼の背後にもまた、迫る殺意があったのだ。

「なっ、……」

呆然とするアグリツパを、他所に、その人影は無邪気な子供のように武器を振り下ろすのだった――。



しかし、そんな隙を見逃すほど、切翔は甘くは無かった。

アグリツパが棒立ちなのを視認すると、すぐさまマシンガンの銃口をアグリツパに向け、乱射する。

だが、アグリツパが隙だらけなのを悟ったのは切翔だけでは無い。

レクスが、彼の眼前へと立ち、その鋼のような肉体で切翔の射撃を防いだ。

「オイ、ボサつとすんじゃねえよアグリツパ!!」

敵は前にもいんだぞ!!」

「……ああ、すまないね。しかし、ワタシは決めた」

アグリツパは切翔へと視線を向け、笑みを浮かべると、

「済まないが撤退させてもらう!!」

……なにか、得体の知れない第三勢力まで加勢し始めたみたいだからねえ。

キミも撤退を始めた方がいいよ!!」

高らかに宣言し、切翔から凄まじい速さで離れ始めた。

レクスは悟っていたのか、溜息を吐きながらアグリツパの後を追う。

……そうして、その場には切翔一人のみとなった。

切翔が外へ視線を向けると、槍を持った男と、義手の男の姿は消えていたため、本当に撤退したのかと切翔はアグリツパに呆れた。

「二人、消せそうだったというのになんて余裕だ？」

そんな独り言を呟きながら、切翔は『陽』のセイバーの状態を確認する。

腹部に空いていた風穴は塞がり始めていたのを確認し、安堵すると同時に不甲斐なさに溜息を再び吐いた。

「……なんとかか、か。クソ、初日からこんなにも乱戦になるとはな。明日以降はなんとかでも誰かと、常に行動をとるべきか」

義隆に直談判しようと、固く決めて切翔は『陽』のセイバーの元へと向かうのだった。

その足取りは先程の謎の人影に警戒し、慎重なものだったため、『陽』のセイバーと合流する頃には彼女の傷はもう塞がっていた。

——こうして、一日目の聖杯大戦は終了した。

## 二日目 光と影

### 少年と聖人

——煉瓦造りの道の上を、彼女に手を引かれながら歩く。

力が強いから、ちよつと痛いけど、構わない。

その、夜のような綺麗な黒髪が、海のような青い瞳が。

そして、聖母のような優しき心、全てに僕の心が奪われた。

彼女の手の温もりだけで、全て帳消しに出来るというものだ。

『そつういえば、先に貴方の名前を聞いておかないと!!』

そつう言い、僕に振り返る。

女性は、自身の名を明かしてから、僕の名を訊ねた。

『私はマルタ、ただの、マルタよ。』

貴方の名前は?』

『え……と、僕の、名前は……』

呆氣に取られて、しどろもどろと、他所から見れば怪しい挙動で僕は名前を明かした。

『僕は……???つて、いいます』



何の変哲もない、ありきたりな名前。  
だというのに、この人は笑いながら、

「???……素敵な名前ね!!」

そう、言うのだった。

……多分、もつと前のこととは思うけれども。

僕は、この女性に惚れてしまっている。

それは、彼女に声を掛けられたときからか、それとも、たまたま彼女の横をすれ違つた時なのかは分からない。

だけれど、こんな、甘くて、蕩けてしまいそうなくらい幸せな時間を、悠久の如く続いて欲しいと願っているというのは事実だ。

『失礼します』

『おや、マルタか。ん、そこの子供は?』

——しかし、その時間は突如として終わりを迎える。

かの方との出会いで、紙が破かれるかのような容易さで。

マルタさんはその男と顔を合わせると、僅かに頬が紅潮しており、顔を俯かせた。恐らく、この人に惚れてしまっているのだろう。

……なんでか、そんなことを悟った途端、僕は目の前の男の事が憎くて、怪しく見え

て仕方なかった。

彼は彼女のことを騙しているのでは、と。

絶対にコイツの嘘を暴いて、マルタさんを助けなければ、と僕は胸に誓い、そして彼女の前に立って、その男に名乗った。

『初めまして、僕は??と申します』

出来るだけ、作り笑顔を巧く見せながら。

僕は、男に手を伸ばした。

男が、嬉しそうに笑みを浮かべながら、僕の手を握り返す。

……なんて弱々しい手だろう、と不意に思ってしまった。こんなに弱々しいと、思わず握りつぶせるのでは、の錯覚してしまう。

僕の、そんな屑のような感情を見抜いてないのか、男は微笑み、名乗り返した。

『初めまして、私は——』

そのビッグネームに、僕は思わずやっぱりだと、浅はかな勘違いをしてしまったのだった。

彼は騙してなどなかった、正真正銘、自身の人柄で人々から支持を得るようになったのだと。

……それを死ぬ直前に悟るなんて、なんて、愚かなのだろうか。

その日、僕は恋と、嫉妬を知るのだった——

## 少年と少女

床西町、西和高校にて。

二年B組の教室内で霧島 遊人は、椅子に座り、携帯の画面を開いていた。

調べているのは、路地裏で起こった焼死遺体のことだった。

昨日、陽のアヴェンジャーが行った事だと遊人は早くも察知して、念の為に情報を収集していたのだ。

こと魔術の世界では、魔術を目撃した一般人は殺さなければいけない。

万が一、目撃情報があればすぐに始末するつもりであった。

「……おい、霧島」

その最中に、遊人を警戒しながら声をかける男子がいた。

遊人は、クラス内でも浮いた存在であり、嫌煙されていた。

理由は、遊人自身も分かっていないが、単に竹流が遊人の人物像を出鱈目に吹聴していたからだだった。

遊人が、訊ね返すと男子生徒は答える。

「なに？」

「隣の……美月さんが呼んでる。」

早く行けよ」

そう言い、男子生徒がそそくさと離れる。

その途中、足を止めて男子生徒は訊ねた。

「……付き合ってるの？」

「えーそんなワケない。」

僕、あの子タイプじゃないし？　　女子はさ、もうちよつと大人しい子の方がいい

よね」

そんなことを言いながら、遊人は重い腰を上げて、教室を出る。

すると、出てすぐ横に呼び出した女子がいた。

腰まで伸びている、黒絹のように綺麗な髪を靡かせればたちまち注目の的となり。

顔を見れば殆どの男子の心を虜にしてしまう、美しく整った顔立ちをした、美月　夜

空がいたのだった。

「——着いてきなさい、霧島君。」

貴方には、祖父の代わりに色々と詰問させていただきませんが、異論はないわね？」

その鋭い目付きは毒針を向けているかの如く。

否定をすれば命はない、と告げていた。

そんな、傍から見れば激怒しているのは明らかかな状況下でも、遊人は態度を崩さずに「いいよー。面倒だしチャチャツと終わらせよつかあ」

そう、言うのだった。

夜空は、遊人を誰もいない、近寄らない視聴覚室へと向かうのだった――。

「さて、と。」

ねえ、霧島君、昨日のアレは私に喧嘩でも売ってるのかしら？

今なら、買ってあげてもいいのだけれど」

古びたパイプ椅子に腰を下ろし、夜空が言う。

彼女の話とは、昨晚に遊人が陽のキャスターを連れて自身の土地へと踏み入った事だった。

霧島家は、美月とは不戦の契りを交わしている。

遊人がそれを知らないはずはないのを、夜空はしっかりと理解している。そのため、

遊人の行為は挑発と受け取っていたのだった。

「喧嘩じゃない。人と会話するなら先ずは話題作りが重要じゃん？」

「……あのね、だからってなんでわざわざこんなことをするわけ？」

「こうまでしないと、あの爺が盗聴する可能性があったからだよ」

なるほどね、と夜空は頷いて遊人を睨んだ。

「で、話って何かしら？」

先に言っとくけど、くだらない事なら貴方のことを今、ここで殺してもいいわよ」

「んー、まあ、単にさ——」

その、遊人の頼み事に激怒し、しかし最後には呆れて呑み込むのだった。

「……とんだ災難だ」

一方、霧島邸では。

義隆に長時間説教を受けた切翔が、苛立ちを隠さないまま、自身の部屋へと戻ってきた。昨日の自身のサーヴァントの不

彼が苛立っている原因、それは義隆の説教もあるが、昨日の自身のサーヴァントの不

甲斐なさに対しての苛立ちも含まれていた。

あの戦闘の後、陽のアサシンに「あのセイバーは殺生に恐れている」、そう教えられた。

「……殺しに怯えているだと？」

巫山戯るな、殺しに怯えてるってんならそもそも呼ばれて来るなどという話だ……!!」

乱暴に自身の武器を投げ、頭を抱える。

この聖杯大戦は、自身の生存に大きく関わる。

切翔とて、一人の人間だ。故に、生への執着はある。

そして、陽のセイバーは不安を掻き立てる材料に他ならなかったのだ。

「……申し訳、ありませんマスター。」

一応、暗示で相手を人形と認識して斬るなどのことは可能、ですが……」

切翔の様子に、罪悪感を感じた陽のセイバーが謝罪するが、それはむしろ逆効果だった。

「謝るから、なんだ。殺せるのか？」

殺せないなら謝るな、耳障りだ」

冷たく言い放ち、切翔は自身のベッドへと身を投げる。

「……少し仮眠をとる。」



さすがに疲労を取らないと次の戦いに支障をきたすからな」  
事務的に伝えると、切翔は目を閉じ、意識を深くへと沈めるのだった。

## 少女と夢

『ああ、なんとということだ』

鎮座する男が、運ばれた亡骸を見て嘆く。

その者は、正式な後継者となるはずだった。

しかし、ある日自身の妹に欲情し、犯そうとした際に抵抗され、その少女の異常すぎる膂力を持って、首を振じ切られた。

その亡骸の前に座らされた少女は、ただただ呆然としていた。

男は娘である少女を睨み、静かに怒りの言霊を放った。

『貴様が抵抗なんぞしたからだ。どうしてくれる、どう、この贖いをしてくれる？』

抵抗なぞせずに、いつその事こやつに女にされれば良かっただろうに』

——その言葉に、少女の意志自由など存在しえなかった。

『で、ですが……刃物を持ち出したので、わた、わたしも抵抗しなくては殺されてしまう、と……』

『だから、殺されてしまえばよかったと言ったのだ。

子種を受け入れる役目が女の務めだというのに、それを拒絶した貴様には価値がな

い。

……ああ、なるほどであるから、こやつは刃物を持ち出したのか。

流星は、後継者の器だったものだ』

男は冷酷に、少女——『陰』のセイバーの価値観が正しくないと断じた。

本来ならば、彼女の意見が正しいだろう。

しかし、この場においては彼女の父親が正しくなってしまうのであった。

まさに暗君、暴力暴言を身に纏い、手にある権威を振りかざす、器を持たざる者。

そんな男を前に、『陰』のセイバーは深く、深く絶望する。

そして、同時に自覚する。

自分は、彼の駒。王である自分という存在を長く持たせる為の、歯車であると。

『命ずる。貴様は、兄の代わりとなり私の言う通りとなれ。』

さもなくば、死あるのみだ』

王の命令を、セイバーは容易に受け入れる。

死への恐怖では無い。

確かに、それも少しは含まれているが……それよりも彼女の中では、諦めという感情

の方が強かった。

もう、どのみち楽しい人生など迎えないだろう。ならば、どうすれば楽に死ぬるか。

それを少女は模索することとしたのだ。

そうして、少女は剣を握った。

死への恐怖に耐えながら、女として生きてきたかったという願いを隠しながら。

——ああ、なんて、もどかしい。

言葉を送りたくても、手を差し伸べたくても出来ない。

何故ならば、これは——

「……夢、か」

切翔が目を覚ます。

先程の夢は、サーヴァントの記憶の断片。

契約した英霊のソレが、夢として現れるという話を切翔は知っていたため、不思議に思うことなく、機械的に受け入れ——

「……吐き気がする」

られ、なかった。

切翔は、その夢を見て少女に深い憐憫を抱いたのだ。

そして、自身の祖父と似た、少女の父親に怒りを、そして少女の根幹を知らないまま、少女に当たった自身に対する殺意が混ざり合い、吐き気を催していた。

「……マスター、大丈夫でしょうか？」

お身体が優れないとか……？」

その姿を見て、『陰』のセイバーが思わず心配をする。

なんでもない、と切翔は即答し、直ぐに銃のメンテナンスを始める。

短い時間の睡眠でも、しっかりと脳を覚醒させられるように訓練されている切翔だったが、時折、夢のことを思い出し、僅かに銃のメンテナンスに手こずってしまうのだった。

## 妻と夫

—— 『陽』の陣営魔術師達が潜んでいるホテル。

その、『陽』のアーチャーとその契約者であるジャック・ユースタスの二人の部屋にて。

ジャックが宝石に魔力を込めている光景を、アーチャーは興味津々に眺めていた。その、あまりにも夢中な視線に、ジャックもついに反応してしまった。

「……なんだ、アーチャー」

「いやね、この宝石が輝きを増すのが美しいなつて思っちゃまってよ……オレも真似しようと思ってたんだよ!!」

んで、この技術で輝かせた宝石を、カミさんと息子にプレゼントしてやるんだ」

『陽』のアーチャーの言葉に、ユースタスは呆れながらも、どこか嬉しそうに苦笑した。

「……貴方に真似をされたら私の立場がないに等しくなるだろう。

戦術等も貴方が上手なのだしね……いやだが、真似できたならばさすがはウィリアム・テル。

我が国が誇り、愛する解放の英雄だと、私も拍手するね」

「ん？ オメエさんスイス生まれかい!？」

「ああ、しつかりとコレもある」

ユースタスが胸ポケットから取り出したのは、“陽”のアーチャー……ウイリアム・テルの肖像が描かれたコインだった。

そのコインを見た彼は、少し恥ずかしそうに、けれどとても嬉しそうに笑顔を浮かべた。

「へへ、恥ずかしいが……こうやって、愛しい後輩に出逢えるなんて奇跡は歓迎だし、さ、マスター吞もうぜ。アンタと、その家族の話を聞かせてくれや!!」

冷蔵庫から、酒を取り出しながら“陽”アーチャーがユースタスを誘う。

しかし、ユースタスはバツの悪い顔を浮かべた。

「……すまないアーチャー。家族とは、疎遠なんだ。

息子も、妻もいるのだがね……私は、貴方のように気高く、愛を伝えられる人柄ではないのだ」

「なーにヴァージンくせえこと言ってるのマスター!!」

いいいよいよ、家族の愚痴は聞いてやら、嫁の愚痴は惚気のうちつてな!!」

沈む、ユースタスだがそれに反して“陽”のアーチャーは浮かれながら、豪快に笑い

飛ばす。

そんな明るいアーチャーを見て、ユースタスは勇気を得た。

彼ならば話してもいいだろうと、静かに話し始めた。

「……私は、魔術師の感性を持ち得ることが出来なかった。

父の教育が間違っていたわけでもないが、どうしても私は人の心を持ったまま、代を受け継いだ。

……だというのに妻は、息子は酷く魔術師として完成形に近い姿となってしまうていた。

息子は私の魔術師としての姿に羨望の眼差しを向け、妻も魔術師としての私にはまるで生娘のような態度となる。

それが、辛くて、辛くて辛くて……研究に没頭せなければならぬと偽って、私は別居をすることにした、そう。私は逃げてしまったんだ」

「……おう、役者をずっと続けんのもツライだろう。

なんせ、つまりはお前さんは人一倍、優しいんだからな。

優しいから、魔術師としての人格が完成できなかった、優しいから、騙す罪悪感にやられちゃったんだ」

ユースタスが言葉を発してから、ピタリと笑いを止めた。『陽』のアーチャーは温かな



声音で、ユースタスを慰める。

「家族を騙し続けているのに……か？」

「あたぼうよ、男の嘘は優しきで出来てんのさ。

そんな、優しい嘘ついて罪悪感でやりちまったんだ。可愛いもんだよ。

だが……まあ、ダメだよなあずっと黙っておくのは!!」

ユースタスの額を指で弾きながら、アーチャーは次は、説教を始めたのだった。  
「いいか、家族には堂々と自分をさらけ出せ。

逃げ場を無くすな、抛り所にしがみ続ける!!

大丈夫だ、瓦解なんてしねえよ!

……だってよ、愛した女だぜ?

その結果、生まれた子供なんだぜ?

嘘で、虚飾だらけなお前を愛する、愛してくれているさ。

なんせ優しいお前が選んだ女だ、優しくないハズがねえ」

「アー……チャー……」

おう、と「陽」のアーチャーは笑顔をかべる。

朝日のように眩しい笑顔。

その笑顔の前に、ユースタスは自身の目頭が熱くなつた錯覚を覚えた。

目を擦り、ユースタスが柔らかな笑みを浮かべる。

「……ありがとう、かなり肩の荷が下りた。」

「そうだな、一回話あつてみないとダメだな。」

「この聖杯戦争に生き残れたら、私は一度話し合ってみるよ。」

「機械音痴なんでね、電話機器なんて持ち合わせていないんだ」

「おう、そうしな!!」

「お、面白いやオレって祖国じゃ今はどんななんだ？」

「知識としちゃ好かれてるってのは知ってるけど、知識よりも聞くことも、そしてお前さんの熱弁具合で推し量ることも可能だよなあ!!」

「ああ、それなら——」

「こうして、二人は会議の時間まで酒を飲み交わし、談笑を続けた。」

「ユースタスは現代のスイスについて、ウィリアム・テルという偉大な男についてを熱く、雄弁に。」

「陽」のアーチャーは祖国の現状を嬉しそうに、そして自身のことに関して少し気恥しそうに聞き続けたのだった。

「……余談、ではあるが。」

「この後、ユースタスは見事に酔いつぶれてしまっており、他のマスター達からは呆れ

られてしまったが、それを気にせずにも「陽」のアーチャーは笑い飛ばし、ユースタスは深く反省したのだった。

ユースタス達が談笑している最中、「陽」のバーサーカーは街を徘徊していた。

土地を知り、戦場に役立terるといふ名目で街の視察を行なっていた。

……微かに、「陰」のアヴェンジャーと出会えることを期待しながら、彼女は回りを見渡しながら歩く。

彼女の近くにはじつと見つめる鳩がおり、その鳩は雅の使い魔だった。

彼女の言を信じつつも、念の為に雅が監視をすることとしたのだ。

(……この土地は……時延だったか。

周囲には建物が多い。弓兵殿や、主などは絶好の狙撃地点では無いだろうか？

問題は、それを敵側も知っていること……いつその事壊して——)

少し思案していた「陽」のバーサーカーは、ふと、ある店から出る男女を見つけた。煌びやかな、外から少し騒々しい音が漏れ出ている、機械だらけの店。

——ゲームセンターを、彼女は見つけた。

（あれは確か……げえむせんたあ……でしたか。

そういえば……義仲様とは幼い頃、よく遊んでいましたっけ）

脳裏に、煌びやかな思い出を回想させる。

とても輝かしき遊びの思い出に「陽」のバーサーカーは、つい綻んだのだった。

（いけません、現を抜かしては主にかたじけありません……気を取り直し——）

気を取り直して、「陽」のバーサーカーが視察を再開させようとした、その時だった。

なんと、ゲームセンターから、「陰」のアヴェンジャーが出てきたのだった。

（義仲様……!?!）

何故、げえむせんたあなどに!?!）

驚きつつも、「陽」のバーサーカーは「陰」のアヴェンジャーの後を追う。

使い魔で視察をしていた雅は、止めるつもりなど毛頭無かった。

あくまでも、監視の目的は「陽」のバーサーカーが敗退するのを避けるためだった。

何よりも、雅は巴御前を選んでしまった罪悪感が少なからず存在していたというのも

大きい。

義父、義隆はこの聖杯大戦には絶対に木曾義仲を選ぶと豪語していたからこそ、木曾

義仲を無力化させる為に雅は巴御前という、戦力にもなるカウンターを用意した。

しかし、実際はどうだ。

木曾義仲は木曾義仲……しかし、それは復讐に囚われ、我を忘れ愛しき妻をも忘れた義隆の同族と成り下がっていた。

それどころか、義隆は「陰」の「アヴェエンジャー」に「陽」のバーサーカーの事を『仇』であると偽りの情報を教えたのだ。

それは、彼女にとっては精神的にも大きなダメージとなるのは容易だった。

そのメンタルケアをするべく、雅は日中の行動を何も言わないことにしたのだった。

「……………コゴデハ、ナイ」

残念そうに呟きながら、復讐鬼は歩みを速める。

「陽」のバーサーカーは、その後を追うべく足を一步出して——その途端に悩みが生じたのだった。

「……………今、ここで追っても義仲様は巴のことを……………」

先日のことを思い出し、その足が半歩、下がる。

しかし、

『バーサーカー、思うようにしろ。』

……………彼と話を試みたいならそうするといひ』

その背中を、雅が押した。

不安定な精神状態で戦われては困ると、雅は自身に言い聞かせて、判断した。

「ありがとうございます、ますたあ……!!」

——そうして、少女は駆け出した。

想い人と話す為に、自身を思い出してもらうために。

……この状態の方が都合がいいのかもしれない。しかし、それでも彼女は走る。

今度は、思い出した際には此方の味方になつてもらえるのではないか、そんな期待を、  
僅かに抱きながら。

## 復讐鬼と主

『よしなかさま、待つてくださいい!!』

広大な草原で、少女と共に走った、楽しく懐かしい思い出が復讐鬼の脳裏に過ぎる。モヤがかかって、顔は見えずどんな人物なのかは分からない。

しかし、昨夜のあの白い髪の女だと復讐鬼は自然と理解していた。

なぜ、こんなものが流れるのか、困惑しながらも歩く復讐鬼は、ふとある場所を見た。煌びやかなゲームセンターを、復讐鬼はほんやりと眺め、

「……スゴロクハ、アツタリスルノダロウカ」

そう呟き、自然と足を動かしたのだった。

店内に入り、自然と周囲を徘徊する。

現在、復讐鬼は霊体化しているため姿は見られることはないが、彼の姿を見た者は必ず指を指して笑っていたことであろう。

「……ナカッタカ」

残念そうに呟きながら、復讐鬼はそこから立ち去る。

その直後、復讐鬼は何者かの気配を感じ取った。

「……………アノオンナカ」

その気配の主を先日戦った、「陽」のバーサーカーと気付き、復讐鬼は細い道へと進む。

彼女を誘き出すために、確実に戦闘へと発展させるために。

復讐鬼は歩を進めた。

しかし、その邂逅を義隆は良しとしなかった。

アヴェンジャーが記憶を思い出す可能性がある、そう判断した義隆は、自身の部屋で  
 呵々、と笑い手の甲を掲げる。

——そこには、剣の形をした三画の令呪が消えた痕跡と、手首に令呪が刻  
 まれていた。

「令呪を持って傀儡へ命じよう。

我が元へ戻れ、復讐鬼」

突如として、アヴェンジャーが蒼き光に包まれる。

その姿が消える直前、「陽」のバーサーカーが慌てて飛び出す。

言葉を考えていなかったため、頭で必死に捻り出し、最愛の男へと言葉を——

「サイゴニトオウ。



キサマハ、ホントウハナンナノダ？」

投げかける前に、復讐鬼が訊ねた。

義隆にの言葉に一度は騙されたが、時間が経つにつれて嘘だと確信した、復讐鬼は本人へ問うた。

「私は——！！」

巴御前が答える。しかし、もう時間切れであつた。

アヴェンジャーは、突如として変わった景色を眺め、令呪で場所を移動させられたと悟つたのだつた。

「……………ナンダ、ナンナノダ？」

深まる疑念に、*“陰”*のアヴェンジャーは苛立つ。

そんな、アヴェンジャーの姿を見て義隆は、グラスにワインを注ぎ、呵々と笑つた。「雅め、中々に面倒な事をしてくれたな。

軽く見ていた儂わたしが愚かであつたか」

自身をそう蔑むも、どこか余裕綽々と義隆は残り二画となつた令呪を撫でる。

「さて……………そろそろ呼んでおくとしようか」

呟くと、義隆は電話を手に取り、とある相手に電話を掛けるのだつた——

## 信頼と不安

時刻は午後の一六時。

霧島邸の居間にて、忠吉と竹流が何やら会話をしていた。

「貴様の今晚のミツシヨンを達成するまでの間、我がランサー殿を連れていけ。

切翔の資料にあった所属不明のサーヴァントらしき存在が気がかりだ。

……あのアーチャーだけでは守りきれるか分からんからな」

「是非ともそうさせてもらうさ。

俺とてアイツを信用していない、する要素が皆無だ。

アイツ、昼間にどこかへほつつき歩いたと思えば女を俺の部屋へ連れ込んできたから

な。

『今からセックスするから退いてー』なんて言われた時は自害させてやろうかと思つたぞ」

ため息を吐き出しながら、上の部屋で行為に及んでいる“陰”のアーチャーを憂える。

竹流の言葉に、“陰”のランサーが姿を現して擁護をした。

「……まあ、彼奴は頭が切れるからな。

もしやすると何やら情報を集めているのかもしれない。

その珍妙な存在についてなどな。

その、なんだ。

主であるお前が彼奴を信じてやることだ」

「フン、貴様が言うのならそうなんだろうな。

え？　無傷の勇将……本多忠勝よ。

そういえば……貴様は昨日の時点で宝具を使っていたな？

何か対策やらをされている可能性が高い。

俺の護衛を務めてくれるのはありがたいが、死なぬようにすることだな」

「それならば安心するがいい、某の誇りに賭けて貴様を守ろう」

拳で胸板を叩き、「陰」のランサーが誇示する。

そんな、自信に満ち溢れる「陰」のランサーに忠吉は嬉しそうに微笑んだ。

それは自身のサーヴァントへの憧れ故の微笑みであり、まるで童のようであった。

「……そうか、それならば期待しよう」

言い残し、居間から去ろうと竹流が足を動かす。

忠吉が時刻を見てまだ会議までに余裕があると分かると、竹流を呼び止めたのだっ

た。

「待て竹流。時間に余裕がある事だ……久しぶりに囲碁でもせんか？」

「囲碁？」

構わんが……やっても兄貴の圧勝だろうに」

「それならば、将棋はどうだ？」

忠吉の提案に竹流が意外そうに目を丸め、そして時間を見る。

まだ余裕すぎるほど待ち時間があるのだというのを確認し、竹流が頷いた。

「確か……そこに将棋盤があつたな。」

よし、やるならやろう兄貴」

将棋盤を取り出して、二人が将棋を始める。

陰のランサーは、空気を読んで今から退出するが、その矢先に頬に真つ赤な紅葉跡がある陰のアーチャーとバツタリと出会ったのだつた。

「……何か粗相をしたのか？」

「中に出したら打たれた。」

『最低！』つて、すごいキレられたよー。

ホント、女の分際でホントにムカついたよ、殺してやりたくなつたよね。

女なんて所詮は……性処理用でしかないつてのにさあ」

あつげらかんと答える。『陰』のアーチャーに、ランサーは深い溜息を吐く。

「貴様、いつか痛い目を見るぞ……」

「あ、もう見てるから大丈夫だよー」

ヘラヘラと答え、『陰』のアーチャーは風呂場はと移動する。

「……書齋へと向かうか」

何か思い浮かんだのか、『陰』のランサーは三階にある書齋へと向かうのだった。

## 温もりと死と

---

時刻は同じく。

教会内では、小岡神父が女神像の前で祈りを捧げていた。

その姿は洗練されており、見るものの目を思わず引いてしまう程だった。何を隠そうか、ルーラーも小岡神父の姿に感動を覚えていたのだった。

「素晴らしい祈りです小岡神父」

「ありがとうございますルーラー様。

……と、もうこんな時間でしたか。

失礼致します」

小岡神父が数分その場を離れ、戻ってきた時には彼は中に水が入ったバケツと雑巾を持っていた。

雑巾を絞り、彼は女神像の台座を拭き始めた。

そこには微量の埃すらなく、拭く必要が全くと言っていいほどないのだった。

それもそのはず、小岡神父は朝にも拭き、昼にも拭いていたのだ。それを、昨日も行っていた。

「……………」

「気になりますか、ルーラー様。」

「私がないぜ、こうも入念に女神像を拭くのかを」

「え？」

言い当てられ、ルーラーがきよとんと目を丸くする。

そんなルーラーに、神父は内心ではこんな可憐な一面もあるのだな、と微笑みながら話し始めるのだった。

「こちら、以前の聖杯戦争にて破損した女神像を、ボランティアによって頂いたお金で建てたものなのです。」

近くの高校の生徒が、私の気力のない姿に見るに見かねてこのような素晴らしい事を行ってくださったのです」

瞳には涙が溜まっている神父に、ルーラーの心は温まった。

彼の涙も勿論だが、ルーラーにとってはこのような善行を重ねてくれる少年達が居たのか、と。

現代の優しき心を、彼女は慈しむのだった。

「……歳はとりたくないものです。

思い出すだけで、涙が出てくる」

「その涙は大切ですよ、小岡神父。

人の心を冷たく凍らせるものなら兎も角。

その涙は、とつても……とつても温かいのですから」

「お言葉、ありがとうございますルージャー様。

……いかにいかに、辛気臭くなつてしまった。

早いですが、これが終わり次第に夕餉を作りましょう。

今夜は……カレーパンでもいかがでしょうか？」

微笑みながら、小岡神父が訊ねる。

ルージャーは、知識では理解しているその珍妙な食べ物に目を輝かさながら頷く。

「まあ、神父は作れるのですか!？」

「ええ、何しろ若い頃は海外での戦争を経験しております。

……お恥ずかしながら、宗教に興味を抱いたのはそれから二十年後のことです。

誰もいない民家に押し入り、仲間と共に作っておりますとも」

「ふふ、どうやら今晩は小岡神父の若い頃で持ち切りになりそうですね!!」

ルージャーの、言葉に神父は恥ずかしそうに頬をかくのだった。



「それはそれは恥ずかしいのでなんと……私はそれよりも、ルーラー様の若い頃のお話をお聞きしたいものです」

「……わたしの話は辞めておきましょう。」

何しろ、以前に、全てお話しした通りですので」

ルーラーはどこか恥ずかしそうに頬を赤らめ、逃げるように姿を消す。

ゆなルーラーに、小岡神父は再び微笑むのだった。

「……先日はそこまで派手では無かったが。」

霧島のことだ、なにか企むのは自明の理。

警戒を怠るなよ、私——」

「——貴様、名は？」

その髑髏の面を被った大男は、幼い頃のオレに訊ねた。

「……………??？」

ちゃんと言ったのだろうか、答えると男が頷き、そのままオレをそつと、優しく地面に置いた。

『……此度の事は忘れよ。』

我は殺生に塗れた人間、本来ならば会うべきではない運命である』

そう言い、男は立ち去った。

その後、オレは皆に聞いて回ったところその男の正体を掴んだ。

その男は“山の翁”と呼ばれるもので、死を告げる天使とのことだった。

『とにかく、貴様はそのことを忘れろ。』

で、なければ貴様は———』

……何を言われたのか、もう覚えてなどいない。

その代わりに、オレの中で山の翁に対する憧れを抱いた。

あの土砂崩れから救ってくれた恩人のようになりたい。

そう強く、オレは願ひ口にしてしまった。

『いやだ、ぼくはあの人みたいになりたい!!』

……幼かった、と言えばそれまでだ。

しかし、その発言がどれほど愚かなものなのか、当時のオレには予想出来なかった。

———それが、男達の策略であると気付かずに。

『そうか……ならば、仕方があるまい。』

本来ならば、お前は平穩に暮らして欲しかったのだが……お前を、“山の翁”として

鍛えてやろう』

『ほんとう!?!』

『ああ。しかし、その先には地獄が待っているぞ。友などいない、ただ人を殺すという思考回路のみをお前に植え付ける』

その時のオレは殺すことさえ出来ればいいのか、と半端な納得をしてしまった。

それがいえなかったが……しかしオレは――

――( 夢か )

培養液が入った水槽の中で、一護は目を覚ました。

状態を起こし、培養液から出る。

ずっと一護を見守っていた『陰』のアサシンがタオルを投げて、彼に渡す。

「ありがとう、アサシン」

「いいさ、別に」

「……君の夢を見てた」

びくりと『陰』のアサシンが指を動かす。

「なあ、君の名前はなんて言うんだ？」

無垢なまま、一護が『陰』のアサシンに訊ねた。

少し間が空いて、『陰』のアサシンは、

「……ファスリイだよ」

四季を意味する、自身の名を口にした。

一護は頭の中に数多の外国語を蓄えているため、直ぐに意味を理解した。

「いい名前だね、ファスリイ。」

これから、そう呼んで構わないかい？」

好きにしろ、と言い、『陰』のアサシンが姿を消した。

## 友と騎士

『レクス、お前は我らが王となるのだ』

幼き頃、父にそう言われその通りに生きてきた。

王として、強者としての強き振る舞いを教わり。

誰にも虐げられぬように徹底的に鍛えられた肉体へと成長させられ。

そうして完成したのは、一人の王だった。

『素晴らしい。その姿、その在り方。』

まさに、我らが王には相応しい姿なり』

言われなくとも分かっている。

その為仕上げられたのだから。

故に、オレの振る舞いは何一つ間違っていない。

……その、ハズだった。

『失礼、隣いいかい?』

時計塔でも異端中の異端児、魔術師に向いていない性格の男。

セドリックと会ってからはオレの考えは反転を重ねることとなるとは思いもしな

かった

---

「……チツ、また懐かしい夢だぜ」

悪態をつきながら上体を起こし、仮眠を終えたレクスが周囲を見渡す。

傍には、自身が呼び出したサーヴァントであるセイバーがいた。

ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン。

過去に決闘で卑劣な手を使い、私財を肥やした“野盗騎士”と呼ばれている彼は主であるレクスの護衛をしていた。

レクスが起きたのを視認すると彼は明るい笑顔を浮かべながらレクスに手を振った。

「お早う、主よ!!」

快眠出来ましたかね？」

「てめえのガチャガチャ音のせいで浅眠だったよ」

溜息を吐き出しながら、レクスが毛布から足を出して起き上がる。

そして、毛皮で作られたコートを羽織り洗面台へと移動して、髪を整える。

その際も、彼は後ろにいるサーヴァントに警戒心を解くことは無かった。

彼は、物語の中では善性を持つ少しだけ下品なヒーローではある。

しかし、事実はその真逆。

そんな男に、レクスは心を許してはいない。

「む？　　主よ如何なさいましたか!!」

声の主である本人に向けているハズだというのに、それに勘づいていない様子を見せるサーヴァントに、レクスはさらに苛立ちを覚えた。

乱暴に髪の毛を掻き毟り、舌打ちを響かせてサーヴァントを睨んだ。

「うるせえなア……俺アな、テメエを信用しちやいねえんだよ!!」

昨日のあの失態といい……テメエは腹に一物抱えてるのは想像に難くねえ!

この際、吐き出させてやる!!」

牙を剥き出しにし、そこに宿る尻尾の様な形をした紅い紋様、令呪が煌めく。

「な、何を……もしやすると主よ、私に乱暴なことを?!?!」

「んなワケねえだろボケが!!」

前回、この地に起きた聖杯戦争。

そこじやサーヴァントの裏切りが横行したってハナシだ。

そんなデータがある以上、いい加減なテメエにムカついたからテメエの本心を聞き出

す迄だ……!!!」

戯言を吐かず阿呆な騎士に、彼は唱える。

その絶対遵守の命令を———!!

「令呪をもって命ず。」

“陽”のセイバー、テメエの目的と今の本心を話やがれ———!!  
煌めきは紅くこの場を包み、そして“陽”のセイバーを包み込む。

絶対遵守の呪いを受け、その騎士はポツリとその心の内を明かすのだった。

『我が目的は一つ。』

それは、生前では出来なかつた騎士として己が行いを貫くこと。

そして今、抱いている我が本心は』

ぐつ、と身を屈める陽のセイバーに應對してレクスが身構える。

そして、騎士が初めて主へ

「……なぜ、大事な令呪を使ったのですか普通はもつと大事な場面で取っておくべきだ  
ろケツトパーンチ———!!!」

腕を放った。

難なくその拳を躲して、その腕に繋がれている鎖をレクスが掴んで強引に引っ張り陽のセイバーを床へと投げつけたのだった。

「バカか？」



……確かにテメエはサーヴァントだ、強いさ。

けどな、テメエの平均ステータスはDだ。

この、人狼の先祖返りであるオレの敵じゃあねエよ」

「いやはや、勝てるとも思っていないし、吾輩は敵意など全くもってないですよ、ええ」  
主殿はあるようですが、と付け加えて陽のセイバーが起き上がった。

「……まあ、吾輩は本当に、聖杯で叶えたいと思うほどの胸の内に抱いている願いは無いのです。」

ただ、吾輩が抱いた一つの事をやりたいだけであります」

「一つのことオ？」

「ええ、生き様を貫くことです」

眉を顰め、レクスが陽のセイバーを睨む。

男の言葉は、レクスの不信感増幅させてしまうには十分な言葉であった。

そんな結果は目に見えていた陽のセイバーは自嘲したのだった。

「生き様ねえ……力のねえテメエに生き様を貫けるのか？」

この世は結局は力だ、心が強かろうと力がなけりや意味がねエ」

「いいえ、心が一番なのですよ。」

人は、心があるから人なのだ」

「……アイツみてえなこと言いやがって」

不機嫌そうにコツコツとレクスが足音を鳴らしながら、部屋のドアへ手を伸ばす。その直前に、ピタリと腕が止まりレクスは陽のセイバーを一瞥した。

「いいぜ、暫くは信用してやるよ。」

取り敢えず、製作途中の武装造りを再開するから邪魔すんなよ」

廊下と思われた空間は歪み、鍛冶場のような景色となる。

そこには、十字架のような剣が描かれていた絵画があった。

「さてと……ほんじゃ続きだなア!!」

吼え、人狼の先祖返りは金槌を握るのだった。

その顔はどこか懐かしみで、微笑んでいるのだった。

## 術師と学者

「貴様ア!!!」

ホテルの一室、バエルとそのサーヴァントである「陽」のキャスターの専用部屋では。

怒号を放ち、一触即発を態度で示している「陽」のキャスターと、そんな自身を冷めた瞳で見ているバエルがソファへ座っているのであった。

「吠えるな、みつともないぞキャスター」

至つて冷静に言うバエルに「陽」のキャスターは更に怒りを加熱させ、幼児のように地団駄を踏むのだった。

「五月蠅い、五月蠅い五月蠅い五月蠅いぞ………!!」

貴様は昨日、彼処が敵地であると知って私を誘導した!!

確かに私は死なぬ。しかし、痛みは感じるのだぞ!!

それを全て知っていて、何故に貴様はいけしやあしやあと誘導したと申した!!!  
!!」

「実験だ。」

どれ程に不死性があるのか、そしてサーヴァントとしての力量がどれ程なのかを測る

ためのな。

……まあ、結果としては不死性は素晴らしいが、その他全てが不合格すぎるほどであつたがな」

「なんだと貴様ア!!!」

杖を構え、〃陽〃のキャスターが魔力を集中させる。

主へ刃を向ける、その行為を前に主は熱くなつていく〃陽〃のキャスターとは対照的に、冷淡と掌に宿る瞳が象られた令呪を見せた。

「忘れるな、貴様なんぞこれ一つで魔術すら唱えれなくするのだぞ」

「ウツ……………グウツ……………!!」

「いや何、貴様が最低値というのは仕方がない。

他の者はどうか知らんが、貴様のステータスは魔力と幸運以外全て鼠の絵が移されてるのだ。

魔力は猫……………英語で例えるならCか。

幸運は兎だからD……………フツ、我ながら研究の為とはいえとんでもないハズレを呼び出したものだ」

鼻で一笑し、バエルがソファから立ち上がり、ゆつくりと〃陽〃のキャスターへと歩み寄る。

肩へ手を置き、彼が耳元で

「今夜は自由に歩く事を許す。

外へ出ることは強制だ、敵の視察を兼ねるのだから」

苦渋で顔を歪めながら、「陽」のキャスターがバエルに背を向ける。

彼とて元々は魔術師であり、そしてバエルよりも古い。

格としては上だあるだろうというのに、令呪があるせいで自身が格下という事に「陽」のキャスターは腹を立てていたのだった。

「……私は、私の目的である『分霊箱』を探すぞ!!

でなければ例え魔術を縛られようとも灯油でこのホテルを燃やしてやる!!

探索中に対峙した敵とはしつかり戦闘をしてやるさ、構わんだろう!!?」

せめてものつよがりでは彼は吠えながら、主に問う。

<sup>バエル</sup>悪魔は頷いて、それを承諾した。

自身の意見が通った、そんな些細な事実を「陽」のキャスターは堪らなく下衆な笑みを浮かべたのだった。

嬉しさのあまり、陽のキャスターは彼の肩に手を置いたのだった。

「フン、そうだからいいのだ!!」

まるで捨て台詞のように吐き、「陽」のキャスターが外を出る。

先程までの喧騒が過ぎ去って、静寂がそっと包み込む。

あまりにも濃すぎた“陽”のキャスターの気配が完全に遠のいたのを確認して、バエルが小瓶から『箱』を取り出す。

「フン、愚かなサーヴァントだ。」

死への恐怖が強すぎるあまり、これに執着しすぎるのだから。

……なあ、死徒シツのなり損チないよ」

愛おしく、彼の心臓と言えるそれを撫で、バエルは自身の手帳に記録を書き記す。

『実験体44号、真名はリッチ。彼は傲慢であるが愚鈍で頑丈なサーヴァントであり、そして異常に生に執着する。』

……もしやすると、アレと相性は合うかもしれない。

アレは前回の亜種で呼び出したが、性格の相違か適合に失敗して実験場が大爆破してしまった。

今度はそうならぬことを願おう』

内容を書いたバエルは顎に手を当てて、逡巡した後

「……明日、試すでしょうか」

そう呟きメモに書いた。

「……クソ、クソクソクソクソクソクソクソ!!」

やはりだ、やはりあの男は私の心臓を持っていった!!」

ホテルから遠く、凡そ3kmほど離れたビルの屋上で、視力を強化した“陽”のキャスターは双眼鏡で自身の部屋を覗いていた。

バエルの懐にあったソレを確認して、“陽”のキャスターは怒りのあまりに双眼鏡を地面へ投げつけ、それを破壊した。

地団駄を踏み、頭を掻き毟る。

掻き毟るあまりに血が滲んだが、“陽”のキャスターは気にしなかった。

それよりも、この状況をどうするべきかに思考を割いていたからだった。

令呪だけでなく、あの箱を持っているとなると“陽”のキャスターは気軽に彼の命を狙えなくなる。

下克上の機会を、見失ってしまったのだった。

「どうする、あんなクソ生意気なヤツに私は頭を下げ続けるなど言語道断……しかし、奴の懐にある箱のせいで従わざるを得ない。

八方塞がりとはこのことか!?

アイツなんぞに私は屈しなればならんとは……クソ、これでも私は時計塔を卒業したと言うのだぞ、それをなぜあんな男に遅れをとるはめになる!!

どうやって殺す、どうやってあの箱を奪う……!!」

「——簡単だよ、キヤスター」

悩んでいる陽のキヤスターが不意に、声を掛けられる。

よく知ったその声は、「陽」のキヤスターは好意的な感情を抱いていた。

あの男のように冷淡でなく高圧的でもなさそうな、自身が上の立場に立てそうなひ弱そうな男——裏切が、後ろで微笑みを浮かべて立っていた。

傍らには黒染めの騎士がおり、「陽」のキヤスターの動きの機微を観察していた。

騎士は自身を警戒している、「陽」のキヤスターにとってはそれだけでも火になり得た。

荒ぶる感情のまま、彼が口を開く——

「きさま……!!」

「ライダー、下がっててくれないか？」

君の抱いている心配なら大丈夫さ」

その荒ぶりを遮り、裏切がライダーに指示を送る。

主の冷めた瞳の奥を受け取り、黒の騎士は頭を下げた。



「……………御意に」

そして渋々とはあるが、“陽”のライダーが裏切の指示に従い、霊体となった。ざまあみろと、見下すように“陽”のキヤスターが笑みを浮かべるのだった。

「さて、話の続きですが……」

怪しげに笑みを浮かべて、裏切が“陽”のキヤスターに耳元で囁くのがだった――

## 兄と弟

日が沈み、夜となる。

霧島家の面々は昨日のように食卓を囲み、黙々と皿にある食事を平らげていた。

そんな中、遊人《ゆうと》の姿が見えず疑問を抱いた切翔《せつか》がその事を切り込んだ。

「……遊人は？」

「今日は飯抜きの日だ」

竹流《たける》が答え、切翔がカレンダーを確認する。赤丸で数字が囲まれている日であることを確認し、

「……………チツ」

静かに舌打ちをした。

可愛い孫が食事中に舌打ちをする、その事実を前に義隆《よしとか》は呵々、と笑う。

「これ切翔、飯時だ。」

はしたない真似は辞めなさい」

静かに、しかし気風感じられる所作で鮭の最後の一切れを食べ義隆が合掌し完食と感

謝を示す。

席を立ち彼は去り際に一言、

「今日は各自、自由に動け。」

彪斗、お前もな」

それだけを伝え、部屋を後にした。

「えーい……あ、これおかわりー!!!」

ピラフが盛られていた皿を給仕に出し、彪斗《あやと》が嬉しそうに高らかにねだる。

一礼して、給仕が皿を受け取り厨房へと向かうのだった。

「……すまない、後でピラフを握り飯にして、三つほどくれないか?」

切翔が給仕に訊ねる。

「……………畏まりました」

何かを怪しむように給仕が、渋々了承する。

それに疑問を抱いた切翔であったが、直ぐにスイッチを切り替えて食事を再開させた。

「自由に、か。」

ならば私は此度は休息しよう。

あのお方は竹流と同行するからな」

コーンスープにパンを浸し、それを口に運ぶ忠吉《ただよし》が呟く。  
忠吉に反応して、竹流が声をかけた。

「なら、俺が外が出るまでの間、話でもしよう。」

たまには兄弟水入らずな会話でもしようじゃないか」

「……………そうだな」

頷いて、忠吉が席を立つ。

義隆と忠吉、その二人がいなくなったのを確認して竹流は給仕に向かって皿を投げた。

プロ野球にも匹敵するその投擲の速さを前に、そしていきなり投げられたことにより給仕が気づいた頃にはもう腹部へめり込んだ後だった。

「かハッ———?!?!」

「不味かったぞ、あんなものを俺に食わせてどういうつもりだ？」

仕置だ、殴ってやる」

馬乗りし、そのまま顔を只管に殴打する。

突如とした竹流の態度の豹変に、彪斗は怯え切翔は冷めた目を向けていた。

「……………こうやって、睨けるのも霧島家の者として当然の役目だ」

ひとしきり殴った後、最後に給仕の肩の肉を食い千切る。

給仕は叫ぼうとしたが、首を掴まれて叫ぶ事を許されなかった。

「あ……………が……………肩、わたしの、かた……………」

「掟を破れば、その者は相応の罰を受けねばならん。

くれぐれも、お前達は掟を破らんことだな」

その肉を嚙下し、最後に給仕に「肩の肉は美味かったぞ」とだけ言い残して去っていった。

竹流が去った後、彪斗は一言、

「年端もいかねえ女の肩の肉食って美味いって……………キメエ……………」

と言い、そそくさとピラフを完食して立ち去った。

一人残された切翔も遅れて食べ終わり、給仕の血を止めて部屋から出るのだった。

「……………確かに、気持ち悪かったな」

彪斗の言葉を思い出し、切翔がふと呟くのだった。

「切翔様、どうぞ」

切翔が給仕から握り飯を受け取る。

その時に、切翔は遊人のことを好いていた給仕の女性がいないのを認知して、思わず訊ねた。

「……あの子は？」

「えっと、長い間休むと言っていました」

「そうか」

病気か何かにかかったのだろうか？

いずれにせよ、無事ならば良かったと切翔は安堵しておにぎりを受け取る。

先におにぎりを一つ食べ、毒が無いのを確認して切翔が遊人の部屋へと向かう。

「……マスターは何故、弟君に優しいのですか？」

セイバーがふと、気になったことを訊ねる。

それに対して切翔はあっけらかんと

「弟だから、それ以外に理由なんてないし、いらないだろう？」

そう答えたのだった。

「……マスターのような方が兄であれば、私は今頃は此処に居ることなどなかったでしょうね。」

そして、貴方の足を引っ張ることも無かった」

「無駄な卑下は止めてくれ、セイバー。」

そういうのは嫌いなんだ。

……ほら、やるよ」

そういい、ラップに包まれたおにぎりのひとつを「陰」のセイバーに投げる。危なげに受け取り、はてと「陰」のセイバーは首を傾げ、切翔に訊ねた。

「サーヴァントは栄養は必要ありませんよ？」

「身体はな、でも心を満たすには必要なコトだ。」

遊人の事はいい、アイツ元々少食だからな」

微笑みながら、切翔が渡す。

おどおどと陰のセイバーが受け取り、ラップを不器用に外す。

「では、いただきます……」

はむ、とひと口頬張る。

こうしてみると、兎のように感じるのは気の所為だろうか。

肝心な味はお気に召したようで、続けてもうひと、二口を続け様に齧る。

「ウメエだろ。」

俺も、遊人も好きなんだ」

「キヤスターのマスター……でしたよね？」

彼は何故、あのような差別を受けているのですか？」

「陽」のセイバーの問いに、切翔が周囲を警戒し、誰もいない事を確認する。そして遊人に関する事を、話し始めたのだった。

「アイツは、この家の禁忌を犯した。」

魔術を独学で会得し、行使し始めたんだ。

それからさ、アイツの飯に毒を盛られたり暴力を振るわれたりしたのは。

何度も願ったさ、『やめてくれ』って、『酷い仕打ちはしないでくれ』、ってさ。

けれど、弟は虐げられ続けた」

切翔の言葉に、陰のセイバーの表情が翳る。

しかし、その表情を見てしまった切翔が直ぐに別の話題に切り替えるのだった。

自身の母親と、父親のことを。

「……母は優しい人だった。親父も優しくて、俺たちの家庭は仲睦まじかった。

けれど、三ヶ月ほど前に母親は処刑された。

父である霧島雅が、俺達を裏切って魔術協会についた。

本来ならば八体六になると思われた聖杯大戦だが、爺さんが聖杯に細工を仕掛け

て、七体七にした」

切翔の言葉を切る。

続きは暗くなると察してしまったからだった。



直ぐに態度を改めて、歩を早めて「陰」のセイバーを追い抜かした。  
「まあ、この話はもういいだろう。」

「さあ、行く」

「遊人の所へか？」

それは許さんぞ切翔。

……あんな屑を助けるなど、許さんさ」

遊人の部屋まであともう少し、そんな矢先に。

先程まで気配はなかったハズの竹流が、現れ切翔が焦燥の汗を滲ませた

## 祈りと謎

「俺は確かに言ったぞ」

竹流が静かに詰め寄り、切翔の肩に手を置く。

そして、空いていた手を使って切翔の顔に裏拳を見舞わせた。

バゴ、と乾い音と鈍い音が混ざり合った音が廊下に響かせる。

セイバーが一瞬、剣を出したが切翔が手で制止した為、

「掟を破るな、切翔。」

お前は優しい子だ、だからあんな屑にすら手を差し伸べたくなるのだろうか。

だが、父の逆鱗に触れたあの屑を助ける道理は無い。

……もう、無駄な事は辞めるんだ」

「俺が優しい？」

冗談はよしてくれよ竹流さん。

人殺しの俺が優しいわけないだろう、アンタはただ、俺と母さんを重ねているだけだ」

「そうだ、お前は美華に似ている。」

だから俺はお前を助けたいとも思うんだ。

しかし、遊人……あの屑はダメだ。

気を抜けば殺してしまいそうになる、俺から美華を奪ったあの塵ごみにそっくりだ」  
切翔の指摘を、竹流は冷静に流す。

そして憎々しげに、遊人の部屋を睨み呟くのだった。

「……出来ることなら、爆破してやりたいのだがな。

アイツの部屋を、そうすればお前が抱く余計なしがらみは無くなると思うしな」  
「そんな事をすれば霧島雅オヤジの二の舞を起こすだけだ。

魔術協会に鼻で笑われるぞ、『二度も裏切られる間抜けな集団』ってな」

「いや、修羅場じゃん昼ドラじゃん。

なに、アニキまた差し入れ持ってきてくれたん？」

言い合う二人の間に、冗談を言いながら遊人が二人の背後を取るように現れる。

部屋からでは無い、どこからともなく現れた遊人に竹流が反射的に彼を殴りつけた。

プロボクサー顔負けの、岩のように重々しく、そしてナイフのように鋭い拳が遊人の顔へと目掛け、放たれる——！！

「『ゲームスタト  
強化』」

その一閃が来るよりも早く、疾く。

彼が詠唱を唱えて、身体の魔術回路を浮き出させて魔力を自身の顔へと集中させる。

顔に拳がヒットする。

しかし、本来ならば遊人にダメージが入るはずだったが、寧ろ竹流の拳の皮膚が裂けてそこから血が吹き出すのだった。

痛みが竹流にフィードバックされて、思わず腕を抱えて、彼は遊人を殺意を込めて睨みつけるのだった。

「ぐおおっ……!?!? 貴様ア、遊人オ!!」

「当たり前じゃん怖。

あ、おにぎり貰ってくわ。

ありがとうござえやあーす」

軽く躲して、切翔の手からおにぎりを一つ拝借して、そそくさと部屋へ向かう。

部屋の前に着いた遊人が、切翔の方へ振り向き、

「なーんで、こんなショーもねえ事で言い争うんだろウチって。

こんなん、放つても負け確でしょ」

それだけ言い、彼が部屋へと入っていくのだった。

「小岡神父、起きてらっしゃいますか？」

ルーラーが彼の自室の扉をノックする。

すぐ出ます、と小岡神父が答えて数秒で彼が部屋から顔を出す。

「如何なさいましたか？」

「いえ、少し気になる気配が部屋からしたので」

「ああ、恐らくコイツですな」

小岡が隙間から、床に血を流し倒れ伏す青年を見せる。

ルーラーは、その青年が粒子となり散ったことからサーヴァントであると事実を目の当たりにして、驚きを露にした。

「サーヴァントを……!?!」

「しかし、明らかに手応えがありませんでしたのでコレが本体ということはないでしょう」

小岡が引き出しを引き、膨大な数のノートの中から比較的新しいめのノートを取り出した。

「確かコレだったか。」

過去にハサンの名を持つアサシンの英霊の中で似たような存在が確認されていたはずです。

しかし……どうやらソレでは無いようです」

「貴方の資料にないサーヴァント、ということでしょうか？」

……仮説ですが。

私は今、英霊の真名を視れる能力を有してはいますが、彼からは名が記載されていないのです。

ですので、もしやするとですが宝具自体の効果なのではないかと」

ふむ、と顎に手を添えて小岡が思考する。

「そういえば……今朝のニュースである一家が惨殺されたニュースはご存知で？」  
「勿論。」

遺体は食い散らかされた後がある、とも情報が回ってきました。

嫌々、去年の聖杯戦争を思い出しますなあ」

「去年も似た英霊がいたのですか？」

ルーラーの問いにいいえ、と首を横に振って小岡が答えた。

「以前は食屍鬼<sup>グール</sup>が沢山おりました。

あるサーヴァントの宝具の能力により、死徒が発生してしまつたのです。

……ルーラー様、ここは一度この街を探索してくださいませんか？」

「そうですね……これが死徒による仕業<sup>しわざ</sup>だと仮定し、これ以上に被害が拡大する前に吸

血鬼を迅速に処理しましょう」

「お願いします、代行者様達が来てしまわれれば以前のようなこと以上になってしまわれ  
ます。

……あの少年さえ生きていれば、良かったのですが」

小岡が窓に移動する空を見つめる。

『あの少年』、という言葉にルーラーは興味を抱くがそれはまた後日に聞こうと気持ちを  
抑えて、小岡に背を向ける。

黒く、まるで絹糸のような艶やかさを備えた髪が空を撫でて。

そして魅力の一つである穏やかで美しい表情を一変させて。

強く、凛々しい表情を神父に向けるのだった。

「それでは、参ります。

——主よ、我に力を」

祈るように言霊し、ルーラーが姿を粒子にして姿を消す。

小岡は、ルーラーが無事に帰るようにと。

人々の想いで建てられた、大切な女神像に願うのだった。

## 家族と食事

午後23時50分、遊人の通う西和高校。

その近くの森の中に、“陽”のアーチャーは潜んでいた。傍らには、ユースタスとアグリツパの2人がいて、二人は急襲が無いように警戒を怠ることなく周囲を見渡しながら森の中を進んでいく。

そんな中アグリツパがふと、夕方にあつたユースタスの醜態について遅めの説教を開始させた。

「……全く、君ともあろう男が酒に浸つて会議にまともに参加できないなんて失笑も良いところだよ?」

「本当にすまん、コンラート」

「ダツハハハハ!!」

元はと言えばオレが悪イんだ、マスターの事は許してやってくれや」

陳謝するユースタスと、陽気に笑う“陽”のアーチャー。

アグリツパはアーチャーに少し物申したくはなつたが堪えることとした。

自身の言いたいことは言ったのだし、ここで怒つてもなんの得もないと溢れそうにな



る感情にそつと蓋をしたのだった。

そして、その判断は正しくあった。

——突如として、空から雨かと疑うような『矢』が大量に飛来しアグリツパ達に襲いかかって来たのだった。

怒りに任せていれば判断が送れ、致命打となっていたであろう。

アグリツパは内心で感謝しながら、前方に出していた自身のサーヴァントへと声を掛けた。

「ランサー!!」

「承知した」

事務的なやり取り、その後ランサーが空へ跳び、槍で雨《や》を全て薙ぎ払った。

その力を目の当たりにして、ユースタスが感嘆の声を思わず漏らすのだった。

「これが……円卓の騎士の力か、なんとも凄いものだな」

「いいや、それだけじゃねえぜ。」

ランサーのマスターの手を見てみな」

「ん? —— なっ!?!」

思わずユースタスが驚く。

その理由は、アグリツパの腕から早くも一角の令呪が消失していたのだった。

掛けた仮面のような形をした令呪、それをアグリツパが惜しそうに見詰め、擦るのだった。

「コンラート、何故だ!？」

数が限られた令呪を何故この一瞬の為に使ったのだ!?!?」

「決まっている。ワタシの使い魔<sup>サーヴァント</sup>の素の力ではあの矢の雨を退けることが出来なかつたからだよ。」

……ワタシのサーヴァントは諸事情で宝具を使えない。

そして、伝説の武具を持っていない。

だからこそ、ステータスを上昇させたのさ」

「へエー！」

キミ、心はブサイクだと思っただけどフツメンだね」

声のした方を振り返る。

10数メートル程離れた木々、その枝の上に優雅に座る男が一人。

首に煌びやかな黄金の首飾りを着け、美しい金色の髪を後ろに束ねた、背格好の高い美青年——

「陰」のアーチャーが片手に派手だが、美しさを兼ね備えた弓を携えて嘲笑するかのよう三人を見下していた。

「来なよ、大英雄を殺した事のある神代を生きた王サマのボクの力を見せてやるさ」

見下し煽る。陰のアーチャーはまさに、自身が言う通り王だった。

(今の矢……アレは一度に射出したと考えられる。

参った……今のワタシ達では勝てる可能性が低い)

頬に冷や汗を静かに流し、敵を睨むように見るアグリツパ。

そんなアグリツパの肩に手を置いて、前へ出たのは陽のアーチャーだった。

ズンズンと歩き、陰のアーチャーへと近付く。

「止まれよ、ブサイク……ではないな、ハンサムか。

でもさ、ボクってハンサム嫌いなんだよね。

大体のやつが僕の神経を逆撫でて来るもん。

正直、ウザったらしくて仕方がないんだよねえ。

だから止まってくれない？ ついでに死んでくれると嬉しいけれど」

「まあ、そう言うなや。

仲良くしようぜ、オレは王様みたいな人が好きなんだ!!」

飄々としながら陽のアーチャーが言い放つ。

そんな彼に、目を細めて殺意を露にしながら、

「ホラ、逆撫でてきた」

そう、殺意を吐き出すのだした。

「パ、パ」

愛しき家族が、よちよちと我が足元まで歩いてくる。

どうしたんだい、そう訊ねると子供が照れながら、と私におねだりするかのよう  
に手を伸ばした。

「オニク、タバタイ」

お腹が減ったのか。

仕様のない子供だ。

しかし、それがとても愛おしい。

私はすぐに横にある死体から肉を引きちぎり、子供へあげる。

「あなた、二人ほど帰ってきてないわ」

「一人は昨日死んだが……あと一人は分からない」

「あ、お兄ちゃんノニオイダ」

指を指した子供の方を見る。

その先には窓があり、そこから見下ろすように道路を見る。

そこには美しく、そして艶やかな格好をした女がいた。

確かに、あの女からは息子の一人の匂いが僅かについている

しかし、その美しい女性はサーヴァントだろう。

奇襲をして通用するとは思えない。

あの黒髪を咀嚼したかったが仕方ない。

ここは素知らぬ顔で家から出ないのが吉だろう。

「あの人はサーヴァントだ。

聞きたいけど、お父さんじゃ勝てなさそうだし、あの子には悪いが放置しておこう」

「分かった」

肉をちぎり、頬張る。

そして、息子達に肉を分け配る。

まだ渡していない孫にも渡し、皆持ったのを確認する。

これだけで人家族分の死体を要することとなる。

しかし、構わない。

「さあ、肉は持ったね。

それじゃあ、合掌しよう」

全員、手を合わせる。

そして、皆仲良く。

「いただきま——」

言い終える前に、窓が割れる。

そして闖入者が現れた。

先程の艶やかな格好をした女だった。

……気配遮断が甘かったか？

「サーヴァントの気配が民家からすると思えばやっぱりね。

こんばんは、これ以上のお食事はやめていただけける？

ねえ、ソニー・ビーン？」

成程、ルーラーか。

道理で我らに因縁をふっかけるわけだ。

おおかた、これ以上の被害は抑えたいとかだらうか？

しかし、それは無理だ。食べなければ私達が死ぬ。

……出来ればやり合いたくはなかったが仕方あるまい。

「答えはNOだ。食べねば我らが死ぬのみだからな」

「そ。なら————キツイのいくわよ!!」

巨大な十字架を横した杖を我らに向けて女が我らを敵視する。

女を前に私はただ、嬉しきで笑みが零れてしまう。

思わぬメインディッシュに、感謝を。

息子の一人が石で出来たナイフを投げ、交戦の合図となったのだった

---

## 父と子

JR和歌山駅の中にて。

切翔が「陰」のセイバーを連れて歩いている最中に、切翔が気配を感じピタリと足を止めたのだった。

「どうされました？」

「多分だが敵だ。」

「……セイバーいったん退くか？」

切翔が咄嗟に出た、その言葉にセイバーが目を丸めた。

夕方での一件といい、切翔は前日から朝にかけての態度とはうってかわり、自身を尊重してくれるのだった。

彼女としては嬉しい。確かに嬉しくはある。

しかしそれはそれとして、不気味にも感じてしまうのだった。

二重人格かなにかなのだろうか、陰のセイバーがそんな勘繰りをする。

「……気にするなセイバー。」

ただの、気の迷いさ」



陰のセイバーの疑問を切翔が感じ取ったのか、温和な笑みで彼女に囁く。そんなことで疑問は晴れないセイバーではあるが、切翔としてはそういう他無かったのである。

——自身すら、困惑したのだから。

（何故、俺はセイバーにこんなにも優しく接してしまう……？）  
コイツはただの駒のハズ。

なのになぜ、こんなにも——？）

湧き上がる疑問を頭で振り払い、彼は自身の頬を叩いて深呼吸をする。  
スイツチを切り替えて。

冷酷な眼差しで、彼はセイバーを一瞥して命ずのだった。

「やはり、排除しに行くぞ。」

昨日は精神の問題でお前が遅れをとってしまったが。本来ならばお前は陰の陣営最強の英霊だからな」

「ほう、ならば貴女を斃せば私達の陣営が大いに優位に傾くわけですか」

「——バーサーカー、巴御前か………?!」

切翔が懐から銃を抜きとり、敵を睨む。

銀の長髪の女性はその身に甲冑を纏っていた。

紅蓮の鎧兜を見て、切翔は資料を元にサーヴァントのクラスと真名を口にするのだった。

陽のバーサーカーは不敵に笑み、切翔の傍で剣を構える少女に薙刀の矛先を向けた。「御命、頂戴します。」

……義仲様に会えなかったのは真に残念なのですが、敵を斬れぬセイバーが相手ならば好都合。

さあ、行きます——！！

「狂戦士が、若輩者が私に勝てると思うな……！！」

少女と女性が衝突する。

流れるような薙刀捌きと、烈火のように荒々しい剣捌き。

まるで対極な二人はまさに陰と陽。

斬り合う中、僅かに自身のサーヴァントが押していると確信した切翔は物陰へと潜んで辺りを警戒し始めた。

「……どこにいる」

——陽のバーサーカーのマスターは霧島雅の可能性が高いのは、彼女の真名を把握した時に全員に義隆の口から伝えられていたのだった。

『雅はかの伝説、衛宮切嗣と引けを取らぬ魔術師殺しだ。』

まあ、それもそのハズだがな……呵々」

「……親父、一体アンタは何故に向こう側へ着いた——？」

「何故か、それは自身で導くことだ切翔」

声をした方を振り返ると、改札口の傍でマシンガンを構える雅の姿があった。

いつの間に、驚く切翔を余所に雅は弾丸の雨を降らした。

その雨は当たれば濡らす。雫ではなく、血溜まりで。

切翔はすぐさま自身の魔眼を発動させてその未来ごと、弾丸を尽く切り払うのだった。

それを当然、予想していた雅がすぐさま行動を移した。

懐からアーミーナイフを取り出し、すぐさま切り掛る。

切翔が二回目の魔眼を発動させるが、雅はすかさず跳躍して、その狙いであった脚への奇襲を躲し、切翔の目と鼻の距離にまで接近に成功させた。

刃が心臓を貫く直前、切翔が銃身を盾代わりとすることで防いだ。

それに感心しながらも、切翔の魔眼を見た雅は残念を隠さずため息で表し、助言を送るのだった。

「それはまだ枝だ。

枝で振るっても、避けることは容易だろう？」

もつと花卉を開花させなければその魔眼の本来の力を発動させることは出来ないぞ  
切翔」

「花卉だと……?」

「どうかアンタ、俺の魔眼の事を知って——!？」

「お前と、遊人の父親だよ僕は。」

子供の能力の把握くらいは、父として当然のことだろう」

戸惑う切翔に対して雅があつさりと答える。

驚いて目を丸めた切翔には大きな隙が生まれてしまい、雅もそれを見逃すほど甘くは  
なかった。

すぐさま、彼の懐に銃口を当てる。

トンプソン・コンテナダーの銃口を感じ取った切翔は僅かに冷や汗を流した。

彼の中で、雅の中に二つ選択肢があると見抜いていたからだだった。

その二つのうち、切翔は賭けた方を願ひ——

「……戯れだよ、切翔。」

僕は少なくとも君の命を奪うことはしないさ」

その通りに動いたことに切翔は安堵するのだった。

谷栄という地区、そこに建てられているLEAZという美容室と、焼肉レストラン店の近くに聳え立つ教会内。

そこでは、小岡神父が祈りを捧げていた。

ルーラーが無事に帰宅するようにと、彼はただ只管に祈り続けていたのだった。

そんな中。ギイ、と扉が開く音が聞こえた。

コツコツコ、と革靴の音が響き渡る。

祈りをやめて、小岡が振り向く。

振り向いたその先には、意外な来客がいたのだった。

「おやおや、珍しいお客さんですな。」

——如何な用得御座いますか、霧島きりしま竹流たけるさん——

小岡の視線の先には、黒人を連想させるような黒い肌を持つ癖毛の長身の男、霧島竹流がいた。

「決まっている。」

お前から預託令呪を奪いに来た」

自信満々な笑みを浮かべ、霧島竹流がさらに一步迫る。

完全な敵対姿勢に、小岡が薄らと笑みを浮かべるのだった。

「怖い怖い、まさか殺してでも奪うおつもりで？」

「ああ、そうさ。」

神への祈りは済ませたな？

俺に無様に命乞いする心の準備は出来たか？」

竹流が銃口を向ける、その刹那には。

——小岡は既に、竹流の懐へと辿り着いていた。

「なっ————!!？」

急いで迫り来る拳を掌で受け止めたが、受け止めきれず吹き飛ばされてしまう。

扉ごと外へと吹き飛ばされた竹流は急いで強化の魔術を発動させる。

「……受けられたか。若い頃ならば二の打ち要らずであったが惜しむ必要は無いでしよう」

コツコツと、迫り来る足音。

まるで死神が近寄るかのような恐怖心を抱いた竹流は、すぐに起き上がり小岡がまだ教会内にいることを把握した。

「な、なんだあのジジイ……!!？」

資料には、十字教徒の修道士としか書かれていない。

悪魔祓いでも、異端審問会でもないハズ————!!？」

「聖堂教会所属、元軍人です。」

しかし、貴方は悔った。

何故、かの大戦の生き残りであると意気込まなかつたので？」

小岡の問いには圧が含まれていた。

その圧を前に竹流は思わず冷汗を垂れ流してしまうのだった。

困ったように小岡はやれやれと首を振り、竹流を睨むのだった。

「荒事は沢山ですが……仕方ない、貴方を殺してでも追い返しましょう。」

主へのお祈りは済ませたな？

私に無様に命乞いをする心の準備はできたか？」

煽るように来る小岡の問いに、竹流は自然と諦めの笑みが浮かんでしまうのだった――

## 狩人と王様 1

「ほら、逆撫でてきた」

殺意の籠った瞳を向け、感情が入っていない笑みを浮かべながら「陰」のアーチャーは矢を腰の矢筒から取り出して弦にあてる。

彼の殺意を感じ取るまでもなく、「陽」のアーチャーが背中の矢筒から矢を取り出した。

「おいおい、仲良くしようぜ?」

オレア、さつきも言ったがアンタみたいな人が好きなんだ」

「ならさつきも言ったけれど。」

僕は君の事が嫌いだ、僕の神経を逆撫でてくるんだからさ。

確か……ウイリアム・ゲスラーとかだっけ?

ごめんね、アンタ嫌いだから名前忘れたよ。ちなみにボクが名前を忘れたのは韋駄天クソ野郎の二人目だよ」

「なんだ、オレのことめっちゃくちゃ好きじゃねえか!!」

歯を見せながらニツカリと「陽」のアーチャーが笑む。



その瞬間、二騎のサーヴアントによる開戦の火蓋が開けられた。

最初に仕掛けたのは笑みを消し去り、冷徹な顔となった“陰”のアーチャーだった。彼が矢を放つと、矢が分身して先程同様、無数のやとなり“陽”のアーチャーを襲う。

「おいおい、土砂降りだなあ」

陽気に笑いながら、“陽”のアーチャーがボウガンを構えると、ユースタス達へと視線を向けた。

「マスター、二歩後ろ。」

コンラート、アンタは左に三歩

ランサーは心で決めな」

ニカツ、と眩しい笑みを浮かべて“陽”のアーチャーが指示を送る。

彼の指示に従い、ユースタスは二歩下がりコンラートは左に三歩進む。

そして、“陽”のアーチャー自身はそのまま前へと悠々と歩を進めた。

矢が飛来する。しかし、ちょうど“陽”のアーチャーの言葉通りに移動したユースタス達は矢に刺さることなく済んだのだった。

「へえ、全ての矢の落ちる場所を予測したのか。

それで、マスター達をそこに回避させたワケだ。……ダル、こんな熟練を相手にしなきゃダメなわけ？」

「陰」のアーチャーが気に食わなさそうに「陽」のアーチャーを睨む。

そんな「陰」のアーチャーを、「陽」のアーチャーは自信満々の笑みを浮かべながら訊ねたのだった。

「そんな隙だらけでいいのかい、王さま」

「陰」のアーチャーの隙を「陽」のアーチャーは見逃す事無く即座にボウガンの矢を射出する。

「しまっ!?!」

隙だらけの陰のアーチャーは胸部に矢が刺さり――

「なーんてね。そんなヒョロっこい矢に当たるわけないだろ」

否、それは「陰」のアーチャー自体ではなく。

宝具か、スキルか。何れかの能力で生み出した彼の残像だった。

「お、西洋の王さまと思っただけどなんだ。

アンタまさかジャパニーズニンジャか?」

「は、あんな地味なヤツらと一緒にしないでくれるかい?」

「なんだ?　じゃあやつぱりアンタ、王さまなのか?」

「答える義理なんてないだろう?」

「ここで死ぬ奴に身分を明かすほどボクも酔狂じゃないんだ」

“陰”のアーチャーがそう言うのと、不意に彼の姿が消えた。

ほかの三人が音で位置を探ろうと集中し、周囲を警戒する中、“陽”のアーチャーは突如姿を消した“陰”のアーチャーに「色んなことできんだなあ」と感嘆の声を漏らした。

「王サマと思っただけど……なんだ、カミサマみてえだなアンタ!!」

『あんなヤツらと一緒にするな。』

……ホント、つくづく人の神経を逆撫でするなアンタ』

言葉と共に、矢が送られる。

それを弓で打ち払い、“陽”のアーチャーが周囲を見渡した。

「あれ、もうドバーってやんないのか?」

アトラクションみたいで面白かったんだがなあ」

『しない方が魔力の効率がいいなって思ってたんだよ。』

ちようど、マスターも別途で魔力を使ってるみたいだしさ』

「なあんだ、残念だぜ。」

カッコイイからもっと見たかったんだがなあ」

心底残念そうに“陽”のアーチャーが肩を竦め、わざとらしく溜息をつく。

その瞬間に、正面から矢が放たれる。

“陽”のアーチャーは、その矢は狙いが自身でないことを察知し、強かに笑った。  
「成程、競争か。」

「アンタがマスター二人を射抜くか、オレがアンタを射抜くか」  
『ハハ、理解出来た？』

遊びに付き合う義理はないと察したからさ、全力で殺しに行くよ』

再度、矢が放たれる。

先程と比べ、速度は格段に上がっていた。

魔獣か何かの影響か。“陽”のアーチャーが推察する。

その矢は、“陽”のアーチャーを通り抜けたが陽のランサーによって阻まれ、切り払われた。

「お荷物かと思ったけれど、そうでは無いみたいだね」

“陰”のアーチャーが煽るように陽のランサーに声をかける。

“陰”のランサーは一言、

「そう言う貴方こそ、捨てられた荷物の様に見える」

それだけ、“陰”のアーチャーに告げた。

その言葉を聞き、彼は静かに。

怒りを孕んだ表情で、“陽”のランサーを睨んだ。

「粹がるなよ。黒人風情がいつちよ前に騎士の格好しやがって。

……二人とも、ボクの神経を苛立たすのが得意なようだな」

言葉と共に彼が姿を表す。

そして――

「宝具を一個だけ使ってやるさ。

お前達に相応しい、無様な死に顔を浮かべれる宝具をな」

――彼の周りに、膨大な魔力の渦が発生するのだった。

## 狩人と王様 2

「どうやら琴線を引いちまったみたいだな」

「申し訳ないアーチャー、少々煽りが過ぎたようだ」

「気にすんなよランサー。」

お前さんは果たすべき役目をやったんだ。

これで相手の宝具を引きずり出してやったんだ、オレとアンタは宝具を使わずにな!!

……………いやまあ、オレは昨日の時点でバレてるがな!!!」

陽気に笑い飛ばし、*「陽」*のアーチャーは目の前の敵を見据えた。

敵の膨大な魔力の渦。

ソレは、*「陰」*のアーチャー自身ではなく矢へと注がれていた。

「ランサー、*「ここ」*が踏ん張り時だぜ。」

お互いのマスターを死なせねえように頑張ろうや!!」

「そんなダサイ真似はもうしないさ。」

その代わりお前らに直接ぶち込んでやるよ。

喜べ、下民共め」

矢尻を弦へと当て、矢を引いて。

「陰」のアーチャーは、自身の首飾りを煌めかせながら唱えた。

「光明を司る神の加護賜る。この矢、この一撃は神速を射抜く、」

光明得し鍍金王の矢《アポローン・トロイ》

方角を天へと変え、彼が矢を放つ。

その矢は天高く飛び、見失った。

しかし、「陽」のアーチャーはどういった宝具なのか、それをランサーと共に予測してみせた。

「コレ、狙いは多分ランサーだな」

「ですね。……しかし」

続きを言おうとした直前、矢が上空から刹那よりも速く、ランサーの腕を射抜いた。

「——やはり、疾い」

「躲すことも出来ないの？　　ダッサ。」

朝じゃなくて良かったね、朝なら今頃は腕に刺さるだけじゃなくて身体が微塵になつてたよ」

笑みを浮かべ、「陰」のアーチャーが「陽」のランサーを煽る。

しかし、騎士たる彼にそのような煽りは通用しないのだった。

毅然とした態度で彼は、臆することなく「陰」のアーチャーに言葉を返した。「夜に満足に力を発揮出来ないのは残念だ。

こんな、羽虫の如し矢で何度も射抜こうとも意味が無い。

現に、今のは私の鎧に刺さっただけで私個人に怪我すら与えていない」

「肩から血出てるぞ、強がるなって。

それに—— お楽しみはここからさ」

そういい、「陰」のアーチャーが姿を再度消す。

「あ、それも使えるのか」

「アポロンの加護を舐めちゃいけないさ。

……前世は射抜く事だけだったけど、この世に現界すると姿も消せると知った時は嬉しかったね」

言いながら、天高く再び矢が飛ぶ。

次は「陽」のアーチャーの肩に深く突き刺さった。

肩に刺さった矢を見て、「陽」のアーチャーがはたと首を傾げた。

そして、素朴な疑問を見えない「陰」のアーチャーへと訊ねるのだった。

「なんですぐ殺さないんだ？



オレア、アンタが姿見えなくても位置は把握してるぜ？」

“陽”のアーチャーの言葉は森の中を響き渡る。

木の上のいた、姿を消していた“陰”のアーチャーは“陽”のアーチャーの言葉を信じず、嘘だと断定したのであった。

——分かるはずがない、宝具を使わせない為のはったりだと。

戦闘に関しては素人な彼だからこそ出してしまった、間違った判断が勝敗を分かるところになるとこの時は知らないまま。

『嘘だと思っけど答えてやるよ。』

さっき言った通り、アンタ達には無様に死んで欲しいのさ。

顔は勿論、身体も至る所に矢を刺して手も足も出ませんでしたって風にさ』

「なるほどねえ……」

“陽”のアーチャーは頷きながらボウガンを高高く掲げ、一発を射出する。

西部劇の打ち合い前のコイントスを彷彿とさせるかのようなボウガンの射出に“陰”のアーチャーは姿を消しながらも眉を蹙め、男の言葉を待った。

それを察した男は要望通りに言葉を紡ぐのだった。

「今のボウガン、アレが地面に着くまでにアンタに一発当ててやるさ。

頭の上のリングゴを射抜くよりも簡単だぜ？」

二カリと笑う。『陽』のアーチャー。

陽のアーチャーの言葉を、『陽』のランサーは信じ。

主であるユースタスも当然、信じた。

アグリツパは、信じた訳では無いがそうすることは可能なだろうと判断した。

陰の弓手——彼は、その言葉を激昂と共に否定した。

『冗談も大概にしろ！ お前のような神の加護も貰ってないようなヤツが、そんな

神技を出来るわけがないだろう!!』

天高く走っていたポウガンが勢いを失い、地面へと墜落を始める。

そのタイミングで、『陰』のアーチャーが淡々と二発目の準備を始めた。

そう。常任ならば、並の英霊ならば出来ないであろう。

しかし、この男の名はなんだ？

救国の英雄、ウイリアム・テル。

自身の宣言をしくじめるような真似を、彼はするはずがない——

「アーチャー!!」

ユースタスが大声で彼の偽名を叫んだ。

それは、「やってしまえ」と言う意味を含んだ信頼の後押しだった。

その信頼を受けて男が笑みを浮かべる。

!!!!

そして、陰のアーチャーを煽るかのように彼自身が目を閉じたのだった。  
「知ってるか、陰のアーチャー。」

……神の加護がなくとも、伝説の武器がなくともお前の言う神業はイケるぜ？  
その秘訣はな」

矢が降り落ち、木よりも少し高い地点で陽のアーチャーがボウガン放つ。

ボウガンは一直線。姿を隠している筈の陰のアーチャーの心臓へ目掛け飛んでいた。

「なッ————にいい!？」

慢心していた彼は、呆気にとられて回避が遅れた。

その僅かな誤差が災いとなり陰のアーチャーの肩に矢が突立つのだった。

屈辱と苦痛、そして憤怒に顔を歪めて陰のアーチャーが陽気に笑みを浮かべる男を睨んだ。

睨む陰のアーチャーをと目を合わせ、陽のアーチャーはただ一言。  
「心で撃つことさ、パリス」

そう言い放ち、既に準備していた次の矢を放つのだった——

## 神父と禁忌者

“陽の”アーチャーが“陰”のアーチャーを射抜いた頃。

場所を移して和歌山教会の外にて、“陰”のアーチャーのマスターたる霧島 竹流が小岡による一撃を必死に回避していた。

小岡による一撃は凄まじく重く、鋭く。

混凝土コンクリートの地面を容易に殴り砕く様を竹流が目にした瞬間、彼の中で小岡を殺す、ということから小岡から逃げる事へと思考を転換させた。

（老人一人だと油断した……!!      ランサーを別場所に待機させたのは非常にミスだった!!）

ルーラーが別行動を取っていると把握していた竹流は、直ぐに済むと思い“陰”のランサーを別場所へと移動させていたのだった。

その結果が、今の無様な行動である。

「どうしました、熊のような獰猛な態度から一変して仔犬のように逃げ一辺倒となつておりますが」

「爺が凶に乗りやがって———！」

言い終える前に、彼の眼前に一瞬で現れる小岡。

そのまま拳よりも遙かに上回る、脚による一打を繰り出す。

三日月のようなシルエットで繰り出されるその一撃は、三日月のような美しさはな  
く。

まるで、死神の鎌のような脅威が竹流の胸中にこみ上がってきた。

「チツ……!?!」

両手を交差させて、急所だけは隠すようにする竹流。

その両手を、いとも容易く小岡が砕いて蹴り飛ばす。

ボールのように容易く空を飛び、地面に転がり竹流が女神像へと衝突する。

砂埃が竹流を包みこむ。

「……やはり、年老いましたな。」

いやはや、歳はとりたくない。しかし、老いて死ぬこともまた人の流儀、嗜みですな」

カニバリズム  
「強化」

小岡が一人呟く中、竹流が詠唱を唱えた。

その瞬間、彼の身体にある回路が煌めき、魔力が迸った。

「おお、両手は砕かれているはずですがまだやるのですか？」

驚きを隠さない小岡。

その小岡の問いをいや、と否定して竹流がはつきりと、

「逃走する。今のお前と闘争こうしあひをしても俺が死ぬのは明白だからな」

「正解ですが……貴方はそもそもを間違えてしまっている。

そもそも、私が逃げるからといって貴方をそう易々と見逃すとても？」

「いいや？」

だから、お前を殺して逃げる事にするよ」

小岡が再び竹流の眼前へと迫り、蹴りを繰り出す。

その鋭い蹴りは、強化された竹流がギリギリ回避出来た。身体を捻らせて、服の胸ポケットを掠らせた竹流はそこから空を舞う一粒の丸薬を跳んで飲み込む。

小岡が拳を振るう。

しかし、その拳は竹流の蹴りで相殺されるのだった。

お互い、後ろへと下がってしまいなから。

竹流がすぐさまに服の内側のポケットから球体型の機械を小岡へと投げつける。

それが、爆弾だと見抜いた小岡はすぐにさらに距離を空けた。

「ハ、莫迦が」

嘲笑を浮かべ、竹流がスイッチを押すと球体が炸裂し、中からパチンコ玉が無数に飛び出す。

予想していなかった小岡はその身に何発かパチンコ玉による一撃を喰らうも、平然と竹流を見るのだった。

「パチンコ玉……ほう、やりますな。」

流石は歴戦の魔術師殺しという訳だ」

「散々お前に弄ばれたけどな。さて、第二ラウンドといこう」

内側のポケットから、更に球体を取り出して小岡へと放り投げる。

小岡は直ぐに後方へと下がるが、先程の二の舞ということは彼自身がよく分かっていた。

「いいのかそんな調子で!？」

凶に乗った竹流が更に起爆装置のスイッチを押し、爆破させる。

爆風共に飛来する球体の破片や、弾丸めいたパチンコ玉。

それらを前に小岡が胸のロザリオの下部部分を持ち、それを下方向へと引つ張る。

すると、仕込み刀が現れ小岡が涼し気な表情で自身にやってくる玉の全てを切り払った。

「……いくらなんでも出鱈目が過ぎる」

竹流が毒づく。

ニコニコと温和で、場違いな笑みを浮かべながら小岡がゆつくりと竹流に近付く。

「さて、どうします？」

実の所、私も疲れました。

貴方が撤退してくださるなら私はもう何もしませんが」

「……その手にある預託令呪を全て寄越したら直ぐに消えるさ」

小岡の和平交渉は一瞬にして決裂した。

残念そうな表情を小岡が浮かべながら、彼は地面に拳を突っ込ませ、中からロケットランチャーを取り出した。

RPG、まだ一定の需要のあるその兵器を取り出し、小岡がニコリと笑みを浮かべた。

「ならばこちらで遊びましょう。」

既に防音の結界は張っている。良かった良かった」

「どうなってやがるこの教会は……!？」

巫山戯るのも大概に——!!」

口を塞ぐようにロケットランチャーが放たれる。

湿気って使えない、等といった甘い予想は竹流はせずに直ぐに回避する。

後ろの門へとRPGの弾丸が当たると見事に爆発し、門が跡形もなく砕けていた。

「次はこっちだな」

小岡が咄くと地面から小銃を取り出した。



A K ー 4 7 最も人を殺したその銃を片手に小岡はニコリと、再び場違いな笑みを浮かべた。

「早く撤退なさると嬉しいのですが。」

私とて、この教会を傷つけたくは無いので」

「……ならば、預託令呪を寄越せ。」

俺も引けないんだ」

小岡の要求を再度、竹流が断る。

笑みが消え、殺意の籠った視線で老兵は小銃の銃口を竹流へと向け、弾を射出させた。

## 四人と二人

“陽”のアーチャーがボウガンを射出させる。

“陰”のアーチャーは敗北を悟り、呆れて乾いた笑みを零した。

「だっさ……結局、私は半端な存在というワケだ」

自虐し、そのまま飛来するボウガンを待ち構える。

彼に刺さる————かに思われたその矢は突如として横切った巨大な円盾によつて防がれた。

“陰”のアーチャーが飛ん出来た方へ視線を向けると、そこには味方である“陰”のバーサーカーがいた。

「チーム戦の賜物だな!! ガハハ!!」

「ういーすアーチャー、助けに来たぜ!!」

“陰”のバーサーカーの背中にしがみつきながら、ひよつこりと彪斗が顔を出す。

二対一から二対二へと変わった“陽”のアーチャーは、顎に手を当てて“陽”のランサーに訊ねた。

「なあ、アンタの宝具って今は使えないんだっけな?」

「ええ、私の宝具は使えません。」

……使えば周囲を巻き込んでしまうのです」

「いや、ボクはもう何もする気がないよ」

「陽」のアーチャーとランサーの会話に、敗北者たる「陰」のアーチャーが割って入った。

「負けたんだ、ボクは。」

これ以上やっても恥の上塗りさ。

そんな情けない真似はしてもいいけれど、座に還ったら兄に怒られそうだし辞めとくよ」

ゆっくりと起き上がり、「陰」のアーチャーは衣服に着いた土埃を叩き落とす。

「アーチャー、陰の二騎を相手にしなくていいのかい？」

「バカ言うなよコンラート。」

「二対二になったら守るもんがいる時点でオレらの不利さ」

「分かっているようだね」

満足気に頷いてコンラートが「陰」のアーチャーに視線を向ける。

「ひとまず、ここはこちらの勝ちでいいかい？」

「優位に立った途端調子に乗ってくれなきゃ。」

……まあ、いいさ。今回は負けを認めてやるよ」

「ぬ？」　我々は逃す気など毛頭ないが？」

話が決着する。その時に「陰」のバーサーカーが宣言する。

「陰」のバーサーカーの言葉に「陽」のアーチャーが納得げに頷いた。  
先ず、そもそも考えてだ。

逃すことにメリットなど無いというのに、助太刀に來た彼らが逃すなど有り得ないと  
ユースタス共々、考えていた。

『どうする、マスター？』

『……まあでも、この場合は容易に突破出来るだろう』

魔力を通じた通信回路でユースタスが確信を持ちながら宣言する。

その後、ユースタスは果敢にも「陽」のアーチャーと「陰」のバーサーカーの前に  
割って入るのだった。

「いいのか」陰「のバーサーカー。」

そちらのアーチャーはもう何もする気がないとはつきりと申している。

それに、「陽」のランサーもまだ宝具を隠し持っている。

「陽」のアーチャーもだ、二対二と思つているところ悪いが二対一なのだよ」

「む、そうかそうなるのか。」

どうする彪坊、ここは退くか!!」

「そだな、竹流おじさんがアブねえしそっち助けに行つた方が有意義だな!!」

ユースタスの言葉に二人はあっさり呑み込まれた。

一触即発、そう思っていたコンラートは思わず呆れて笑を零してしまったのだった。  
(まさか二対一になると考えてなかったのか?)

狂化のスキルがあるとはいえ、流石に考えていると思つていたのだが。

それにしても、やはりバーサーカーのマスターである霧島 彪斗はマヌケというか……ん?)

胸中で呆れていたコンラートだが、彪斗の言葉に引つかかる部分があり思わず訊ねたのだった。

「待つた、竹流クンがピンチとはどういうことだい?」

キミは魔術を覚えてない、そう資料には書かれていたが」

「え、雅おじさんが裏切つた後に覚えた。

独学だからちよつと困つたけど、爺ちゃんの使用魔をジャックするくらいは出来るよ  
うになつたぜ」

「話は変わったねえユースタス」

「……そうだな」

ユースタスとコンラートは、ここで足止めを選択した。

理由は二つ、竹流がピンチという言葉。

竹流は爆弾のスペシャリストというのは、魔術協会でも知られていた。

その男が、早期に死亡してくれれば爆弾によるアジトの奇襲を未然に防がれて得だら。

それともう一つは、彪斗の将来性を危惧してのことであった。

義隆とて、階位という魔術師の中でも上澄みの地位を得た男。

そんな上澄みの男の使い魔をいとも容易く、それも独学で視界をジャックしてみせた彪斗に恐れを抱いたのだった。

「あ、やつばり……こうなった？

アーチャーは竹流オジサンの方戻った方がいいよー」

軽い調子で彪斗が言う。

彪斗の言葉に、「陰」のアーチャーが頷いて姿を消した。

「まあ、爺ちゃんの使い魔の視界を奪うとか無理なんだけどさ。

けれど、アンタらこれで戦うことを選んだろ？

さあて、やるかあバーサーカー!!」

「ガッハッハッ!!」

さつすが彪坊よ、この展開を予想してたワケだな!!」

「アーチャー!!」

「ランサー、戦闘体勢だ!!」

ユースタスとコンラートが二騎に命令し、命を受けた二騎が即座に武器を構えた。

二騎の行動に、彪斗が袖から宝石を出した。

「ボンツ」

その言葉と共に、宝石が強く煌めき全員の視界を奪う。

「閃光弾……!!」

「コンラート、ランサーを傍に——」

「遅いぜ、アンタら」

ユースタスの背後に、硬いモノが当たる。

それを銃口と理解するのは一瞬だった。

あまりにも早すぎる彪斗の行動に二人は額に冷や汗を滲ませたのだった——

## 有耶無耶と密告

「……速いね、もしかしてボク達寝てたかい？」

「寝てはなかったぜー？」

あ、その二体に先に言っとくけど動いたら撃つからそのつもりでな」  
「今、撃つつもりはないのかい？」

コンラートが訊ねると、彪斗は薄ら笑みを浮かべたまま答えるのだった。

「んー？」

オレが今から出す取引に応じりや撃つつもりなんてないぜー？」

コツコツと、背を銃口で叩く。

玩具を扱う子供のような事をする彪斗に、ユースタスとコンラートは、無邪気な子供を連想させると共に、不気味さを感じたのだった。

その二人の気持ちを察さぬまま、彪斗が二人に要求を投げるのだった。

「まずひとつ。」

オレに令呪をよこせ」

淡々と、彪斗が言う。



自身たちの令呪の譲渡、それは相手に戦力を与えてしまう事だった。わざわざ、そんな事態を招いてまで命が惜しい二人では無い。

しかし、どちらにせよ二日目にして二騎のサーヴァントを無くす羽目になることになる。

「……ちなみに、NOと答えたら？」

「分かりきったこと聞く必要あるか？」

彪斗がこの場でユースタスの背中に銃口を突き付けたのは、正解であった。

ユースタスは彪斗と同じく宝石魔術の使い手であり、ユースタスも同じく目くらましの魔術を仕込んだ宝石を持っている。

彪斗は気付いていないが、獣じみた直感でユースタスを標的と定めたのだった。

「……いいや、答えなくてもいいよ。」

そんな分かりきったことはね

冷や汗を流しながら答えるコンラート“陽”のアーチャーは彪斗を射抜こうにも彪斗がユースタスの後ろへ完璧に隠れているためそれは不可能であった。

(……この坊ちゃん中々やるねえ)

内心で賞賛し、そして脳裏ではどうするべきかを考える。

霊体化して接近……それは当然論外である。

彼の傍らには巨大な“陰”のバーサーカーが控えている。

自身の行動などそもそもその巨人に見られるし、霊体化の時点で彪斗が撃ち抜く事を選択するのは明白であった。

“陽”のランサー、彼も同じことを考えているためか動こうともしていない。

『マスター、良いこと考えたぜ』

『なんだ、アーチャー？』

『令呪を一旦譲渡しな。』

『したら、アイツの事射抜いてからアンタと再契約するさ』

成程、とユースタスが納得する。

本来ならばそのような要求をしてきた時点で気付くべきであったが、彪斗は彼らの仲を知らない。

そして、資料で大半の魔術師はサーヴァントを道具としてみている、と頭にある。

彼の中で、自然とサーヴァントとマスターの仲は基本、そういうものだとなんて思っていた。

陽のアーチャーの言葉に背中押され、ユースタスが彪斗に返事をするのだった。

「霧島彪斗、その要求を我々は飲もう——」

プルルル、プルルルと。

ユースタスが要求を呑む、その矢先に。

彪斗のポケットから携帯の呼出音が鳴り響いた。

銃口をユースタスに突きつけたまま、彪斗は携帯を取り出して応答する。

「はいはい。オレだよー」

『彪斗、今回は良き立ち回りであったが……』陰 “のアーチャーを竹流の元へ行かせたお前の負けだ。

自身を見逃すことを条件にとつとソイツらを解放せんか』

「え、爺ちゃん?!?!」

彪斗の電話相手が誰か<sup>義隆</sup>を悟った二人がピクリと眉を微動させた。

『よくよく考えろ、その二体がお前と契約し直そう。』

そも、お前の魔力量では事足りんだろう。

恐らくだが、お前では一分持てばいい方だろうよ。

それに加えて、予備電池のホームクルスは私の元に来ないと繋げれん。

そこか儂<sup>わたし</sup>の元へ来るのなら最短で五分は必要だ』

「……………え、マジで無理じゃん」

『一手間違えたな戯けめ。』

大丈夫だ、その二人も見逃してくれるさ』

「おいおい、ボクらが逃がすとしても言うのかい？」

随分と舐められたねえ」

『背中に何を当られているか忘れたか？』

義隆の言葉に、二人が笑みを浮かべる。

彪斗に突き付けられている拳銃を二人が忘れていた訳もなく。

降参の意を浮かべた笑みを、二人は出していたのだった。

「了解したよ。今回は我々の負けだ」

『分かれば良い。さあ彪斗、二人から離れろ』

義隆の言葉に、彪斗が大人しく従い銃口を離す。

ユースタス達も大人しく、彪斗と『陰』のバーサーカーから距離を開けるのだった。

『よし。流石は同期の友だ。』

……少し、世話を焼いてやろう。貴様ら陽の中に裏切り者がいる、探し当てる事だな』

「なっ……!!?」

「裏切り者だつて!!」

まさかミヤビか——」

『ああ、残念ながら雅では無い。』

頑張つて当てることだ。さて、さらばだ二人よ。また会う日を楽しみにしておるぞ』

通信が切れる、その直前に。

『ああ、言い忘れた。』

お前達の居所も掴んでいる。彪斗が十分以内に戻ってこなければ居所を竹流に伝えさせてもらうぞ』

最後に、念押しをして義隆が通話を切った。

通話が切れ、彪斗がそそくさと背を向けながら二人に、

「爺ちゃんの言うことは絶対だから見逃したけど次は殺すからな!!」

そう、負け犬じみた発言をして、その場から離れたのだった。

「ひとまずは生存おめでとうコンラート」

「そっくり返すよジャック。」

しかし、認識を改めようか。霧島彪斗……彼は脅威だ。

まったく、ミヤビクンは中々に面白い冗談を言ってくれる。リテラシーの見つめ直しの機会でも与えてくれたのかな」

「同じくだ。」

……して、コンラート。裏切り者がいるという義隆の発言だが——

生存を祝い合い、二人が義隆が言っていた裏切り者、についての話し合いを帰路につきながらするのだった。

## 聖女と偽物

“陽”のアーチャー、ランサーと“陰”のバーサーカーの睨み合いが終わり、時を同じくしてルーラーと“陽”のアサシン達が戦うある民家の中。

暗闇の中、迫り来る石のナイフを杖で打ち払う、それが作業のように行われていた。彼らは決して、ルーラーに近付かれないように距離を空けてナイフを投擲する。

二畳程の狭い部屋ではある。

しかし、ルーラーを除き“陽”のアサシンは十人という大人数がいた。

どうやって広く移動出来るスペースを確保しているのか。

それは、“陽”のアサシン達は関節を普通の人間では出来ないような曲げ方をしてスペースを確保していたからだった。

一人はまるで岩のように丸くなったり、一人は三角の形に変化させていた。

(……あの関節の曲げ方、どう考えても人では無い。けれど、彼等は死徒でも魔でもない。まさか、わずかに数代にして人の進化、その分岐に至ったというの……?)

脳裏に疑念が生じながらも、彼女が迫り来るナイフを打ち払う。

「……後で考えるか。先ずは貴方達をどうするか、ね」

「食事なら、止めないし止めれない。」

お前達は食欲、睡眠欲、性欲を抑えられないだろう？

我々はそれと同じ原理だ、お腹が減ったから食べる。

ただ、食べる物が違う。それだけだ」

「考え方はそれぞれだもの。私も許容したい、けれど今回はやり過ぎなの。」

……控える、と答えてくれたら有難いのだけだ」

ルーラーの言葉に「陽」のアサシンはニタニタと反省の色の無い笑みのまま答えた。

「無理だ、不可能だ。」

私たちは人を喰らい続ける。でなければ死ぬからな」

「ええ、知ってる。」

——だから、時間稼ぎさせて貰ったわ」

刹那、割れた窓から炎が侵入しルーラーと「陽」のアサシン達を包む。

青黒い炎、ソレを放ったのはその炎が答えを表していた。

ポロポロの鎧兜を身にまとった、髪の毛が伸びた幽鬼。

「陰」のアヴェンジャー、彼がその場へと現れたのだった。

「戦場ハ、ココカ。」

……シカシ、オンナ子供に手ニカケル趣味ハ無イ。

ソコノ男、才前一人デ済マソウ」

(コイツはサーヴァントか。……しかし、マズイ)

「ラン、ラン、ラン。」

逃げよう家族達。ここは、不利だ」

“陽”のアサシンは家族に告げ、敗走へと行動を移す。

しかし、それよりも早く。

“陰”のアヴェンジャーは“陽”のアサシンとの距離を詰めて、腰の刀を抜いた。

「逃シハシナイ」

「チイ……ッ!!」

石のナイフを、接近したアヴェンジャーへと投げる。

ナイフは眼球に当たり、アヴェンジャーの視界を奪った。

アヴェンジャーが思わずよろけてしまう、その隙を逃さず“陽”のアサシンは即座に炎が哮る中を疾走しようと足に力を込め、床を蹴った。

「甘いわね、ソニー・ビーン!!」

しかし、その逃走は当然許されなかった。

ルーラーがすぐに陽のアサシンへと、洗礼詠唱を放つ

——!!

その詠唱は、確実に陽のアサシンを捉えていた。



あととは当たり、本人を足止めさえすればそれで完結していた。

しかし、陽のアサシンの背後に逆十字架を模した土塊が聳え、彼を護った。

「……………なんだ、なにが」

『今のうちに逃げろ、ソニー・ビーンたち。』

ここは、僕わたしのサーヴァントが引き受けよう』

何処からともなく、声が反響する。

その直後、玄関のドアがガチャリと開く音がした。

ガチャリ、ガチャリと金属音を鳴らしゆっくりと迫る。

それと同時に、コツコツという音が遠ざかり陽のアサシン達の足音が遠くなっていた。

目の潰れた陰のアヴェンジャーは即座に炎を放とうとしたが、心の目で陽のアサシンが自身の周りを子供達で囲んでいるのを認識し躊躇った。

陽のバーサーカーとの邂逅のせいかな呪の効き目がかなり薄くなり、彼の高潔な魂が少し戻ってきた為だろう。

それは陽のアサシンを逃がすという、むざむざとこの戦いに巻き込まれただけという結果で終わってしまうのだった。

そして。ルーラーは近付く足音に警戒するべきだった。

しかし、先程の声はアヴェンジャーにも、彼女にも入っており。彼女は、ある確信を持って悲痛な顔を浮かべていた。

「……………貴方、なんで……………」

「女、来ルゾ！」

アヴェンジャーの怒号が聞こえたがもう手遅れだった。

黒い炎が壁を溶かし、そこから一体のサーヴァントが姿を現す。

全身を漆黒の甲冑で包んだその男の名を、裁定者としての特権を持つルーラーはその瞬間に看破した。

「エドワード黒太子……………貴方のマスターについてなのだけれど」

「トツプシークレットだ、すまない麗しき聖女。

そして高潔さを取り戻しつつある旭の將軍よ、主があ言っていたが私に戦闘意思は無い。

私はただ、あの気狂いな屍食鬼を救命に來ただけ故な」

その瞬間、彼の身体は青白く光り輝いた。

アヴェンジャーは先日瞬間移動だと理解すると即座に、コンマの速さで弓を射た。

しかし、その矢は当たることなく陽のライダーは姿を消したのだった。

「まったく……………ほんと、手のかかる子だわ」

杖にヒビが入ったのを彼女は自覚していない。

それほど強い怒りの意思を込めた瞳で、空を睨んだ。

「聖杯が私を呼んだ理由がわかったわ。」

……そうね、確かに今回のルーラーは私がふさわしい」

一人納得した様子を見せたルーラーは、深呼吸した後に、アヴェンジャーの方へ振り向き軽く頭を下げた。

「感謝します木曾義仲。」

……なぜその姿なのかは分かりませんが、この御恩は必ずお返し致します」  
「礼ナド不要ダ。」

ソレヨリモ、貴様ハ銀ノ髪ヲシタ美シイ女ヲ知ラナイカ？」

「銀髪の……？」

「すいません、私は知らないです。」

しかし、和歌山駅の方で二騎のサーヴァントが衝突しています。  
一度、向かわれてみては如何でしょうか」

「デハ、ソウスルトシヨウ。」

サラバダ、女ヨ」

「そういえば、打算だったので気になりましたが。」

貴方は何故、私の事を助けてくれたのでしょうか？」

声の聞こえた方を振り返ると、アヴェンジャーはさりと答えたのだった。

「襲ワレテイル女ハ助ケルベキダト、知ツテイルカラダ」

それだけを言い残し、彼は粒子となってその場から姿を消した。

「おかえり、エドワード」

自室にて。令呪によって帰還した陽のライダーの帰還を祝う裏切。

“陽”のライダーは、凛々しい表情のままその整った容姿を外へと向けて訊ねた。

「他の者の介入はしなくてもよろしいので？」

「いいよ、わたし僕が欲しいのはアレの数だ。」

バーサーカーの方はどうせ、他のサーヴァントが介入するだろうか？」

透明のプラスチック製のコップに水を溢れるギリギリまで入れて、裏切はそれを四割ほど飲むと、“陽”のライダーに渡した。

「前回の聖杯大戦。その優勝者は霧島義隆だ。」

彼は黒——ユグドミレニアの陣営として参戦したが、“赤”のサーヴァン

トをほぼ壊滅させて勝利へと至る直前に裏切り聖杯を破壊したと嘘を着いた。

そして、大聖杯に溜まっている魔力量が今、僕が残した水の量だと推測する」

「……………」

第三次から溜まっている魔力量を考えると少ないのでは？」

「そうだ、少ないんだ。」

まあそもそも、魔力が溜まっているならば彼は当初からの目的だったろう『魔術師の根絶』が達成しているだろうけれどね」

「……………」

“陽”のライダーが裏切の言葉を傾聴する。

彼はただ直感的に、『何を言いたいのか』を悟り、その答え合わせを待っている状態となっていたからだった。

“陽”のライダーの思考を見抜いた裏切は嬉しそうにはにかみ、続けた。

「優秀なサーヴァントだ、貴方は。」

そう、あなたの想像通りです。

つまり、彼は聖杯を使いサーヴァントをあと一騎隠している可能性がある。

全ては、彼の計算の中だったのでしよう。

彼は魔術という概念を消すには足りないかと悟り、冬木に次ぐ龍脈を持つこの土地を選

び、聖杯大戦の準備を秘密裏に進めた」

「……ちなみにだが、貴方はその老兵の『黒』の時代のサーヴァントは知っているので？」

「さあね、でも最終局面でいたサーヴァントなら知っているよ。」

魔術王の父ダビデ。施しの大英雄カルナ。日本のスーパーマン坂田金時。源義経の重臣武蔵坊弁慶。

……確か、この四騎だったな」

「まあ、この四騎が来ても僕わたしの敵では無い」

持っていたコップを握り潰し、彼は意気揚々と陽のライダーに宣言する。

「この聖杯大戦、僕達わたしが勝ち。」

そして君と僕の願いを成就させよう」

「ええ、メシアよ。」

貴方のお力添えになるよう、私は尽力致そう」

“陽”のライダーが頷きながら、姿を消す。

裏切は、そのまま部屋を出てバエルの部屋へと向かうのだった——

## 聖職者と魔術師

時を同じくして竹流と小岡の戦闘へと場面は移る。  
移る、と言つてももう決着は着いていた。

黒鍵の刀身をす首筋に当てられている竹流と。

竹流に黒鍵を当て、見下ろす形となつた小岡。

そう、小岡の圧勝であつた。

絶体絶命の状況の中、それでも竹流は殺意の込めた瞳で小岡を睨みつけ、意思までは屈服していないと意思を見せた。

「最後通告です。

大人しくさればこの場は見逃しますよ竹流さん」

「……………断る。言つたらう、俺も後がないつてな」

死が迫る、それでも。

竹流は小岡に屈しなかつた。

「残念です。ここで人を殺す事となつてしまうのは」

逆十字の刀を振るう。

竹流にとっては振り子のように緩やかに見えたが、その速度は本来の彼では目視することが出来ないほどの速さであった。

竹流はこの後の代理のマスターはどうなるのか、などではなく。

自身の妹である美華の姿を脳裏に浮かばせていた――

「全く、出来の悪い息子を持つと面倒この上ない」

コツコツと、革靴の音が聞こえる。

竹流はもはや見るまでもなく誰が来たのかを悟り、そして再び死を覚悟した。

小岡は黒鍵をピタリと止め、その男の方へ顔を向けるのだった。

「おやおや、貴方様はこの方の保護者ですか。いつまで経つても子離れ出来てないので  
は？」

「何を言う、儂は基本放任主義だ。今回も、こやつを放置すると我々が劣勢になると踏んで助けに来た迄よ」

黒い外陰を見に包ませ、深々と帽子を被っていたその男は今回の騒動を引き起こした張本人。霧島義隆であった。

「親父……」

「何をしている竹流、などとは聞くまいよ」

呵々、と嘲笑う義隆。



竹流は拳を握り、齒軋りを強くしていた。

「おおかた、預託令呪を奪い我々に配ろうと勝手に企てたのだろうか？」

無言で頷く竹流。

義隆は再び呵々、と笑うと彼の頭を掴み、力を加えた。

まるで万力のような圧力に竹流は涙を滲ませながら痛みを零す。

「ぐ、……………つ、う……………ツ!!」

「浅慮浅慮。そんな頭は不要だろう。」

私が潰してやろう、有難く思えよ竹流」

「ま、待ってくれ……………親父……………!!」

でも、アンタは令呪を使った、から……………ツ!?

もう、のこりは、な———」

「無い、とでも思ったか？」

そして貴様は私が前回の聖杯大戦に参加したのを忘れたか？

……………それに加え、私は過去に開催されてきた亜種聖杯戦争を撒き餌として利用して、

参加者どもの令呪を根こそぎ奪っていた。

系八回。その結果が、全六十画程の令呪だ」

義隆の言葉に竹流が目を見開かせ驚き、小岡は耳を疑うのだった。

それ程の令呪の数ならば、なるほど確かに竹流の行為など不要であった。

竹流はこの先に起こる処罰を頭に浮かべ、自身は無駄であったと絶望する。

「さて、では行くか。」

……この場合は素直に撤退させて貰えるか、老兵」

義隆の問いに小岡は満足気に頷いた。

「ええ、構いませんよ。」

しかし、「この修復をお願いしますか？」

「容易いものだ。」

「遙か遠く、久遠に霧散した記録達よ」

「我が呼び掛けても、返事をしない靄よ」

「代わりに、繋ぎ合わせてこれからを記録したまえ」

義隆が宝石を投げながら唱え終えると、宝石は砕けてしまう。しかしその代わりに荒れたコンクリートの大地は修復され、弾痕刻まれた礼拝堂もその弾痕が消え去った。

「これで良いか？」

ああ、しかし惜しい事をした。

秘蔵の宝石、二十年間我が魔力を込め続けたものが無くなったのだからな」

「でしようね。」

一目見て、あの宝石は特別なものだと思いましたので」  
「呵々、ではサラバだ。」

行くぞアーチャー」

「ハイハイ、分かっていますよ」と

霊体化を解いて、*“陰”*のアーチャーが返事をする。

義隆は彼に竹流を担がせて、教会を後にした。

小岡は二人が消え去ったのを確認して、ゆっくりと座り込み、  
「ふう、疲れた。」

もう少し若ければこれで息切れなどしなかったが」

と、自身の老化に愚痴を零すのだった。

## 夫婦と絆

和歌山駅内。

そこで、組み合うのは二人の男だった。

組み合う、そう言っても形的なもので戦ってはいなかった。

方や陰のセイバーのマスターである霧島切翔。

そしてもう片方はその父である霧島雅。

二人に明確な闘志などなかった。

「戯れか。なら親父、その銃を退けてくれないか？」

「お前が私に対する不満を言うのなら退けるさ」

まるで自身の心を見透かしたかのような雅の発言に切翔は目を丸め、笑みを浮かべた。

（心身ともに、この人には勝てないな）

爽やかな完敗の悟り。

それと同時に切翔は醜く怒りを放った。

「なぜだ、なぜアンタは遊人を連れてってやらなかった!？」

アイツの境遇くらい知ってるだろう、なんで遊人まで置いてったんだ!!!」

その怒りは弟である遊人の為の怒りだった、  
切翔の弟を思つての怒りに雅は表情を曇らせながら答えた。

「単に、どちらかを選べなかった。」

裏切つて、どちらか片方を見殺しになんて出来なかったんだ」

「俺くらい捨てろ、アイツの為なら俺は命だつて——!!!」

「無理だ。それをしたら私の行動が全て無意味となる。」

「ごめん、ごめんな切翔。」

必ずお前達を救う、だから諦めるな。」

私はそれを言いに来たかっただけだ。」

「……さらばだ」

雅が切翔から離れ、東口方面を進む。

もう戦闘をやめて、二人を静観してい、た「陽」のバーサーカー、  
「陰」のセイバーは自身の主の傍へと駆け寄るのだった。

「お話は済みましたか?」

「……ああ、ありがとうバーサーカー」

「滅相もございませぬ。」

……それにしてもあのせいばあは凄まじき力でした。何しろ鬼の血があるこの私に引けを取らぬ怪力でしたので」

「……なるほどな、やはり切翔のセイバーは奴か」

何かを察した雅の反応を、陽のバーサーカーは首を傾げながら尋ねたのだった。

「心当たりが？」

「ああ。しかし今はそれどころじゃないぞ」

「え？」

巴御前が視線を前へ向ける。

そこには、敵対する自身の愛する夫がいたのだった。

「……義隆か？ 意地の悪いことをする。」

せつかく、息子と語らうことが出来たつてのに——！！

「義仲様……」

「……安心シロ、貴様達ト争ウツモリナドナイ」

アヴェンジャーは首を横に振り、戦闘行わない意志を示した。

しかし、彼はその代わりに巴御前の方へとジリジリと近寄って行くのだった。

「……ッ!!」

「動クナ女。私ハタダ、確カメタイノダ」

アヴェンジャーが巴御前の髪に触れ、さりと靡かせた。

……静寂が訪れ、場は緊張で支配された。

そしてついに、アヴェンジャーが口を開いた

「嗚呼、なんて、美しい」

アヴェンジャーから漏れ出たのは、憎みでもなんでもない。

ただ一人の女に謳う愛であった。

呆氣に取られる巴御前をよそに、木曾義仲は。

「ヤハリ、アノ男ハ嘘ヲ憑イテイタ。

女、明日ノ正午ニ私ノ後ヲツケテ入ツタトコロマデコイ」

それだけを言い残し、彼は背を向けた。

どこか恥ずかしげな後ろ姿の彼を巴御前は呆然と見つめていた。

頬を赤く染めるその様は、完全に彼への愛を示す証拠だった。

「バーサーカー、割り切るんだ……と言いたいけれど私もそこまで気知らずではない。

それに、彼にも敵意が感じられない。

しかし、覚悟はしておくことだよ。

いつの日かは君は——」

「ありがとうございます主殿。」

……重々承知しております、それでも。

この思い出は泡沫の夢として、記録させてください」

「ああ、了解した。

覚悟を決めてるなら、甘えなさい」

雅はそう言い、「陽」のバーサーカーを連れて去っていった。

---

可笑しいとは思っていた。

私の死に際に出ていた兵と、彼女の顔は全くと言っていいほど一致していなかった。

それどころか、彼女との記憶こそなかった。

私はあの老獺にそこを突かれ、彼女が私を死に追いやったのだと唆され私は見事に騙されて怒り狂っていた。

しかし

『貴方がどのような姿へと変わろうと、巴は愛しております!!』

その言葉を聞いて違和感を感じ始めた。

顔も含めて、あの女は完全に私に好意を抱いていた。



違和感は、午前中で確信へと変わった。

恐らく、私とあの女は生前に恋仲に近しい間柄であったのだと。

そして霧島義隆、彼は私に嘘をついたと。

「……帰ッタラ、確カメヨウ」

私は姿を消しながら決心する。

彼女は私の何たるかを、知る為に。

## 光と影

「……さて、向こうはよく分からないが行くかセイバー。」

多分、戦いはしないだろうしな」

《陰》のセイバーに声を掛け、切翔が西口方面まで歩く。

こくりと頷き、彼女は青年の後を追う。

「……マスターは何故、弟君を優先なさったのですか？」

「……弟だから、だな」

言葉を濁したのをセイバーは見逃さなかった。

だが、彼女は何も追求するつもりはなかった。

「優しいですね、私も貴方のような兄が欲しかった」

代わりに、ぽつりと羨望を口にした。

彼女の過去を見ていた切翔はつい、

「……大丈夫だ、お前にもいい出会いがあるさ」

そう励ましたのだった。

「今日はなんというか、すごく優しいですね。」

なぜでしょうか？」

セイバーの問いに切翔は少し悩んだ後に答えるのだった。

「……なんで、だろうな。」

俺にも分からない。けれど、お前を幸せにしてやりたいなど、ふと思ったんだ」

過去を見た、なんてことを言えずに。

彼はそのことを隠しながら、赤裸々と告白する。

「なるほど。ふと、ですか。」

……ありがとうございます、そのお気持ちだけで充分嬉しいです」

月光に照らされる少女の微笑みはあまりにも美しく、刺激的だった。

切翔は思わず息をのみ、その笑顔に見惚れてしまう。

(曇ってさえなければ、太陽みたいな笑顔を見せるな)

切翔は内心に留めて、霧島邸へと向かうのだった。

---

陽の魔術師が潜むホテル内にて。

裏切とバエルは向かい合う形で椅子に座り、話し合っていた。

「いやあ、数的に僕達不利ですねえ。」

——ところで、ウチの陣営に裏切り者ついていると思いますか？」

「さあな。」

裏切り者がいるとすれば、カタリナだろうよ」

「カタリナさん？」

しかし、自身の呼び出したサーヴァントによつて彼女は食われて死亡していますよね？」

「アレは私の推測だ。」

……髪の色や残った肉塊を彼女に見立ててそれらを繋ぎ合わせただけだ。

まあ、動機と呼べるかは怪しいがヤツの先代がキシマと縁があるからな」

「縁、ですか？」

無言で重く頷き、バエルが口にした。

「ヤツの一族、キャツシユヴァルト家は元々はユグドミレニアの一員であった。」

その経由で裏で関わりがあつても違和感は無いだろうよ」

バエルの言葉に裏切は驚きもせず、納得するように頷いた。

「成程。しかし私は違うと思うんですよ。」

いるとしたら、の仮定ではありませんがね。」

……貴方ではないのですか、バエル・カナン」

「私だと？」

ええ、と裏切が頷いた。

「貴方は私達よりも先に和歌山に到着していました。

カタリナさんと一緒にね。

つまり、霧島義隆と接触する機会があつたということです。

彼女もそうですが……わざわざ死体を偽装する理由がわからない。

しかし、我々を誤魔化す為に貴方が用意したというのなら私が納得してしまうんです

よね」

「成程、ある程度理解出来る推察だ。

だが残念だな。私は霧島家が嫌いで接触するつもりすらない。

今から拷問されてもいい、私は違うと証明してみせよう」

毅然とした態度でバエルが答える。

それを聞いた裏切は、

「……やはり」

そう、呟いた。

バエルはその言葉に疑問を抱いたが、現状ではサーヴァントが傍にいる裏切が有利で

あると悟り、何も言わずに

「……話は以上か？」

ならば部屋から出る」

そう、追い出す為に裏切に言う。

裏切は席を立ち、笑顔を見せながら

「ええ、今日は大人しく去りましょう、降霊科のバエル教師。

それでは」

大人しく従い、部屋を後にしたのだった

---

## 三日目・侠の誓い

## ヒーローの心得

聖杯大戦二日目は終わり、深夜2時。

私、ジャック・ユースタスはホテルの一室へと帰還した。

深々とソファに腰を下ろし、大きく溜息を吐き出す。

……いやはや、本当に疲れた。

と言つても、私はただの傍観者でありアーベル君の様に勇猛果敢に戦えるわけでも、ミヤビの様に銃火器を扱える訳では無い。

全く、時代の流れは本当に恐ろしい。

インターネットなる珍妙なモノが普及されてから、魔術を外で扱えば一般人にそれを広められる危険性がある。

まあかと言つて、基本的には外で行使することはないが。

そして、そのインターネットよりも古くからあるが凄まじいスピードで成長を見せる銃火器は本当に、たまに魔術を使うのが馬鹿らしくなってくる。

しかし、それでも私にとっては嬉しき事もある。

「おつかれさんマスター!!」

言いながら、私の背筋に強烈な痛みを走らす伊達男が一人。

翠で揃えた帽子、服。

煙草が似合いそうな雄々しい顔付き。

鼻にある「一」の字の傷跡。

私が呼び出したサーヴァント、陽のアーチャーこと、我が故郷の愛すべき英雄ウイリアム・テルその人だった。

令呪がその宿った手の甲に宿った瞬間から、呼ぶのは確定だった。

愛すべきヒーローを呼ばずして何がファンか。

呼び出すのは、彼の顔が彫刻されたコインのコレクションで充分だった。

それ程までに心の内で敬愛する男に、私は背中を抑えながら声を絞り出した。

「……アーチャー、以降は優しく叩いてくれ。私はこう見えても50は超えてるんだ。背中にヒビが入るかと思っただぞ」

「え、アンタ20かそこらじゃねえの!？」

息子さんと嫁さんの歳はいくつよ!？」

「妻が38、息子が8歳だ」

あんぐりと口を開け、陽のアーチャーが驚きを露わにする。



私はふう、と一呼吸おいてから話し始めた。

「そんなに驚かないでくれよ、私とて人だ。少し悲しいぞ」

「すまねえな。でもあんた、年齢は打ち明けてんのか？」

「当たり前だ、付き合う前に言ってるよ。」

彼女、『まあ、そうは見えないくらい素敵だわ』と褒めてくれたよ」

「へへ、だろうだろうよ!!」

なんせアンタはオレを呼び出したナイスガイなんだからな!!」

この際、本当は魔術協会からは那須与一の触媒を渡されていたことは黙っておこうか。

……しかし、仮に私が那須与一を召喚していたら、平安時代に活躍していた兵士が固まってしまうのか。

それに、与一は源氏の兵だったしな。

それはそれで見てみたいな、と少し思ってしまう自分が憎い。

「アーチャー、私は仮眠を取るとするよ。」

負担をかけて悪いが敵襲に身構えといてくれ」

そう言い、ソファから立ち上がる。

……おっと、その前に日課のシャワーと顔パックを済まさなくては。

よろよろとシャワールームまで歩き、顔パックも終わらすと私は寝巻きに着替え、瞼を落とした。

「おつかれさんマスター。」

護衛はオレがしとくぜ、任せな」

最後に、ニカツと笑っているのは容易に想像できるほどの彼の陽気な声を耳に私は脳をシャットダウンさせた――。

『おい、やめとけよテル!!』

仲間がオレを呼ぶ。

しかし関係ない。オレは、荒れ狂う川の中に身を投げ、溺れることなく泳ぐ。

その先には、溺れて苦しんでいる子供がいた。

……オレの息子と変わらない年齢であろうガキだった。

そんなのを見捨てて、戦地になんて行けるかってんだ。むしろこの子のことが気になりすぎてセンチになるってんだ。

『掴まれ、今助けてやる!!』

そういうながら、ガキの手を掴む。

そして、仲間が投げしてくれたロープを握ってオレは仲間引かれ、陸地へと着くとすぐにガキの意識の安否を行う。

『おい、大丈夫かアンタ!!』

ガキの肩を揺さぶって意識を確認する。

ガキはこくりと頷いて、

『ごめんなさい、泳げないから別のところを渡ろうとしたんですが、転んでしまつて。

溺れては無いので、安心してください』

そう答えてくれた。

思わず頬が緩み、その少年をハグした。

……その際、少年のポケットに入ってるであろう硬いものに当たったが気にしなかつた。

そんなモンよりも、目の前のガキを死なせずに済んだからだった。

『良かったあ……最近滑る奴多いからよ、気を付けるよ。』

取りあえず、ここは時期に荒れるだろうから』

そう言い、その少年を背負ってベースキャンプまで向かう。

『——着いたぜ、ドクター!!』

ちよつとこのボウズの面倒を見といてくれや』

ドクターに少年を引渡し、オレはキャンプから出て、戦場へと赴く。

『あの、貴方の名前は!?』

ふと、少年に名前を呼び止められた。

オレは少年に、

『ウィリアム・テル。みんなのヒーローさ』

そう答えた。

すると、少年はみるみると表情を変えて――

『お前か、お前が僕の父さんを！』

助けてもらった、なんて恩は捨ててやるさ!!

僕の父親の名前を知ってるか!?

――ヘルマン・ゲスラーだ!!』

ポケットに隠していたナイフを取り出し、少年がドクターを突き飛ばしてオレへと向かって走る。

オレは、その少年に向かってただ一言。

『なんだ、オレの過激派ファンかよ』

そう、言った――

「ッ!?!」

思わず、飛び起きたのは「陽」のアーチャーのマスターであるジャックだった。

この後何が起きたのか、どうなったのかは想像に難くない。

自身の敬愛する英雄の死の記憶を見て、ジャックは脳裏に不安が過った。

「なんだ、悪い夢でも見たのか？」

ジンジャとやらにでも向かって、お前さんがボインのネーチャンに囲まれる夢を見ま

すようにって祈ればよか——」

「刺されたのか？」

ユースタスの問いに、アーチャーがピタリと言葉を止める。

彼は、頷きながら答えた。

「おうよ、脇腹をブスリとな。

だがまあオレのファンの行動だ、そこに恨み辛みなんてねえ」

「違うだろう、復讐だろう!?!」

「……貴方はあのまま死んでしまったのか、ウィリアム・テル」

「バカ言っちゃいけねえさ。」

オレはまだ生きてる。今回もただ、同郷の後輩に呼ばれたから来ただけさ」

「陽」のアーチャーの言葉に、ジャックは少し苛立ち溜息を吐き出した。

「真面目に答えてくれないか。察してるとは思うが私は貴方の過去を見た。溺れた少年を助けたら、それはヘルマン・ゲスラーの息子で君はその復讐にナイフで刺された。

そしてそのまま死んだ、違うか？」

「真面目さ、オレは死んでねえしこれからも死なねえよ」

真剣な眼差しของ ウィリアム・テルの顔を見てジャックは今の自分では理解出来ない思考なのだど悟り、怒りは収まった。

だからこそ、ジャックは抱いていた不安が増強されていき、訊ねた。

「貴方は決して、ここから去らないよな？」

「へえ、そう聞かあ。」

残念だが、オレは一人しかいねえ。オレの助けを呼ぶ声が出たら、そこへ飛ぶさ。

英雄《ヒーロー》は皆の助けを求め声聞いたら駆けつけるのが性分だね。

まあ、オレが去る時はお前さんが大丈夫な時さ。そんな時は胸張って誇りな」

「……なら私も、貴方がいち早く去ってもいいように努力しよう。」

本当はずっと欲している。貴方という大英雄を独り占めにしておきたい。

しかし、そうはできないのは明白だ。

だって、ヒーローは一人しかないもんな」

おう、と頷きウイリアム・テルが微笑む。

その時だった。

『クソ、巫山戯んなセイバーテメエ!!!』

なんで時間を教えなかつた! 試作途中でもキリシマセツカを殺しに行くつて言っただろうがクソガアアアイアア!!!』

『主殿、そんなに怒らないで…!!! 痛い痛い痛い!! お願いします、狼になるのをやめてくだされ!!』

ワガハイ、髪が、髪が抜けますううう!!

ちよ、誰かお助けー!!』

隣室のペアが何やら、揉めている声が聞こえた。

ジャック・ユースタスは思わず溜息を零し、ベットから腰を上げ、部屋の扉まで向かい、アーチャーに呼びかけた。

「行こうアーチャー。」

殺しはしないだろうが、髪の毛を引っこ抜かれて禿げた騎士が英霊なんて笑い話作るわけには行かないだろう」

「へへ、そうだな。あのイカしたヒゲの騎士助けつか!!」

“陽”のアーチャーが陽気に笑い、マスターであるジャックの後ろをついて行く。

そして、大声で騒いでいるレクスと“陽”のセイバーの間に介入し二人の……という

よりもレクスによる“陽”のセイバーへの怒りを鎮めさせたのだった。



## 獣の悲劇

ジャックと「陽」のアーチャーが隣室の諍いを止めに行つた頃、霧島邸の義隆の部屋で。

義隆は竹流の首を掴んでいた。

掴んでいると言つても、力が入っていない。

彼は、竹流に対してある種の疑念が生じていたのだつた。

「おう竹流や。教会ではお前を無知無能として扱つたが……貴様、監督役の預託令呪を奪い儂わたしと遊人以外に配るつもりだつたのではないか？」

小岡の前では言わなかつた、その問い。

聞かれれば確かに、義隆自身のプライドにも関わる問題であるものであつた。

竹流は一瞬脈動が早くなつたが直ぐに落ち着かせて首を横に振つた。

「呵々、可愛い嘘をつくではないか。

まるで幼子のような竹流や。

そういうえば、貴様は背格好が優れている割には幼少期はよく虐められて、美華に助けられて居たのを思い出したな」

「何が言いたい、親父……?」

「やはり記憶が飛んでおるな。」

……その美華は誰が殺した?」

その問いに彼の脳内はショートされ、一瞬にして廃人の様になってしまった。その無様を見て、義隆は失笑する。

「忠吉め、雑な唆しをしておつて。」

どうせ、『美華の仇』だの『聖杯があれば』だのとぬかしおつたのだろう」

竹流を床へと投げ捨て、自身の机へと向かう。

引き出しから液状の入った小瓶を取り出したのだった。

「莫迦を相手にするところも脳が疲れる。」

なあ、木曾義仲よ」

「……気付イテイタカ、老獺」

「おお、これは予想外だ。」

私はあと数日は獣だと思つていたがこれはこれは。

あの生娘のような鬼の仕業か?

困つた困つた。これでは儂わたしの折角の令呪が無意味となつてしまふでは無いか」

わざとらしく義隆が困つた素振りを見せた刹那

——義隆の眼前には刀身

が迫っていた。

しかし、義隆は冷静に

「止まれ」

胸にある令呪を光らせ、アヴェンジャーの動きを止めた。

「すまん、貴様用に調整した令呪はあと五十は残っている。

だがまあ、フエアでは無いな。

いいだろう、わたし儂とて男だ。貴様の要望を一つだけ叶えてやろう」

小瓶の中にある液を飲み干し、義隆がアヴェンジャーに言う。

アヴェンジャーは、その願いを聞いて直ぐに

「アノ女と明日ノ昼ニ逢ウ。ソレマデ私ニ何モシナイデクレ」

そう答えた。

義隆は呵々、と笑い。

「それは無理だ、却下させてもらう」

そう言い、赤く煌めかせた。

「貴様——!!」

アヴェンジャーが止まっていた腕を動かすが、義隆に再び止まれと命じられ、止まってしまう。

「そういうえば、お前を召喚した時も最初に私に攻撃をするなど命じたな？」

さて、次はなんだったか……そうだ、源氏に対して復讐心を抱き、人の心を忘れよ。だったな。

しかし、それは効果が薄かったな。

だから最後に命じたこれを先にしよう。

“ 貴様の大事な者たちの記憶全て忘れよ ”

瞬間、赤い煌めきがよりいっそうに強まる。

その直後、彼の記憶から愛しい人や部下たちが去っていく。

そのシヨックで、アヴェンジャーは腕がだらりと下がり、竹流同様廃人のようになってた。

「!!!  
て仕上げだ——」源氏に対する憎しみを増幅させろ——

「」

そして、完成したのは本来はないハズの復讐心で埋め尽くされた獣であった。

獣は咆哮を轟かせ、黒き炎を焚く。

「……この愚かな息子の行動は許そう。

無能な息子の蛮行は一度許すと言ったからな。

——なあ、忠吉や」

「父上。やはり気付いておりましたか」

部屋の中に忠吉が入ってくる。

手には刀が握られており、その目は鋭く義隆を睨んでいた。

呵々、と笑い義隆は忠吉に問うた。

「何が望みだ？」

優秀な息子の頼みは三度までなら聞いてやるさ。コレで三度目になるが、それでいいならな」

「当然、当主の座についてです。

貴方はアルツハイマーが進んでいる。今の小瓶はそれを少しでも止める為のモノだ。

本来ならば、竹流に預託令呪を強奪させて私と竹流の半々に配り貴方に拮抗し、何とか私の条件を呑ませようとしたが失敗に終わりましたし。

故に、恥を承知で貴方に頼みましよう霧島家次期当主、その座を私に寄越して欲しいのだ父よ」

地に膝をつかせて、忠吉は頭を擦り付けて義隆に願う。

その様を見て義隆はより一層、醜悪な笑みを浮かべた。

「〴〵きのくにホテルにまで行け」

瞬間、赤く煌めき獣は姿を消した。

そして、忠吉の方へコツコツと足音を立てて義隆が近寄った。

「忠吉や、その要望を聞き入れてやろう。

次期当主、貴様にくれてやるさ。

さて、そこな出来ない息子をどこかへ連れていけ」

「いいのですか？」

彼の蛮行は、これで二度目だったハズですが」

「知らんな、忘れたよ」

笑みを浮かべたまま、義隆がゆっくりとソファに腰を下ろす。

忠吉は、澁々と竹流を抱えて部屋から去るのだった。

「さて、明日はプレゼントが一つに。

久しい友との再開が一つ。

呵々、胸が踊るな。のう……????」

老獺は怪しく笑い、左手の令呪を愛おしげに撫でた。

## 次男の言葉

朝焼けが眩しい午前七時。

霧島邸の中で一人、学生である遊人は制服に着替えて登校の身支度を済ませる。

まだ時間自体は早い。

しかし、彼はとある場所へ向かう為に早めに準備をしていたのだった。

「それじゃあ母さん、行つてきます」

写真の中に収められている母に挨拶を告げて、遊人は家を出る為に玄関に並べられている靴を履く。

「————」  
「フン、あんな所に行かなくてもいいと言うのにお前は。」

我々に虐げられるから避難しているだけなのだろう、この根性無しめ」

その最中に、嫌味を垂れ流しながら竹流が現れた。

予想外の人物に遊人がめを丸めながら驚きを隠さずにいた。

「無断で監督役に喧嘩売った挙句ミスったから爺さんに大目玉食らったんでシヨツクで部屋でベソかいてるかと思つたけど。」

「案外、面の皮厚いんだね。鉄板並みかな？」

「言ってる、ゴミめ。」

本当に、何故に美華という美しい女性からお前みたいなのが生まれたのだ？」  
わざとらしく、困った仕草をする竹流に遊人が嘲るように笑みを浮かべながら扉へと向かう。

無視をされて、腹が立ったのか竹流が眉を顰め遊人に声を荒らげ始めた。

「無視をするなよ屑が。いいか、お前なんて何時でも殺してやるのが可能なのだからな」

「困んの爺さんだけどね。」

それでいいならどうぞどうぞ勝手に」

「クズはいつでも調子に乗れるから羨ましいなあ!？」

「……まあいいさ、俺を無視したら後悔するのはお前……」

「へいへーい」

適当にあしらってから、遊人は学校へと向かうのだった。

「おはよう、美月さん？」



いつつも朝早くに学校に来てるって聞いてたから試しに来てみたら本当に会えてビックリ。

……ん、なんで固まってるのさ？

ハロー、ボンジュール、你好？」

「……………聞こえてるから他国語混ぜないでくれるかしら？」

非常にウザったらしくて誤って殺しそうだから」

彼らの通う和歌西高校の中間地点。床西のあるコンビニの傍で遊人に意図的に遭遇されたのを悟った夜空は溜息を吐き出し、遊人を睨む。

遊人はヘラヘラと笑みを浮かべていたが、肩に蝶が乗っているのに気付き、その蝶にはルーン魔術が仕込まれているのに気付くと薄ら笑みを夜空に向けた。

「あらら。蝶に爆破のルーン仕込んでるなんて、そんなことしたらダメだよ？」

最近はさ、動物愛護法？                    だのその団体だのがヒジョーにうっさいんだから

さあ。

——あと、影に『閉じ込めてる』のもダメだよ？」

「目が鋭いようだけでもごめんさい、コレはこうでもしないと死んでしまう生き物なの。

……そうね、会ってみたいなら夜に一回解き放ってあげようかしら？」

鋭い遊人の言葉に、夜空は微笑みながら対抗する。

一見、見てみたいかと問うてるように聞こえるその言葉の裏は正反対で、相手をしてみるかと夜空は問うているのだと遊人は悟った。

マスター全員を殺してみせる、そんな絶対な自信を含んだ彼女の笑みに遊人は両手を上げて降参した。

「はいはい、負けますませマース。

そんな怪物を相手にするなんて無理無理。

爺さんとか、小岡サンとかなら殺せるかもしれないけれどね」

「ですって、どう思うのアンタは」

『返す言葉もゴザイマセンよこんちくしょうが！』

そもそも、オレら影の住人が聖職者サマに勝てると思うか？

陰キヤだつて陽キヤには勝てねえだろが、ちつたおジョー様らしく頭使えや』

「あらあら、少し生意気を言い過ぎでなくて？

夜が楽しみだ事。きっちり躰しなおしてあげるから覚えときなさい」

『ウツソだろ過去一の理不尽感じたぞマジで!!』

意義を唱える影を遊人が見つめる。

視線を感じ取ったのか、影は怪しく笑った。

『なんだよ、オメーに見られても嬉しくないんだけど？』

食うぞコラ』

「怖い番犬だなあ。夜空ちゃんこいつホントに騾れてるの？」

「日光のルーンを身体の至る所に設置してるわ。」

死にたいならどうぞご勝手に仔犬ちゃんつてカンジ。

……まあ、騾れてはいないけど飼えてはいる。そんな感じかしら？」

『そーだそーだ!!』 オレアやりてえことあんのに束縛してくんだぞこの女!!

仲間にしてえけどもう済んでるから仲間にできないの悔しすぎるわ!!』

「あ、やっぱりもう卒業されましたか。」

朱勾とヤレて良かったね」

「アイツ、ヘタクソだったから痛かったけれどね。まあ、ヘタなのを許してあげるのが女

の努めでしようよ」

艶やかな笑みを浮かべる夜空に遊人は、

「いや、感想とか聞いてないんだわ。」

……もしかして、正反対だったんじゃないの？

声抑えれなかったの？」

爆弾を放り投げた。

遊人のありえない発言に影は言葉を失い、夜空は青筋を立てた。

『言っちゃった、言っちゃったよこのおバカさん！』

バカというか、考え無しか。

どっちにしろろくなもんじゃねえなあ!？」

「随分とご挨拶ね。」

全く、なんでキリシマってこんなに下品な集団が多いのかしら。

不戦の契なんてなければ今頃、一族を殺してやるところだわ」

「ヒントは遺伝子。」

「さあ、答えをどうぞー？」

ケラケラと笑う遊人。

その遊人の旗では、霊体となった「陰の」キャスターが彼を観察していた。

「……まあいいわ。ところで、一つ尋ねたいのだけれど」

「ん、なにー？」

遊人が尋ねるが夜空の返答がない。

……少しの間、静寂が訪れる。

夜空は、彼の身体をジッと凝視しながら口にした。

「貴方もしかして、自分が長くないのを自覚してる？」

「じゃなきやこんなフーになんねえよ？」

瞬間、遊人の口から零れた言葉だった。

そう、と夜空が呟く。

それに反して、遊人を観察していた「陰」のキャスターは目を見開いて驚いて見せた。

じつと、『宝具』の一端を使い彼の身体を凝視する。

……すると、彼の身体の内側は酷く毒で汚されていて。

本当に、あと僅かな命であると見抜いてしまったのだった。

良くて三年？　否、数ヶ月の命。

まるでホムンクルスのようなその少年の命に、彼は少しばかりの憐憫を抱いたのだった。

「ま、人生が短くても楽しめるようにあとは気楽に身内揉めを観戦させてもらおうかね。

どうせ、ボクらの陣営が負けるだろうしさ」

「……へえ、よくわかつてるじゃないの」

「そりゃあ、あの爺さんが落ち目を見せちまったからな」

「そうね。暴君として頂点に居座るなら、絶対に失態なんて見せてはいけない。

自身の力は絶対的であると見せしめるから、部下は恐怖で従うしかないもの。

ましてや裏切り者をおいおいと逃すなんてことは反感を与えてしまうには十分なものだからね」

うんうんと頷きながら、遊人は続けた。

「しかも、戦力的な問題とはいえボクと兄ちゃんを生き残らせてるからねえ。

ボクが生きてる時点で竹流さんは不満あるだろうし、兄ちゃんが生きてるから忠吉さんも大不満だろうしね。

それ絡みの反乱を起こすことなんて容易に想像出来ちやうよ」

「彪斗は何も感じてなかったりするの?」

「アイツ馬鹿だから不満なんて感じる脳が無いよ」

遊人は、さらに言葉を続けた。

「まあでも、アイツは自分で考えねえだけだからね。

多分、考えるようになったらちよつとしたら爺さん越えるんじゃないかな」

「義隆を?」

「うん、アイツは元がいいからさ。

……と、そうだ。一つ伝え忘れてたことがあったわ。

実はさ、ウチの高校の近くにあるパチ屋の廃墟にたまに吸血鬼が出るって噂あるじゃん?」

「話変えてきてきてなんのことかと思つたら……その噂ならデマよ。私、調べたけど出てこなかったもの」

夜空の言葉を聞いて遊人は、

「ところがどっこいいるんだよねアソコ。

ま、放課後辺りにそのワンちゃんどっかに縛り付けてから探してみれば？

それじゃ、実はボク他にやりたいことあるからこれにてしつれーい」

と答え、学校とは違う別の道を向かった。

「……まさか。アイツだったりするのかな」

遊人がいなくなったタイミングで、夜空はポツリと胸を期待で膨らませたのだった。

## 旭と巴 1

午後の十四時。

ゲームセンター、「プロレマイオス」にて。

少し傾斜なレンガ造りの階段を昇り、最上段の入口前では陽のバーサーカーがいた。いつもの戦装束ではなく、白いワンピースを身にもっているのは、主である雅が用意した物であった。

彼女は、夫であった堕ちた復讐者に待ち合わせを要求されており、逢う事を楽しみにしていたのだった。

——そうして待つこと二時間。

待ち続ける彼女の前に、復讐者は現れなかった。

「……義仲様、どうされたのでしょうか」

誰かに殺されたのか、不安が過ぎるが胸の内に押し殺した。

そんなハズは無いと、彼女は胸の内を否定する。そうして彼女はさらに待つことを選  
択した。



しかし、無情にもさらに時間が経ち現在17時となった。

「……義仲様」

女の悲しみが言霊となる。

涙を滲ませたまま、巴御前が階段を降りようと――

「何処へ行く、巴。」

濟まない――待たせたな」

する彼女を止めるのは、右肩が吹き飛んだ姿の嘗ての復讐者。

陽のアヴェンジャーと呼ばれていた男、木曾義仲その人であった。

彼の無惨な姿に、巴御前は駆け寄る。

堪えていた涙を流しながら、周囲に奇異な視線を向けられている木曾義仲へと。

「義仲様……その腕、腕は……!?!」

「この右肩か。気にするな、味方の弓兵にやられたものだ。

まあ仕方がないさ、彼にも思うところがあつたのだろうよ。

それよりも巴、待たせてすまなんだな」

よく見れば腕は止血されており、左脇には着替えと思われる着物を抱えていた。

周囲から見れば、彼は霊体化していて巴御前が何やら一人で取り乱しているように見

えるという構図だが、巴御前は気付くことなく言葉を紡ぎ続けた。

「……いいえ、待ち切れませんでした。」

貴方が、巴のことを忘れられてしまったのだらうと思つて。

巴は、今すぐにも霧島の屋敷へ向かおうと思つていました」

「そうか、なら間に合つて良かった。」

さて、では巴よ私と共に行こう。

……今からでも時間はまだあと、二時間ほどは許されるだらうさ」

そう言い、木曾義仲は自らの左手を差し伸べる。

巴御前はその手を取り、彼と共にプロレマイオスの中へと入っていく。

瞬間——中から騒音が響きゲームセンターに初めて来た二人の耳を攻撃

した。

先程の二人の会話から百八十度回転した獣の世界。

「はア!? 巫山戯んなよ相方ア!!」

「ウツホー!!! 私はゴリラでウホー!!!」  
でもお前らはカモカモカモカモカオオガ

モでーす!!!」

「うるせえんだよボケエ!!!」

吠え続ける人の姿をした獣達の咆哮に、二人は思わず苦笑いを浮かべてお互いが顔を

合わせた。

「……場所でも変えるか、巴よ」

「いえ、ここにしましょう。」

他に、遊べるようなところもありませんし」

周りの視線を気にせず、二人は手を繋ぎゲームセンターの中へと入っていくのだ  
た

## 家族の贈り物 1

17時50分。

霧島邸、義隆の部屋にて。

義隆は悠々と木椅子に腰を下ろして優雅に過ごしていたが、ノック音と共に入ってきた来客に視線を向けた。

「おお、遅かったな遊人<sup>ゆうと</sup>」

「ういっすー。」

で、用事って何さ？」

「プレゼントがあつたのだが……しまった別の部屋へと置いてしまっていたようだ。待っている、今から取りに行く」

そう言い、怪しい雰囲気を出しながら老獪は部屋から出て行った。

遊人は何処か嫌な予感がし、部屋を去るといふ選択が頭に過った。

しかし、その思考は直ぐに去っていった。

それが、老獪の魔術によるものだとは気付かず。

遊人は感覚が忘れてしまいそうなほど長い間待った。

時間にして一時間《いっぶん》。

ようやく扉が開くとそこには杖をついた自身の祖父が現れた。

いつもの琥珀を杖に嵌め込んだモノではなく。

今回は人の脳髓を嵌め込んだ、なんとも趣味の悪い杖であった。

「おっせーし、何その杖。気味が悪いんだけど」

「おや不満か？ お前のプレゼントなのだがな。」

受け取れ遊人。これは魔術の戦闘において有益なモノだ」

そう言い、義隆が杖を投げる。

上手いことキャッチに成功した遊人はその杖に目を配った。

爆弾などはついていない、魔術も仕込まれていないのを見抜くと次は脳に刻まれている文字を読んだ。

『

その文字は、名前であり遊人がよく知る名前だった。

自身のことを慕ってくれていた、内心で感謝していた大事な侍女の名を、忘れる筈が無いだろう。

遊人は全て悟り、義隆を睨んだ。

「殺したの？」

懐から瓶を取り出そうと手を持っていく。

その腕に、床に転がっている宝石から飛び出た灰が絡み付いていたのを、彼は痛覚を思いついで、漸く気付いた。

驚きを隠せない遊人の顔を見て、義隆は嗤ったのだった。

「いつの間に、と思っているな？」

二つとも答えてやろうとも。

一つ目は部屋を去った際に床に転がしておいた。気付かなかつたらう？

結界を仕込んでいたからな、当然だ。

二つ目は一昨日のうちに殺した。

死体は竹流にくれてやったわ、今頃は慰みに使われているだろうよ、呵々」

「——後悔させてやる、この爺が」

「怒っているのか？」

いいぞ、わたし儂にとつてはその感情はとても興味深く、そして大好きなモノだ。

最近のお前は少しおいたが過ぎるから灸を据えたかったんだ。

呵々——忘れるなよ道具、お前は私達に使い潰される為だけに在る消耗品

であることをな」

彼が指を鳴らすと、灰が燃えて絡み付いていた遊人の腕へと燃え移る。

「ウツ……!?!」

「今日はそれを渡して、お前にお仕置する為に呼んだだけだ、疾く失せよ」  
 「だ、? そうだゴミ屑。」

残念だったな、両想いの相手が死んでしまつて。

いやあホント、いい気味さ」

背後からぬらりと現れた竹流を睨む。

遊人からの敵意を感じた竹流は愉悅に浸り、調子づいて流暢に遊人を煽り立てた。

「お、なんだ珍しく俺に怒りを顕にしたのか。」

——悪いな、初物を奪わせて貰つたさ」

「ゲームスタート  
 鑄造開始」

魔術回路を浮かばせ、魔力を奔らせるは遊人。

それよりも早くに、リモコンのスイッチを押したのは竹流であった。

直後、詠唱中の遊人の腕は爆破し彼の腕が義隆の床へと堕ちた。

「ガツ……アアアア……!!」

「お前が登校中に、お前の着替えの服に装置を仕込んでおいた。

本来ならばアーチャーあたり任せたかったのだがな、アヴェンジャーと騒ぎを起こしよつた。アイツは本当に痒い所に手が届かない駄目なサーヴァントだよ。」

……まあ、使えない消耗品に言う愚痴じゃないか？」

遊人を蹴り飛ばし、竹流が懐から銃を取り出す。

セーフティーを解除し、引き金に指を添え遊人へと向けて、腕、肩、膝へと発砲した。「分かったかゴミ屑。次、俺に対して生意気な態度を取ればこれだけではすまんど。

——次こそは殺す」

「へえ……パパに手助けしてもらえなきやこんなコト出来ないクセに言うようになったじゃん？」

そんなんだから死体の初モノしか貰えないんだよ、万年童貞中年」

「残念だ、もう次が来た」

容赦なく竹流が引き金を引く。

その直前に、彼の銃口に杖先が突つ込まれた。

突つ込んだ張本人である義隆は口は笑みこそ浮かべていたが、目は笑っていないかった。  
た。

「儂わたしの許可なしにこやつを殺すなよ息子。

お前の我儘はもう聞けんのだ、それを分かっているか？」

「ぐっ……フン、いいさ。

じゃあなゴミ屑。今日はこれで満足ということにしといてやるさ」



そう言い、竹流が部屋から去った。

義隆は指を鳴らすと、霊体を解いた男が遊人を担いでそのまま遊人の部屋へと運んで行ったのだった。

「呵々、さて今日はしっかりと動くぞ。

情報はあらかた揃ったからな。

最低でも二騎、向こう側から奪うとして。

最大で全滅は確定だ」

心からの笑みを浮かべ、義隆は再び木椅子に腰を下ろし、夕日を見る。

郷愁を胸に、しかしその理由を思い出せない彼は困惑しながらも、来る夜を待ち構えるのだった。

## 悪魔の贈り物 1

「マスター、我に何か用であるか？」

「ああ、少し私の用に付き合ってもらおうか」

バエルの手には聖杯が握られており、*「陽」*のキヤスターは何処かきな臭さを感じて拒絶するかどうかを一考……などという余裕は無かった。

何故ならば、バエルは即座に行動にかかったらであつた。

*「陽」*のキヤスター。彼に拒否権は無い、使い魔は所詮、悪魔に使い潰されてしまう存在であるのだから。

「*「約束の地、約束の復讐を遂行する為に我は呼ぶ、我は試す、我々は繰り返す。*

*憎き人理を焼却する為に、我々は足掻き、もがき、怒り続ける」*」

「何を——」

している、と問う前に彼の足元が青白く光り輝く。

それと同時に、彼の中にナニカが入ってくる。

そんな不快感と苦痛を感じ、キヤスターは叫んだ。

「あ、ギヤアアアアアアアア——！！」

「告げる。」

「汝の身は我が手網を握り、我が悲願は汝を糧に。人理の焼却に従い、この意、この理に屈服せよ」  
「拘束を此処に。」

我は常世総ての獣と成る者、

我は常世総ての愛を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

星々の輪より来たれ、天秤の破壊者よ——

光が更に強く輝き、陽のキャスターを取り込む。

刹那、彼の脳裏には膨大な情報量が与えられた。

量にして一人の人生程。

その果てしない情報量を得た成果として彼は——

理解して姿を、透明へと変化させたのだった。

「……進展だな。これで、我が一族の悲願は近付いた」

「そして、貴様の強化も終わらせた。

死なぬだけでは役に立たぬ、そう判断させてもらったぞキャスター」

言いながら、バエルは箱を投げた。

自身の心臓とも言えるその箱を慌てて受け取った。陽のキャスターを見下ろしながらバエルが淡々と命じた。

「さあ、透明人間と融合して見せた不死の魔術師リッチーよ。

今迄の屈辱を晴らすのだ、今のお前ならば何者にも負けんハズだ」

透明人間となった不死の男は優越感に浸り、強い笑みを浮かべたのだった。

「……まさか、彼女がルーラーとして呼ばれるなんてね。

因果来たれり、って感じがするよ」

雄大の部屋の中にて。

彼は、目の前の自身のサーヴァントである“陽”のライダーと共にチェスを嗜んでいた。

現状としては雄大が圧倒的不利であり、そしてほぼ詰みと言っても過言ではないものであった。

「勝ち目は？」

「あるさ。その為の人生だったんだよ？」

ありとあらゆる可能性を、考えうる限り考えてその為の対策も仕込んである。

後は、聖杯を手に取れるか否かさ」

「今夜、奪《と》りに行くので？」

「……いや、今夜は使い魔で様子見さ。」

僕《わたし》の予感が正しければ守り手が居るはずだ」

「成程、その守り手次第で計画を変える、というわけですね」

そういうことさ、と言ひ雄大が駒を打つ。

しかし、ライダーが駒と共に

「チエック・メイト」

と言葉を放ち、雄大に終わりを告げた。

「負けかあ」

「下手すぎます、どうすればそのように自信満々でいられるので？」

「そりゃ、人生経験さ」

ハハハ、と笑みを浮かべながら雄大が駒を片付ける。

「期待しているよライダー。」

今日は、暴れるだけ暴れてね」

「御意に」

頭を下げて、「陽」のライダーが姿を消す。

少し時間が経った後に雄大が十字架を握り、目を伏せた。

「さあ……始まりだ。」

奇跡を起こす道程。その工程のね」

そして——夜が来るのだった。

## 叛戦の英雄

和歌西高校が建てられている山。

その森林の中では。

枯葉を踏み、辺りを警戒しながら歩く。陰のランサーの姿があった。

数分前にあからさまに気配を漏らして、自身の位置を知らせているサーヴァントがいた為、ランサーはすぐ様に向かったのだった。

畏の可能性を考慮し、陰のランサーは想定する敵を定めた。

「陽のアーチャーであると、そう断定して進む彼の姿を、見事なりと称えんばかりに、陽のアーチャーが遠くの木の枝上から双眼鏡で彼を覗いていた。

「へ、ゲスラーの時を思い出すねえ」

「そうだな。……しかし、なぜ裏切は全員をサーヴァントと共に行動させたのだろうか？

私はホテルで待機していた方がいいと思ったのだが」

「多分、邪魔だからあわよくば負けて散ってくれることを願ったんだろうよ。

邪魔ならな。いい意味で捉えるなら今夜はホテルが襲撃されると読んだから避難さ

せようと思ったんだろうよ」

成程、と顎に手を当ててユースタスが一考する。

そして――

「……敵がアーチャーならば、私達は昨日のように貴方の足を引っ張ってしまう可能性がある。」

ひとまず、距離を少し空けておく。

使い魔で貴方の事は見つつかつ貴方をバックアップしよう」

「OK！」

頼むぜ、最高の後輩マスター!!」

ニカ、と眩しい笑みを浮かべて“陽”のアーチャーが姿を消した敵を見直した――

「……………敵の姿は見えぬが、しかし」

“陰”のランサーは罫を看破していた。

景色と溶け込んでおり、本来なら見えることのなかったそれは運良く現れた強風に



よつて晒されていたのだつた。

「やはりアーチャーか？」

ともすれば、ここは——」

言いながら、「陰」のランサーは容易く罨に片足を突つ込んだ。

挑戦と分かつていて逃げるのを、本能で避けたが故の行為だつた。

かの大公の名を傷付けることはすまいと及んだ彼の行為は幸か不幸か。

罨は起動し、彼を捉えるように網が彼を包み込んだ。

「ほう、罨を捕える手法か。」

見事見事、しかし!!」

即座に腰に差していた刀を抜き、網を袈裟斬りする。

網から出た彼が正面を向くと、彼の眼前には弓矢が飛来していた——

「アレは、掛かりに行くな」

“陽”のアーチャーが呟く。

その確信は事実へと変わるのとはあと数秒先の事であつた。

(アイツはサムライってヤツだ。プライドがヤツの枷となるのは目に見えてる。

だから――)

彼は即座に矢を放った。

ランサーがいる位置とはやや下。

しかし、アーチャーにとってはそれで良かった。

ランサーは罨にかかり、網を即座に切る。

ヒュウ、と口笛を鳴らし

「ビンゴだぜ」

勝利を確信した笑みを浮かべた。

距離は約百五十メートル。数秒前に放った矢はちようど、着地した。陰のランサーの心臓を捉えていたのだった。

切り払うにも間に合わない距離。

「陰」のランサーは絶対な死が待っていた。

「ファイナル  
」  
「終幕さ。」

さあ、還って主に言ってきたな……敵のウィリアム・テルに呆気なく殺られたってな！」

矢は、陰のランサーを貫く。

———その、ハズだった。

瞬間、突如とランサーの周りに豪風が起こり矢が巻き込まれた。  
宙を踊り、矢は地へ墮ちる。

有り得ない光景に目を見張るアーチャーと、矢の方向へと視線を向けた〃陰〃のランサーの視線が合った。

「ヤッベ……………!!」

二射目を構える〃陽〃のアーチャー。

しかし、その直後に彼の眼前には〃陰〃のランサーが迫っていた。

「なっ……………!?!」

「残念だったな弓兵」

槍兵の手には槍が。

日本が誇る三大名槍の一つ。

穂先に止まった蜻蛉を切り裂いた逸話を持つ『蜻蛉切』が、今宵穂先に止まる命への  
奔る———

「最悪な会敵だよ」

ユースタスは嘆く。

懐から宝石魔術を取り出して、戦闘態勢へ移る。

「呵々、そう言うなよユースタス。」

折角の再会だ、先ずは仲良う酒でも組かわそうでは無いか。

……もつとも、この酒は毒入りだな

彼の目の前には、かつての友にして現在の討伐対象がいた。

その名は霧島義隆。“陰”の陣営を束ねる王であった。

人を見下した笑みを浮かべながら、義隆は銃を胸ポケットから取り出した

## 華々しき、三河武士

槍兵の槍は“陽”のアーチャーを貫かんと奔る。

“陽”のアーチャーが後ろへ跳び、木の枝から落下する事でその一撃を避けた。更にそこから三射ほど矢を放ち、“陰”のランサーへ反撃する。意に介さずにランサーは槍を投げて陽のアーチャーの腹部を穿いた。

「グッ……!？」

だが、アンタはその矢をどうするつもりだ？

もうさつきみたいなき跡は起きねえ——」

言い終える前に、無情にも彼の言葉は否定された。

再度現れた豪風、再度空を踊る矢たち。

「すまぬな、某の二つ目の宝具が貴様のソレを打ち破らせて貰った。

我が宝具、はなはなしきみかわぶし戦国最強は某が本多忠勝であると証明する為の最強の鎧なり。

どんな弓が来ようと、どんな一太刀が来ようと某に『無傷』である結果をもたらす」

「オイオイ、無敵じゃあねえか！

あーあ、喧嘩ふっかけるんじゃないやあなかつたぜ」

至っていつもの調子で、「陽」のアーチャーが振る舞う。

しかし内心では既に、令呪によるバックアップでないと逃げきれないという答えが出ていたのだった。

だからこそ、彼らしくない弱音をいつもの調子で吐き出した。

後輩に情けない姿を見せることとなるとは、と彼は奥歯が砕けそうなほど食いしばっていた。

「悔しがるか弓兵……その精神やよし!!」

味方なら酒を酌み交わしたかったが残念だ」

「悪いが酒は美女か息子としか呑まねえ主義なんだ」

「陽」のアーチャーは腹部を穿く槍を抜き、地面へと転がし周囲を見渡してどうにか逃げ切れるルートを探る。

どれを利用するか、どうするべきか。

思考をかけめぐらせて必死に思案する。

木の葉を利用する、砂利を利用する。

弓矢を、手足を、命を利用する。

考えうる全ての可能性を会話の最中でも張り巡らせた結果——  
——答えは変  
わらなかつた。

「……………ケツ、ホントにあんたズルすぎるよ。

強さだけじゃねえ、その性根もよ」

軽い恨み節を吐きながら、陽のアーチャーは弓矢を構えた。

陽のアーチャーの行動に、陰のランサーは笑みを浮かべながらも、少し残念そうに表情を翳らせながら槍を刀を再度抜いた。

「答えはそれか。」

義仲公の時みたく、撤退を選ばないのだな」

「初日でバイバイなんてそれこそ話になんねえからな。」

真名を二騎実質的な勝ち星も二つ。

それだけ戦果を挙げたんだ。

……勘違いすんなよ、ここで散る可能性は確かに高えが、勝ち星三つ目をもぎ取つてやるからな」

「その意気、素晴らしいぞ。流石は叛戦の英霊。」

しかし某とて、勝利を欲している。

今の主の為でもある。しかしそれ以上に、竹千代様の為に。

あのお方の名譽を傷付けぬよう、某は全力で持ちうる武器を使わせてもらおうさ」

「……」  
「呵々、ウィリアム・テルや、貴様はもう逃げ場はない。」

ほれ、土産だ」

二人の決闘場、そこに闖入したは全ての元凶である霧島義隆であった。

二人の間に、彼は「陽」のアーチャーのマスターであるユースタスを投げた。

腹部に数発の弾痕があるのを即座に見抜いた「陽」のアーチャーは直ぐに義隆に矢を放った。

その矢を切り払う、等ということは「陰」のランサーはしなかった。

無粋な者に相応しい罪と、罰。

ソレをいつその事くらってしまえと、「陰」のランサーは願ってすらいた。

しかしその罰は届かなかった。

義隆の周りには周到に結界が張り巡らされており、義隆のことを護ったのだった。

「可能性を底上げするだけのその宝具。

わたし儂に放つならばそれだけでは足りなかったな。

あと一つ、魔術でも練り込ませておけば良かったというものを」

呵々、と嗤いながら義隆が「陰」のランサーに視線を向け、

「殺れ」

そう短く命じた。

老獪の命令に、「陰」のランサーは答えることなく強く首を横に降った。



「忠吉殿に令呪でも使わすことだ。

某は貴様の命令などに従うつもりは無い」

「いいや、聞いてもらう。

貴様がアーチャーを殺さぬというのであれば儂わたしが我が友を手にかけ、儂わたし自身のサーヴァントを呼んでそのアーチャーを殺すだけだからな。

貴様がどんな形であれ、そのアーチャーを殺すというのであればその男は見逃す  
さ」

転がっているユースタスを指し、義隆が笑う、笑う、嗤う。

「アー……チャー……逃げ、ろ……」

二騎の間に放り投げられたユースタスは弱りながらも「陽」のアーチャーに命じた。

しかし、彼は逃げろと言われたから逃げるなどということをする男ではないということとを、ユースタスは忘れていた。

「————おいおい、オレが勝った場合の話をしてないぜ？」

悪いが条件を挟ませてもらう。

オレが勝てば、ユースタスを助けてもらおうか」

「ほうっ？」

「弓兵……」

「なに、を……………!!」

三者三様に、反応する。

“陽”のアーチャーは、ユースタスの止血のみを行ってから巻き込まないように少し離れた木の下へと移した。

「勝ち目が薄いつてか？」

まあ、今のオレの状態は酷いからな。

だがよ、アンタは忘れてるぜ。オレは、アンタが呼び出した最高のサーヴアントだつてことをよ」

「アー……………チャー……………クソ、そんなことを言われたら……………私、は……………」

令呪を使えない、ウィリアム・テルの矜持を傷付けるような事となる事をしたくない。

その思いは言葉にしなくても“陽”のアーチャー、彼の胸に届いていた。

「さあてやろうぜランサー!!」

こっからアンタに勝つて最高の未来、掴んでやるさ!!」

ウィリアム・テルの言葉に、戦国最強の男は強かに微笑んだ。

## 最高のヒーロー

「この状況をひっくり返す、か。」

面白い、乗ろうかウイリアム・テル。

貴様のその要望、わたし儂は呑もう」

不敵な笑みを浮かべて、きりしまよしたか霧島義隆ははその要求を呑んだ。

ただの気まぐれではあるその言動に、ユースタスは少し驚きを見せた。

「なんだ、意外か？」

こう見えても昔の仲間には情があるのでな。

……と言っても魔術という存在を消せば結果、お前達を消すこととなるがな」

呵々、と笑い義隆が数歩下がって二騎のサーヴァントとの距離を開ける。

二騎は、お互いに笑みを見せていた。

無言の了承、僅かな接触の中で芽生えた二人の奇妙な友情。

会釈をし、自身の主の方へ足を運んだのは陽のアーチャーだった。

胸ポケットにあるコインケースから、自身の肖像が掘られたコインを取り出した。

「ワリ、借りるぜ」

「……私は、貴方を、止めれない。」

私が、迂闊に離れて……ヨシタカと、会敵、したばかりにこんな羽目になった……」

「気にすんなよ、アンタは間違つてねえ。」

運が悪かつただけさ。

——それに、オレは死なねえさ」

太陽のような笑みを浮かべ、  
“陽”のアーチャーが  
“陰”のランサーの方へと歩む。

「このコインが地面に落ちたら開始の合図だ、それでいいな？」

「西部の射撃のようなものか。」

いいだろう、受けて立とうとも」

「ありがとよ、ランサーよ」

“陽”のアーチャーはそう言い、足早に  
“陰”のランサーと距離を取り矢を番える。

そして、器用に片手でコインで指を弾いた。

くるくる、クルクルとコインが宙を舞う。

“陰”のランサーはその軌道を捉えながら。

“陽”のアーチャーはも、そのコインを見つめながら。

しかし、胸中では自身の主であるユースタスに謝意を浮かべていた。

(悪いな……令呪を使えば、確かにオレア逃げ切れたと思うぜ。

だが、アンタを見殺しになんて出来るかよ。

オレの事を好いてくれて、こんな大舞台に呼んでくれた愛すべき馬鹿野郎どうきょうを見捨てて逃げるなんて、英雄としてもお前が好きなのウィリアム・テルとしても失格だ。

だから————可能性が薄くてもオレはこの出鱈目男に勝ちに行かせてもらう)

覚悟を決め、目付きが一層鋭くなる。

漲る闘志に、“陰”のランサーも影響され昂っていた。

義隆はただ、その分かりきった結果が来ることを楽しみに二人を視界に収めていた。

コインはあと少しで地に着く。

(————嗚呼、残念だ。

ウィリアム・テル。貴殿のような良き男とは出来れば、もっと別の日にやり合いたかった)

その胸中の嘆きは“陰”のランサーのものだった。

もう訪れないであろう楽しみを噛み締め、“陰”のランサーは思考を真っ白に変え——思考を殺した。

——コインが、着地する。

先に動いたのは「陽」のアーチャーだった。

クロスボウから矢を射出させ、「陰」のランサーへと迫る。

「陰」のランサーは、その矢を槍で切り裂く。

そして、その轟速で「陽」のアーチャーのすぐ目の前にまで接近した。

雌雄は決したも同然。

「陰」のランサーが勝ち、「陽」のアーチャーの敗北は誰もが結論付いていた。

否——二人は違った。

一人はその手の甲を赤く煌めかせ、一人は腰に隠していたナイフを抜き取った。

(野暮かもしれない、だがそれでも。

私は、貴方を援護する。それがマスターとして、あなたを尊敬する一人の人間として

するべき行動だ——!!)

「マスター……アリガトよ!!」

「残りの令呪を全て使う……勝て、逆境を打ち破るんだ私の英雄!!」

「陽」のアーチャーの身体能力がこの刹那、跳ね上がった。

そのまま、「陰」のランサーに向かってナイフによる一太刀を繰り出した。

その一太刀は「陰」のランサーの心臓をしっかりと捉えた軌道を描いていた。

「……………見事なり、陽のアーチャー。」

そしてそのマスターよ」

しかし、その一太刀は陰のランサーが刀身を掴むことで防がれてしまったのだつた。

その結果に、陽のアーチャーは口角を吊り上げた。

主も、自身も出し切った上での敗北。

だというのにその胸中は清々しいものであったからであった。

「あんたこそ、流石だよ本多忠勝。」

——オレの、負けさ」

刹那、槍は陽のアーチャーの心臓を穿いた。

サーヴァントが現界できるその最たる理由の霊格の破壊。

それが原因でウイリアム・テルの敗北が決まった。

「グッ……………アーチャー……………!!」

歯をかみ締め、ユースタスは己の不甲斐なさを呪った。

「私が不甲斐ないばかりに……………貴方を、死なせてしまった……………!!」

すまない、すまない……………!!」

「オイオイ、今朝もさつきも言っただろう。」

「オレは死んでねえってな」

「呵々、何を言うておる。」

「心臓が破壊された、貴様の死は必至だろうに」

「嗤う義隆を、〃陽〃のアーチャーは憐れむような視線を向けて語った。

「人つてのはな……人に忘れられて初めて死ぬんだ。」

「此処にオレのことを忘れないヤツがいる限り、オレは死なねえさ」

「……………何を言うておる？」

「眉を顰めるながら、義隆が〃陽〃のアーチャーを睨んだ。

「刹那、彼の脳裏でノイズのようなモノがかかりながらも、ナニカが聞こえた。

『あなた』

「ぐっ——————オオオオオオオオオ……………!!??」

「誰だ、誰だ……貴様はッ!」

「罅割れるような痛みを襲われ、義隆はその場を離れた。

「……某はあの男を護衛するとしよう。」

「さらばだ、ウイリアム・テルよ」

「そう言い、〃陰〃のランサーが義隆の後を追った。

「そして台風のように。闖入者はその場から去り、ユースタス、〃陽〃のアーチャーの



二人だけとなった。

「じゃあなユースタス。」

お前は強い、この先も生き残れるさ」

「忘れられないから、か？」

「いや」

首を横に振り、陽のアーチャーが微笑みながら答えた。

「お前さんは答えを導ける。何度も何度も間違えたとしても。

最終的には、いい未来を築かれる。

誇れ、後輩。お前はこのオレが見込んだ男なんだぜ？」

ウィリアム・テルの言葉にユースタスは感服し、涙を浮かべる。

その涙をすぐに吹き、力強く頷いた。

「ああ、その言葉を胸に絶対に生き残ってみせるよ」

「——ああ、安心したぜ」

眩き、最後に無理やり声を捻り出した。

「あばよ、カミさんにこのハート型のパイを届けてくるわ!!」

「ああ、行ってこいウィリアム・テル」

ユースタスが、送り出す。

そうして “陽” のアーチャー、ウィリアム・テルはこの世から別の場所へと選ったのだった。

## 男の疑心

——時は遡り、夕方の18時。

ユースタスの部屋で陽のマスターが全員集まり会議を開いていた。

その中で、雄大が全員に対して進言をするのだった。

『この日、恐らくヨシタカはこのホテルを襲撃してきます』

突拍子のない彼の発言を、不信に思う者は不思議といなかった。

ユースタスとコンラートは納得しか無かった。

霧島義隆、彼ならば自身らの居所を突き止めるのはそんなに日にちはいらなだろうと。

レクスは少し訝しんだが、ユースタスとコンラートの様子を見てそれをこなせれる男なのだろうと理解したからであつた。

その中で、バエルだけは不信感を拭えなかつた。

「フン、くだらん。」

私は此処に残る、どのみち私のサーヴァントさえ残っておけばこの聖杯戦争は陽の陣営が勝ち抜けるからな」

「根拠は？」

「つい先程、幻霊であるリッチーに幻霊の透明人間を融合させた」

バエルの言葉に、その場にいる者達が目を丸めた。

「なんだ、アレを完成させたのかい!？」

逃げる準備なら尚更するべきじゃないか、封印指定されても知らないよ？」

「構わん。」

そも、封印指定は次世代に託せれるならばいいのだろうか？

もつと単純に出来るはずだ、なんとかなるだろう」

コンラートの諫言を軽んじるバエル。

周囲は、少し不安ではあったがバエルならば何か策があるのだろうと信じ、それ以上は何も言わなかった。

「……やはり、貴方は僕わたしを信用しないのですね」

雄大を除いて。

残念そうに呟く彼を、バエルは鼻で笑い自室へと戻って行った。

そうして、彼は一人ホテルの自室に籠り自身のサーヴァントを戦闘に赴かせたのだっ

た

それから3時間経過し、〃陽〃のアーチャーが敗退した頃。

それを感知したバエルは、書き綴っていたレポートの手を止め一人言葉を零した。

「やはり散ったか。」

さて、我がサーヴァントはどうなっているだろうか？」

使い魔の視界をジャミングして、自身のサーヴァントの現状を覗く。

そこには、身体を透明にさせながら相手のサーヴァント——〃陰〃のキャスターと思わしき男を翻弄する自身のサーヴァントの姿があった。

床には〃陰〃のアサシンらしき青年が倒れ伏しており、胸部から鮮血を零していた。

直ぐに、自身のサーヴァントが彼を刺したのだと悟りバエルは少し嬉しそうにほう、と声を漏らした。

「なんだ、少しはやるな」

呟いて、彼はレポートを書くのを再開させた——。

## 時を遡る悪魔

江松小学校廊下内。

遊人と一号が、自身のサーヴァントを連れて行動を共にしていた。

髑髏の仮面を着けた男、「陰」のアサシンは周囲の警戒を怠ることは無かった。

その反面、「陰」のキャスターは周囲など気にすること無く呑気に辺りを見渡していた。

二人の意識の違いは後から明確に出てくる事となる。

——カツン、カツン。

遊人達の足音では無いモノが響く。

「陰」のアサシンは瞬時に音が響いた方へ振り返る。

その様子に「陰」のキャスターは「警備員だろうに」と、呆れていた。

そんな彼に向かって、魔術が施された短剣が飛来する。

「う、おお……!?!」

慌てて、「陰」のキャスターは自身の腕を盾にしてその一撃を防いだ。

直ぐに「陰」のアサシンが短剣が投げられた方向を睨む。

しかし、そこに霊体になっているサーヴアントも、人すらもいなかった。  
 (……なら、仕掛けられていた罠か!?)

「陰」のアサシンが反対を振り向く。

刹那、彼の背中を太刀が貫いた。

魔術が施されたソレから、ゆっくりと姿を現すヒトがいた。

「……お前、陽」の、キャスターか……!?!」

「ヒヒ、ヒ……!!」

やった、やったやった……!!!

気付かれることもなく、アサシンを殺してやったぞお!!」

嬉しさに顔を歪ませ、彼がアサシンを蹴り飛ばす。

遊人はすぐに胸ポケットから宝石を取り出し、陽」のキャスターへと放り投げた。

「game start」

遊人が詠唱を終えると、宝石は爆発を起こし、陽」のキャスターを巻き込む。

その隙に急いで一号の手を引っ張り距離を取った。

「アサシン、アサシンが……!!」

「分かっているよ、ボクが死んだら元も子もないから距離を空けたのさ。

キャスター、悪いが宝具の発動を!!」

「うむ。だがその前に奴のカラクリを分析してから宝具を発動させてもらおう」

言って、*「陰」*のキャスターが懐から赤い液体が入ったフラスコを取り出す。

「弄ばれた悪魔の子よ、今一度目を醒ませ」

その詠唱と共に、フラスコが碎ける。

中に入っていた液体は人の形となり、*陰*のキャスターの傍についた。

「……ち、少し気を抜きすぎたな。」

あのアサシンならば安心だと私が油断しきっていた」

「今も油断しておるぞ、*「陰」*のキャスター……!!」

背後から声が聞こえる。

*「陰」*のキャスターは振り向かずに、大きく後方へ飛躍した。

跳んで五メートル。

その距離を跳び、着地と共に遊人が放った砕けた宝石の破片を取り、魔力を込めた。

「我が人生は何度も謳われる」

再度、詠唱して破片を投げる。

破片は砂塵となり、透明となった*「陽」*のキャスターの身体に付着した。

(成程、透明になっているだけか。

……そういえば、私が時計塔に在籍していた時代に一人変わった男がいたな。



幻霊を降霊させては、他の幻霊と融合させようとした物好き、カナン家だったか？  
 成程成程。末裔がその技術の習得に成功したワケだな)

「さて、遊人。時間は？」

背後の遊人に訊ねる。

「二分も経ってないよ」

遊人の返答になれば良し、と『陰』のキャスターは魔力を溢れ出させた。

「宝具か!？」

『陽』のキャスターは、注意深く彼との距離を空けた。

それが間違いだとも、知らずに。

「メフェイス・ストフェエレス・ゲイテ時を遡る悪魔は詠われる」

刹那、紫黒い光が周囲を包んだ

---

## 偽想直死

江松小学校付近にて、江松小へと向かっていた遊人、一号一行だったが不意に“陰”のキャスターが足を止め、変わらない不遜な態度で全員を呼び止めた。

「待て、少し話がある」

自身に違和感を抱いていた遊人は何が起こったのかを瞬時に悟り、キャスターの方へと顔を向けた。

遊人に合わせて他の二人もピタリと歩を止めてキャスターに視線を向けた。

小さく頭を下げて、彼は三人に告げた。

「今、宝具を使った。

この私、ファウストが契約を結んだ悪魔・メフィストフェレスの力を借り受ける我が宝具……時を遡る悪魔は詠われるにより私は五分ほど前に時間を遡ってきた。

結果から言おう、アサシン。貴様は殺られた」

“陰”のアサシンは驚きをせず、ゆっくりと頷いた。

こんな場でそんな冗談を言う男ではないと、この三日間のたった数度のやり取りで見抜いていたアサシンは彼の言葉を真剣に受け入れた。

そして、受け入れると同時にアサシンが相手について訊ねた。

「敵は？」

「キヤスターだ。姿を消す不思議な力を持っていた」

「？」 キヤスターの真名は判明しています。

英霊よりも格が下の幻霊、不死の魔術師リッチー。

そんな彼が透明な魔術を使ったのですか？

しかしそれでは————」

「相手のマスターにカナンの家の者がいるのだろう。」

カナンは……我がマスターなら分かるはずだがお前達に説明しよう」

眼鏡を掛けた“陰”のキヤスターが説明を始めるのだった。

「カナン家とは、千年近く前から存在する魔術師の家系なのだが彼らは何故か、聖杯戦争が始まる前から英霊同士の魂を融合させるといふ手段に固執しているトチ狂ったヤツらだ。」

彼らに目的を訊ねても『分からない、それが一族の悲願だからだ』との事だ。

まあ……魂を融合させ、その起源を覗き渡すことで根源に到達するのだろうと推測はされている」

「推測？」

「ああ、先程も言ったが目的を訊ねても分からんだからな。

コイツらの家系くらいは、そんな推測をされる一族は」

一号の疑問に「陰」のキャスターが答えて、江松小へと視線を向けた。

「……恐らくだが、幻霊同士の融合に成功させたのだろう。

透明人間、とかどうだ？ しつくりくるはずさ」

成程、と「陰」のアサシンが領きキャスターに訊ねた。

「要は、オレの出番ってコトだろ？」

あまりにも自信に満ちたその言葉。

とても先程不覚を取られた男から発せられるとは思えないが状況は違う。

相手の情報が知らぬ時に手札を切るのは得策では無い。

しかし、今は違う。

情報が渡っている。

それも、切り札を切るに値する状況であると。

誰かが答えるまでもなく、アサシンは鬮體の仮面を外して目の包帯に手をかけた。

「フン、なんだ。戻ってくる前は情けなく殺られたというのに素晴らしい威勢さ」

「皮肉どうも。まあ、今から挽回させてもらうさ。

……情報どうも、キャスター。」

「アンタ、俗に言うツンデレってヤツだろ？」

「なっ!？」

「黙れ黙れ、誰がそんな低俗な性格だ!!」

「陰〃のキャスターが〃陰〃のアサシンに憤慨する。

まるで幼い子供のような怒り方にアサシンは思わず笑みを零した。

気を取り直すべく、わざとらしい咳払いをしてキャスターが遊人に視線を配った。

「アサシンの宝具は使えるのか？」

「うん、思いの外っつーかこの状況においては最適解。

「リフティング一回出来たらクリアくらいには」

「ほう。ならば楽しみだが……なぜ私は省かれた？」

「あの、宝具を開示した日は初日で、キャスター様はその日は……」

「あの後か。成程、理解した」

再度、切り替えて。

「陰〃のキャスターがアサシンに指示を降した。

「〃陰〃のアサシン、宝具を使用するのだ」

「もう使ってるよ」

アサシンは既に、包帯を解きその素顔を露にしていた。

ザバーニリーヤ  
「偽想直死」

穏やかな顔をした、その童顔の瞳は青く輝いていた。  
その綺麗な瞳から見える景色には、赤黒い『線』が写っていた。

## 裏切の報復

江松少校内を覆うように、魔力が渦巻く。

一人の罨等によって仕立てあげられたその場合は、彼にとつての『要塞』。

『陽』のキャスター……不死リッのなり損チーないは、優雅に闖入者が自身の近くに現れるのを待ち構えていた。

自身の魂と混ざりあつたパートナーの幻霊、『透明人間』の力により姿形は勿論、なんとそれと魔術を組み合わせて自身の殺気を消す事に成功した今の彼は無敵そのものであると自負しており、疑うことは無かつた。

これも全て、あの見るに鬱陶しかつた自身の主、バエル・カナンの功勞の賜物である。そう感じている彼だったが、バエルに対してはいつか盛大な仕返しをしてやる、と企んでいた。

——バエルは融合に成功させた時、心臓である箱を彼に渡した。

今ならば安心して渡せれると、この不死者は完全無欠の存在となつたのだと。

この聖杯大戦、分からぬことが多くはあるがそれでも些細な問題だろうと。

彼らしからぬ安堵が生まれてしまった。

故に、その宝具を持つことを許した。

そしてそれを自身の胸の中に埋め込んだ。陽のキャスターは、哀れな狩人気取りを心底から待ちわびていた。

そして現れた。

髑髏の仮面と、眼鏡をかけた男。

“陰”のキャスターと“陰”のアサシン。

その二騎が、何も知らないでこのこと自身が待ち伏せしている、二階の廊下へと現れたのだった。

髑髏の仮面は、その瞳を青く光らせていた。

その『変化』を、この男は低く見積もった。

(魔眼……の類いか?)

なんだ、魅了か?

それとも洗脳か?

しかし——見られるわけが無いのに、やつが魔眼に引つかかるわけもない。

このままサクツと後ろから……!!)

そして、判断を違えた。

距離を置いて戦う、逃げる、何れも選択肢はあつたはずだった。

——だのに、彼はその二つを真つ先に放棄した。



プライドがそれらの策を許さず、慢心が愚考を掴み取ったのだった。

自らの手で葬つてやらんと、戦い慣れない彼の愚考が、愚行として体现された。

一步、二歩、三歩と彼らとの距離を縮めていく。

焦燥、緊張。期待、高揚。それらの感情が混ざり合いながらも足音を殺して陽のキャスターは陰のアサシンの背後へと近付く。

そして、その手に強く握り締めている短剣を振るつた———！！

「魔術師が暗殺者の真似事か？」

構わないが、オレも舐められたモンだよ」

そんな、陽のキャスターを嘲笑うように後ろに振り返り、ナイフで短剣を弾く

陰のアサシン。

火花が散り、腕が痺れ。

困惑で思考が硬直してしまった陽のキャスターは微かに宿った恐怖で後ろへ退いた。

同時に、仕掛けていた魔術の罠を起動させるべく詠唱をする。

「awakening!」

刹那、彼の周辺から炎が放たれた。

迫り来る業火を前に、陰のアサシンは不敵に笑みを浮かべナイフを逆手に握つた。

(斬るつもりか!?)

馬鹿が、どんな手品か知らんがこの炎を消すのはでき——

「地獄の業火よりも温いなら、殺せるな」

陽のキャスターが冷ややかに笑みを浮かべながら、冷や汗を流すが、しかし。

陰のアサシンが炎に向かってナイフを振るい、その炎を消した瞬間に笑みが消え去り焦燥のみ残った。

有り得なかつたからだ。

炎を切り伏せてしまうなど、どこの神話の英雄かと。

『聞こえるか、キャスター』

得体の知れない恐怖を抱く中、彼の脳内に自身の主であるバエルの声が響く。

魔力のパスを通じての念話であるとキャスターは理解しつつも、彼の問いに答えることができないでいた。

その様子を察したバエルは、すぐに話を本題に回した。

『ヤツの眼——アレは直死の魔眼だ。』

ハッキリ言うがお前に勝ち目は無いから逃げる事を勧める』  
バエルの言葉を聞き入れ、ゾクリと、脈が打たれる。

視界に映る生命の線を捉え、なぞればその生命は途絶えてしまう。偶然、時計塔に在学していた時に小耳に挟んだその魔眼の特徴。

透明になっている自身も捉えることが出来るのはどういふことだと、陽のキャスターは戸惑いながらも背を向けて逃走を開始した。

しかし、それを見越していた“陰”のアサシンは“陽”のキャスターの脚元に目掛けてナイフを投擲しており、両足首を穿いた。

無様に床に倒れ、陽のキャスターは直ぐに詠唱を唱えた。

“start<sup>起動</sup>!!” “awaken<sup>牙を刺け</sup>ing!!” “begin<sup>動け</sup>ning<sup>け</sup>!!!”

三つの詠唱と共に放たれるは、雷、炎、地割れ。

雷と炎はアサシンに向かつて。

地割れは自身のいる床に起こした。

少しでも時間稼ぎをして逃げる事を目的に、“陽”のキャスターは魔術を発動させた。

落ちて、床に激突した苦痛が寧ろ彼の思考をクリアにさせる。

そして、一つの疑問が“陽”のキャスターに浮かび上がった。

『ま、待て!! 貴様、令呪は!?!』

令呪で我を転移させる、そうすれば逃げられるだろう!?!』

そう、自身の主のバエルが令呪を使っていないという事実。

令呪さえ使えば自身は逃げ切れる状況。

何故、それを分かっているはずなのに自身の主は使わないのか。

そんな疑問をそのまま、*“陽”*のキャスターは念話にてぶつけた。

彼の訴えにバエルは答えた。

『無論、お前を切る為だ。貴様を無欠の存在であると思つて私もあの箱を貴様に渡したのだが……このザマを見るとどうやら失敗であつたみたいだな。この先にいてもなんの役にも立たんと判断した。』

だから、この令呪は使わずに他のマスターに委譲しようと思つてな』

『なっ……!!? 巫山戯るなよ主イ!』

貴様の采配ミスでもあるんだ、だから、だから我を助ける、義務であるだろう?!』

『否、貴様を助けた所でそもそも協調性が皆無だ。私の言う事も聞かない事がしばしばあつたな?』

いつ、味方を殺すかわからんお前など不必要な存在だ』

バツサリと言ひ捨てられるその言葉に*“陽”*のキャスターは絶望する。

しかし、死は怖い彼は地べたを這いつくばりながら、腕を必死に、懸命に動かした。

死にたくない、死にたくない、死にたくない……!!

そんな、彼の感情がエネルギーとなり速く、速く腕を動かしていた。

「無駄だ、なり損ない。」

もう、終わりだ」

“陽”のキャスターの魔術を殺し、直ぐに後を追った“陰”のアサシン。

そんなに距離は空いておらず、わずか数メートルといったところであった。

「うっ……待て、待ってくれ!!」

そ、そっちに着く!!

我は貴様らの側に着くから、い、命は……!!

我は、我は死にたくないのだ!!」

「————いいや、もう終わりにしよう。」

お前は、ここまでだ」

風を切る音と共にナイフが放たれ、“陽”のキャスターの胸の中央————自

身の命の源である箱を穿く。

穿かれ、“陽”のキャスターは何故か安堵感が胸から湧き上がった。

なぜ、こんなにも安堵しているのか————そんな疑問が只管に“陽”のキャ

スターを襲う。

身体が魔力の粒へと変換され、肉体が崩れ行く中。

「呆れたものだ。不死を追い続けた男、その本心は死にたかつた、だとはな」  
そんな言葉を聞いて、彼は首を横に振った。

「違う、違う違う違う……!!」

我は死にたくない、死にたくないのだぞ!?

何故、何故皆口を揃えて我は死にたいと勝手に言う!?

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ……我は我は死にた——」

口を塞ぐように、「陰」のアサシンがナイフで彼の顎を袈裟斬りにする。

青い瞳には、同情が宿っていた。

最期に、涙を流しながら不死のなり損ないは肉体を崩し、この世を去つたのだつた。

「死にたくない……か。」

なら、心臓を貫かれた時にあのような笑顔を見せるか」

つまらなさそうに「陰」のキャスターは呟いた——

---

資料を纏め、バエルは自室にてカバンに詰め込む。

研究は一先ずいい結果となった事に、彼は満足していた。

が、しかし。

彼の中では消えない疑問が一つ、浮かんでいた。

そう、裏切りの含みのある笑みがバエルの胸中に引つかかっていたのだった。

『やはり、貴方は僕を信用しないのですね』

その言葉が引つかかり、ふと考えた。

（あの言葉……どういう事だ？

何故、彼奴は言つてのけた？

まるで、私の動きを読んだかのように

コンコンと、思考する彼を他所に扉を軽くノックされる。

係員の者か？

疑問を過ぎらせながらもバエルは扉へ向かい、ドアノブを手に取り

る。

ドアを開けると

「やあ、バエル。久しいな」

そこには。死んだ筈の仲間が立っていた。

甘栗色の髪の毛を腰まで伸ばし、鷹のように鋭い瞳。

片手には、煙草を持ってバエルに不敵な笑みを浮かべているその女性は

「カタリナ・キャツシユヴァルト……!?」

“陽”のアサシンに喰われ、肉塊となつたハズの女性魔術師、カタリナその人だった。動揺するバエルは隙だらけ。

カタリナは、ナイフをポケットから取り出して容赦なく腹部を穿いた。鋭い痛みが彼を襲い、バエルはたまらず数歩後ずさり、倒れた。

「時計塔以来だな。」

……ウラギリが言っていただろうに、ホテルから出るべきだ、つてね」

「……何故、とは問わぬ。」

裏切と結託して何か企んでいるんだろうとは予測できる」

「ああ、彼の家は資産家みたいだね。」

2000万ドルを銀行口座に振り込んでくれたさ、だからあつちに着いた」

煙草を口に咥え、カタリナがゆっくりとバエルの元へ歩み寄る。

ホテルに備え付けられている椅子に腰掛け、優雅に煙を吹かしながら、

「……なあ、私達につかないか?」

そんな、提案をバエルに持ち掛けた。

しかし、彼の答えは決まっていたしカタリナもそれは予想済みだった。

「断る……貴様らの下に着くなど御免こうむる。」



その胸ポケットに隠している銃で撃つがいいさ」

「……やはり、君の意思は変わらないみたいだ。

残念だよ、バエル。

——せめて、研究資料は家族に送ってやる」

それだけ伝え、カタリナは容赦なくバエルの脳天に銃口を向け、弾丸を食らわせた。

返り血が彼女の顔に付着し、それを拭った後に裏切がバエルの部屋へと訪れた。

「あ、終わりましたか？」

「ああ、終わったさ」

携帯灰皿を取り出し、火を消して彼女は吸殻をバエルの死体へと落とす。

そして、二人はその場から立ち去ったのだった——